
ひらひらと舞う、楓の葉

如月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひらひらと舞う、楓の葉

【Nコード】

N9516V

【作者名】

如月

【あらすじ】

垓下の戦い。

彭城での討ち合いの末、遂に羌楓軍は項籍羽を下した。

しかしそれは、最愛の想い人であり主君であった、劉邦——
すもも李と引き換えた勝利だった。

深い悲しみは、新しく開かれる扉の鍵。

——恋姫舞う世界の物語。

——劉の血に枷を嵌めた、

—— 太古の愚かモノの御話。

第零葉……………終わる物語（前書き）

久方ぶりで御座います。如月で御座います。

設定の見直しと改善、大幅な推敲を致しました。

初めての方はどうぞ宜しく願っています。

前から、ご贔屓にして下さっていた皆様。

今作も、何卒ご愛顧のほどを宜しく願っています。

第零葉……………終わる物語

「おい……………」

ただ身体を打ち付ける激しい滂沱の雨が、静かに静かに。

赤く赤く激しく、男の頬を伝った。

愛おしげに抱き締められた彼女の、かつて澄んだ輝かしい銀の光を灯していた瞳は閉じられ、顔には蒼色が彩られ始めていた。元は紅く紅く紅潮していた唇も、蒼冷め始め、温かさを失っていく。

—— 脳裏に過ぎるのは、ただ切に共に歩んだ日々。

—— 罅割れた思い出が、ぜんまい仕掛けの時計の様に、終わりを奏でている。

口から漏れた嗚咽は、ぽっかりと胸に開いた大きな穴の様に、虚無を孕んでいる。

「おイツ……………!!」

彼女が何をしたと言ったのか、と男は慟哭を上げた。こうならねばならなかったのか。何故。

咆哮、声に成らない悲鳴。そこに残ったのは悲哀なんて陳腐な言葉で顕せるほど単純なモノではなかった。

—— 男は、悔むのか、悲しむのか、憤るのか、どれも選べずに、ただ唇を噛み締めた。

あるのは、唇から確かに、つつ、と伝う、唯ひとひらの、楓の葉。瀑布の様に降り注ぐ雨などでは決して薄まる事の絶対に無い、血で血を洗う、復讐の誓いの証明。

艶やかな桃色の髪に、深紅の涙が珠のように伝う。

—— 凍えるように震える口先から、震える言の葉が滑り落ちた。

「諦めてなんか、いませんから」

ひらひらと舞う楓の葉。

「未だ」

これは、唯一つ。もう華を咲かせることの無い、古寂びれて死んだ幽かな樹の、最期の深紅の葉。

睫毛が一瞬だけ動いた気がして、生気を双眸に灯す。

しかし、また小さく虚無を瞳に戻して嘯いた。

「たった二人だけの、この、『大切な思い出』を」

ぐらり、と身体が揺らいだ。

黒い黒い世界の淵を、ただただ滝壺へ吞まれていくように、宙に投げ出されて。

男は、堕ちているのを感じた。落下と言った方が適当か。

しかし、それが、何を意味する確認する気もなかったし、気にすらならなかった。

地獄か。無か。逝きつく先にあるのは。

だからどうと云う事は無い、男は呟いた。

胸にあるのは、抱えて溢れんばかりの楓の葉と李の花びら。

次なる世界へと、そのまま。

第零葉……………終わる物語（後書き）

まずはプロローグ。

ご指摘やご指南、誤字脱字、改善点や嫁宣言から世間話まで幅広く感想にお寄せ下さい。

第一葉……ここから始まる（前書き）

第二話です。

ちよいと変えてみましたが、行間を開けたほうが見やすいですか？

第一葉……………ここから始まる

「美しい…」

誰かがそう呟いていた。咲き誇る桃の花は、見る人々の心を奪った。それほどに優美。

風が吹けば花びらが舞い踊り、光り輝く陽の光を受けて美しく映えた。

涼しげな木陰、唄う草木。安寧を謳歌する景色。

息を大きく吸いこんで、吐き出す。よし、と小さく嘯いて、少女は二人の少女を引き連れて歩みだす。

一人は、桃色の髪を靡かせ、物憂げな瞳に希望を湛える。

一人は、濡れたように艶やかな漆黒の髪、凜としたその瞳は希望へと傳く。

一人は、橙の髪の上に虎が吠え、無垢な瞳は希望と共に。

腰に下げた徳利の中で、とぶん、と揺れた水面。桃の花びらが触れて、波紋を呼ぶ。

三人は立ち止り、並々と透き通ったそれを杯に注ぎ、掲げる。

「我ら三人、姓は違えども姉妹の契りを結びしからは、心を同じくして助け合う事を誓う。同年、同月、同日に生まれることを得ずとも、願わくば同年、同月、同日に死せん事を——」

玲瓏な声が響く。風が止んだ、その音色に聞き入った様に。

カッン、と堅い音が盃から発された。

美酒の匂いが漂う。晴れ渡る蒼穹が、その芳しい馥郁を欲して、雲を何処かへと吹き飛ばす。

麗らかな日差しがより一層心地よく、三人を祝福するように照ら

した。

——亭々とした桃の木の枝に腰かけた男は、鼻をすんすんと鳴らした。

鮮やかな朱色の髪。深淵を想起させる諦念とも無為とも感じられる、泰然自若とした白銀の瞳に、猛禽を思わせる鋭い眼差し。伶俐さを強調するような銀縁の眼鏡。十一尺弱の体軀はすらりと華奢だが、携えた九尺ばかりの両刃の剥き身の刀とも相俟って、一本の鋭利な槍のようだ。

男は一つ大きな欠伸をして、次に眼鏡を服の布で拭く。

そのまま細い眼で三人を見据える。大した距離も無いが、裸眼では世界が霞んで見える。

もう一度、眼鏡を掛け直して見やった。

銀の眼鏡越しに見えた姿は桃色の髪。

風に揺られて大きく波打つその少女を大きく瞠目して、男は息を呑む。

静かに佇む少女は髪を掻き上げて、微笑む。

自らに向けられたものではないと解っていながらも、この手の中で果てた少女が断続的に頭の中で蘇って、重なって、自分に向けられたものだと思いたくて、錯覚する。

手が震える。否、身体が、震えている。武者震いか、それとも戦慄か。

「いえ、これは……定め」

——男は臉を伏せて、鋼鉄の爪で手首を掻き切る。

——男は滴り落ちるそれを、高々と掲げた。

——風が一陣。

「きゃっ!？」

少女は可愛らしく悲鳴を上げ、突然の突風に足元を掬われ、しゃがみ込んだ。

元来た道を、先に歩み出していた黒髪の少女が気付いて、側に駆け寄った。

「大丈夫ですか!？ 桃香様！」

「愛紗ちゃん……」

桃香、と呼ばれた少女は、何でも無いよ、と返して苦笑しながら立ち上がった。

橙色の髪の、背も桃香よりも幾分か低い少女も同じく駆け寄る。

黒髪の少女——愛紗の心配そうな表情とは相対的に、橙髪の彼女

——鈴々のそれは楽天的な笑みに満ちている。

靖王伝家が腰の徳利に当たって小気味良く鳴った。

二人を一瞥すると、頭に何かが触れた、紅葉。

怪訝そうに見上げて、桃香の瞳に赤い赤い赤が映り込んだ。

「わぁ……………!」

「壮大、ですね……………」

「すごいのだ……………」

螺旋を描くように、竜巻に巻かれて紅葉が舞う。

憑かれたように只、只管、その紅の弾幕を見つめる。

空を仰ぐと、視界を覆わんばかりの紅葉の葉。

桃の花びらと交わって漂う紅の葉。

愛紗の嘆息を皮切りに、刹那だけ、音が消えて、風に攫われた葉と花びらの舞踏が三人を呑んだ。

興奮を醒まさぬようにと、加速した風は吹き荒れて、轟音と共に三人を打ち付ける。

「愛紗ちゃん！ 鈴々ちゃん！」

「桃香様！」

「桃香ー！」

地から足が離れそうになるほどの飄風の中で、繋がれる手と手と手。

下から、上から、左から、右から、東西南北から、前後から吹く、空気を裂く風は、一転、全て下からに集中して。

吹き上がる。浮かび上がる。地へと繋がれていた足は離れて。繋がれた手は離れず。

「ねえねえねえ！ 何これえ！」

「解りませえん！ つぺ、口に入った！」

「あははははあ！！！！ すごーいのだ！！！」

桃香が半分歓喜、半分涙目で喚いて、愛紗も謎の現象に戸惑いしつつも冷静になるうとするが葉と花びらが邪魔して、鈴々が興奮気味に叫んで。

未知の体験に、三者三様の想いが生まれたが、それも段々と一つに成って行く。

顔を見合わせて、喜色を満面に浮かべる。

『楽し——い！』

叫びが重なって、やがて笑みが沸々と込み上げて、激しく加速する轟音へと重なるように、哄笑の音が響く。口元に浮かんだ解頤は消えることは無くて、少女らしい無垢な表情を浮かべて。

はためく服の音も、ぶつかる武器の甲高い音も、全て笑い声に呑まれた。

—— 下から吹き荒れる柱の様に縦長に集束した、桃と紅の暴風。

包みこまれたのも束の間、勢いが徐々に薄れていく風。

ゆっくりと、地へとぺたん、と尻餅をつきながら着地した。

それでもまだ高揚感は満ちていて、興奮は醒めない。

楽しそうに歪んだ口元は直らない。

あはは、と腹を抱えて、ひらひらと降り注いでくる楓の葉と桃の花びらに埋もれる。

桃の花びらと楓の葉。

季節を、時を、超えて。

少女たちへと。

—— まだ。未だ。未だ時は満ちてはおらず。

—— 高みへと昇れよ劉の血。

—— 天を頂け。天を戴け。その血の赴くままに。

第一葉……ここから始まる（後書き）

誤字脱字などのご指摘や、「意味わからん」など宜しくです。
できるだけ、伏線に触れずに内容開示致しますので。

第二葉……異国情緒（前書き）

前作の下地とした書き足しを張ります。

どうも。瞼の重い如月です。

どうですか、行間を意識してます。

第二葉……………異国情緒

燃え盛る紅蓮の焰。荒れ狂う煙に、下卑た嗤い声。
広大な土地を、黄が、塗りつぶしていた。

聞こえるのは、泣き声、断末魔、燃える音、夥しい人馬の唸り声。
落ちる涙は、波紋を描く。

見るも無残な、血溜まりに。

私は、何もできない。

私には、何もない。

武もない、文もない。

あるのは、血筋だけ。

「桃香様、お下がりください！」

「桃香、さがるのだ！」

守られなければ生きてゆけない、脆く儚いモノ。

「う、うん……」

だから、何も守れない。

私があれば、誰もが、顔を綻ばせて喜び、涙をぬぐい、武器をとる。

だけど、全てが終わった時、生きている人は少ない。

私がつと、強ければ……彼らは生きていたかもしれない。

私が弱いばかりに。

「終わりました、桃香様」

血をぬぐいながら、愛紗ちゃんが駆け寄ってくる。
肩には、偃月刀。

弱を守り、悪を斃す、正義の剣。

「どうされました…?」

なんでもないよ。

「ただ、自分の無力さに悲しくなっただよ」

すると、愛紗ちゃんは困ったような表情をした。

煙がもくもくと立ち昇っている。

私は虚ろに見つめる。

「桃香様は、無力なんかじゃありませんよ」

「無力だよ……! 村一つ守れない………!」

思わず大声を出してしまう。

目を見開いていた。驚いたんだろう。

ごめんね…。

「いえ…」

頭を下げる愛紗ちゃん。ああ、頭を上げて。

泣きたくなってきちゃった……。

「桃香、元気を出すのだー!」

私を励まそうと、鈴々がたくさんの葉っぱを持ってきた。
紅葉……どこにそんなにたくさん……。

私の脳裏には、大分前の、誓った時の紅の嵐を思い出した。

「ありがとう、鈴々ちゃん。どこにあったの？」

「こっちなのだー！」

そして手の中のは、勢いよく上空へと投げ捨てられ。

——視界を紅葉に覆われる中、私は強い力に引っ張られた。

——すると、私の手を、引いて駆けだした。私も、駆ける。

——これは、血に染まりたる葉。嘆きなさるな、力を欲すなら、叶えてあげましょう。

精神を落ち着かせるような、静けさの中。

「こっちなのだー！」

私から離れて、嬉々と、楓の木を指さす。

それは、息を呑むほど美しく、雄々しい巨大な、朱に染まった紅葉だった。

風に揺れる木の葉。不動な、静かな幹。

私は、ただその荘厳さに圧倒されていた。

心を打つ心拍が、緩まっていくな。

震えた指先に、熟した色の紅葉の葉が触れて。

「桃香様、何者かがおります」

小声で愛紗ちゃんが、耳元で囁く。
その右手は、既に得物を握っている。

「待つて。まだ悪い人かどうかなんて分からないよ」

「大丈夫なのだ！ 拾ったときに、集めるの手伝ってくれたのだ！」
「だって。大丈夫みたいだよ」

「ですが……！」

「いいから。それにさ、いざとなったら護ってくれるんでしょ？」

ああもつ、と渋々納得してくれた愛紗ちゃんを、片手で制して、
私は歩みよる。

木に凭れた静かな人の影に。

「あのー」

私は声をかけた。男の人のようだ。

すっごい身長が高い。私の頭何個分か分かんないくらい違つ。
目を瞑っているみたい。

「あのー……」

目の前に楓の葉がよぎる。私がそれを弾こうとして――
――風が少し強く吹いた。

「あ」「何用ですか」

起きていたようだ。

綺麗な声だ。少し低いけど、女の人みたいに澄んでいて。その顔も、男の人のようにゴツゴツしてなくて、整って綺麗で。銀縁の眼鏡が知的な雰囲気を出していて、どこか話しかけづらくて。

でも私は、一歩踏み出した。

「はじめまして、私の姓は劉。名は備。字は玄德。貴方のお名前は」と云うんですか？」

彼が瞳を開いた。その白銀に吸いこまれるようで。

「桃香様！」

走り寄ってくる愛紗ちゃん達。大丈夫だよ、優しそうだし。だから、黙って手を振った。焦りと心配で表情をいっぱいにしてる。

……もう、せっかちなんだから。

「はじめまして、劉備。我が姓は羌、名は楓、字は軍」

「キョウフウ、イクサ……さん？」

「是」

羌楓さんは、優雅にうなずいた。

朱色の髪が風で揺れて、彼は鬱陶しそうに前髪をよける。降り注いだ紅葉が、その朱色の髪に恐ろしく似合う。

異国情緒漂う銀色の双眸と朱色の髪が、どうにも人から乖離しているように見える。並はずれた長軀も、携えた両刃の長剣も、恐ろ

しい程整った目鼻立ちも蒼白い肌も、それを際立たせる為の要素でしか無くて、一つの究極的な『歪』な美しさを物語っている。

人に非ざる者。正にそんな言葉が相応しい。

暫く静観していた愛紗ちゃんが、警戒を解き始めたようで、偃月刀を下ろした。

「——もう。やれやれ、桃香様が許したのならば、私たちも許さなければいけないのでしょうか」
「そうなのだ！」

ちよつとばかり愛紗ちゃんは渋々と、鈴々は元気よく彼の前へ出る。

「私の名は関羽雲長。宜しく、羌軍殿」

「張飛なのだー！」

「羌楓です」

澄みきった水面のようなその表情は、どんな悩みも吸いこむように。

胸の蟠りを、少し、前向きに解してくれた。

彼は天を仰ぐ。銀の眼鏡の縁に陽の光が反射して、眩しくて少し瞼を閉じる。

それからまた開くと、真摯な瞳と視線が合った。
羌楓さんの眼が、スッと細まる。

「劉備、懐かしむ前に、やることあるのではないですか？」
「え………？」

私のその様子に、彼は満足そうに笑った。

「分かりますよ。だから紅葉を見に来たのでしょう」

「……うん、そう、かもしれない」

その全てを包み込むような瞳は、私の全てを見透かしているよう
で。

「でしょう。…なら、お行きなさい」

彼はすつ、と村の方角へ指をさす。

私たちの視線は、そちらへ向いてしまう。

「決して貴女『方』は弱くない。ただ、ちょっとばかり、足りない
だけ。何が、とは言いません。ですが、貴女には前を向いて人を
救い、戦う義務と使命がある」

彼は私たちに背を向ける。朱色の髪が翻って、風に靡いて波打っ
た。それが楓を彷彿させた。

「千里の道も一歩から。やらねば、始まりません」

……そうだね。

その通りだよ、羌楓さん。
進まなくちゃ。

「ありがとうございます、羌楓さん」

歩き出す。

踏み出す足取りは軽い。

携えた靖王伝家は重いけど、関係無い。

「良い眼になりましたね」

ほんとに、ありがとう。

笑顔で、頷いて見せる。

それを見た彼も笑み返してくれた。

「ちょ……ちょっと、桃香様！？お待ちになってください！」
「待つのだー！」

こんな私にも、助けを求めている人がいる。
せめて、ほんの少しでも役に立つ為に。

向かう足取りが、早く、速く、風が背中を押す。

腰に下げた靖王伝家が、嬉しそうにかたかたと音をたてた。

—— お行きなさい。劉の名を冠する者よ。この遙かなる
大陸に光を灯す者よ。

—— 平安を齎す者よ。

—— 貴女の為ならば、私は、盾となりて敵を塞ぎ、剣と
なりて敵を屠り、矢となりて敵を貫き、鉾となりて敵を薙ぎまし
う。

—— 《軍》の名に於いて。

—— 我は楓、桃の劉を支える者故に。

第二葉……………異国情緒（後書き）

感想をお待ちしております

……そろそろメインに入れる気がするんだ……

第三葉……………英雄の足音と少女の溜息（前書き）

第三葉……………英雄の足音と少女の溜息

雨の上がった、燦然と日が照らす昼下がりに。

流浪を繰り返す桃香達の陣屋に向けて、軽快な音を立てながら簡素な鎧を着込んだ女が馬で闊歩していた。

周りには同じの鎧を着固めた屈強な男達が付き添っている。

「……………あそこですか」

緩く優しい丁寧な物腰とは裏腹に、その表情は緊張で凝り固まっている。

岩肌の覗く山の斜面の、木々が連なる、平らな上に陣が張っている。

迫るのに好し、守るのに好し、視るのに好し、視られぬのに好し、逃げるのに好し。

上策ですね、と一人嘯き、近づいていく。

付近に止まり、警護の兵に気付かれる為に、態々見える場所で立ち止まる。

臉を閉じて待つ事暫し、気付けば、警護の兵が女を囲んでいた。

警戒の色を露わに、各々得物を構えている。

女は、気付けなかった事を心で恥じて、顔には出さずに、凜と声を放った。

「右中郎將、朱儁公偉に御座います。貴殿等義勇軍の大將たる劉玄德殿と話したいのですが」

そこで、慌てて兵士たちは包囲を解き、一箇所に集まると陳謝した。

構いません、と応えて、女——朱儁は先を急ぐよう促した。

「暫し御待ち下さい、只今取り次いで居りますので……。ささ、此方に腰を掛けて下さい」

「面目御座いません。では、御言葉に甘えて」

兵士たちも、突然の官軍の將の来訪に戸惑っているようだ。

当然だ。元は農民と庶民ばかりの義勇軍なのだから。

……しかし、彼らは黄巾になるか義勇となるかの瀬戸際の者だったのだから、王朝引いては官軍を恨んでいる者も少なくない筈なのに——内心では思っている者も居るだろうが——、朱儁と対峙しているのにそれを億尾にも出さない。それだけでも大したものだ。

更に良く訓練が為されていて、それを良く受けている。

これでは、官軍よりも練度が高いではないか、と困ったように頬を掻いた。

出された茶を啜り、朱儁は一息ついた。

そこで、自前の兵士の一人が、耳元で囁いた。
着たようです。朱儁は黙って、解つていると言わんばかりに頷いた。

瞼を開けて、義勇軍の大將たちを見据える。

「お待たせしてごめんなさい。始めまして、私が劉備です。劉備、玄德。こちらが愛紗ちゃん——関羽、もう一人が鈴々ちゃん——張飛です」

「お初にお目に掛かります、我が名は関羽。関雲長に御座います」
「鈴々は張飛なのだ！ 張翼徳なのだ！」

入ってきたのは、三人の少女だった。

朱儁が見るに、二人は勇猛。中心の、桃色の髪の少女は、未だ発展途上と言ったところか。

とは言え、勇猛な二人を惹き付けて兵士を鼓舞し従える仁徳だけではなく、武力も知力も、伸び代を持っている。

あの華々しい勲功はこんな年端も行かないような少女達が、と朱儁は齒噛みしそうになったが、未だ自分も若いんだと考え直して心持を明るくした。

少し気分が良くなった気がした朱儁。

「此方こそ始めまして。私は右中郎將の朱公偉と申す者です。此度は、御会いできて僥倖です」

頭を下げた官軍の将に対して、桃香は内心焦った。自分のような無位無冠の者に頭を下げるような官軍の将なんて、聞いたことも無い。前代未聞だ。

噂通り、下賤にも隔たりなく接するようだ、桃香は改めて感心した。

また、その様子から何かを感じ取ったらしい愛紗は、部下を呼ぶと、耳元で二言三言と囁いた。

命を受けた義勇軍兵士が一礼して走り去るのを見送って、朱儁はその真摯な黒い瞳を三人に向けた。

「突然ですが。劉備殿、我々に力を貸して頂けませんか？」

特に慌てた様子も無い桃香、ある程度は予想していたようだ。愛紗はやっぱりか、と顔に書いてある。

愛紗は桃香に目配せして、桃香が頷くのを見て、

「構いません。最近になって、黄巾の連中も骨のある者が出てきて、攻めあぐねていたのです」

「ええ。ここいらには少し普通の黄巾とは違う、別の意味で攻め難い連中が巢食っているのですよ」

「ふえ？ 別の意味ですか？」

「原始黄巾党、と呼ばれる軍団をご存知ですか？」

「——— そうですね。庶人曰く、原始黄巾党は、虎のように勇猛にして秋の稲穂のように礼儀深く、名誉と誇りを重んじて悪を駆逐する、とか。まるで英雄のように讃えられていました」

「そしてその筆頭が、波才、と云う男なのです」

「波才？ 聞いたことある？」

桃香が首をかしげた。二人とも首をかしげている。

「ありませんね」

「ないのだ！」

「そうでしょう。彼は、多くを語らない。未だ『逆賊』でない、黄天を掲げた『革命軍』であつた時代の勇将ですが。次第に他の黄巾党が悪逆非道を行い、民を虐げ土地を屍を踏み躪り始めると、逆風

が吹き荒んでくるようになりました。すると、忽然と配下と共に韜晦してしまったのです」

「どこへ？」

「さあ。しかし、その間にも多くの悪逆の同胞をもその手に向け、彼は未だ張角・張梁・張宝の生存を信じ続けあらゆる敵と戦っているのです。同じ黄天の士とも、蒼天の士とも」

「…凄絶だね」

「更に波才軍は、潁川周辺の農民を呑みこみ、今も尚爆発的にその数を増やし続けている」

「それだけ、信も厚いのでしょうか」

「まんま、英雄なのだ」

「……………はい。だから攻め難いのですよ。何も考えずに奪って殺して拐って犯すだけなのならば、容赦無く滅ぼせるのですがね。彼は、彼等は、真面目にこの大陸の未来を憂いているから」

「できるなら、戦いたくないね…」

憂うように桃香は呟いた。

嘆息交じりに朱儁。

「しかし、彼は多くの命を刈り取ってしまった。彼が腐った官軍や領主だけを襲撃していただけなのだとしても、腐っても官軍は官軍。国賊は国賊ということです」

「だから、滅ぼさなければならぬ、ですか。何とも世知辛い」

「全くだす。だから力が多く必要なのですよ。彼を、正しい道に導くために」

彼女の瞳は決意に満ちている。膝の上に膝を乗せ、顔の前で手を合わせる。

試すような、挑むようなその眼差しが、三人の英傑に注がれた。

沈黙が場に横たわると、それを桃色に裂く。靖王伝家が、陽を反射して煌めいた。

桃香は身を乗り出した。

「やります。むしろやらせてください！」

「そう言って戴けると、有難い。どうかご助力を頼みます」
そう言って深々と頭を下げた。

上がった時には朗らかな優しい笑みが浮かんでいた。

「私の真名は、岩鏡。善き友と成れるであろう劉備殿、関羽殿、張飛殿には是非」

「宜しくね、いわかがみさん。私は桃香だよ」

「此方こそ宜しくお願いいたします。岩鏡殿。私は愛紗です」

「鈴々なのだ！ 宜しくするのだ！」

すると朱儁——岩鏡は深い笑みを見せた。

安堵と、純粹な歡喜。

「これで一安心ですね、朱儁様」

朱儁配下の兵が、ほっと胸を撫で下ろしながら言った。

岩鏡は膝をはた、と叩きながら立ち上がる。

陣屋の扉を開けると、所々ぴょんと撥ねていた黒い髪が風に靡く。涼しげに眼を細めて、振り返った。

「ええ。一旦は我々も陣営に戻ります。合流の詳細は追って連絡します。では」

彼女が去ってから幾許か。

既に陽は西の彼方へと向かい、月の淡い光が地上を照らす。

官軍の將の来訪を終えたことで、張りつめていた緊張感が解れていった。

再び劉備率いる義勇軍の陣地に、静寂がその身体を横たえる。

蠟燭の灯りが揺らめく中で、桃香は靖王伝家を磨きながら、ふとした寂寥感に苛まれていた。

最近是人出が足りず、一人になることも多くなった。

今は、愛紗は何時でも出動できるように兵站を。鈴々は兵たちの鼓舞を。

桃香は、久しぶりに感じるその寂寥感を拭いきれず、不安げに眉をしかめた。

溜息が漏れた。

上に翳し、その金色に輝く刀身に映った自身の顔を覗き込んだ。
映ったのは只の少女。

それは劉備玄德ではない。

義勇軍の大将である『劉備玄德』ではない。只の『桃香』と云う少女でしかない。

恋しげに、切なげに漏れたのは、桃色の溜息。

岩鏡の出動要請はいつ来るか分からない。

不謹慎だとも知りながら、桃香の脳裏には数多の紅葉が舞っている。

ひらひらと舞う楓の葉。

「軍さん……」

溜息が桃色なら、頬も心も桃色。

虚空に投げ出された霧散するだけの言の葉は、僅かに震えていた。
彼が居れば、この不安は和らぐのだろうか。

——和らぐだろう。桃香は答えを知っている。知っていて、
敢えて自問自答した。

だから。

「何が『足りない』か解った時、軍さんは、来てくれるはずだから」
それまでは、それから、胸を張って『劉備玄德』でいなければ
ならない。

——煙の臭いが、陣屋に、僅かに、臭った。

——堕ちた『英雄』の影が、直ぐ其処に。

第四葉……………英雄の産声（前書き）

更新が遅れてしまいました。 第四話です。

第四葉……………英雄の産声

「波才の兄貴」

砂煙の中を、ざんばらな金髪の女が、一人の男に歩み寄る。

背景には紅蓮の焰と死屍の山がある。

死屍の山に、『朱』の文字が刻まれた旗が突き刺さっている。

その僅か中腹に腰を掛けていた波才は、俯いたまま呼び声に首も向けずに声を返した。

「何だ」

「いいのかよ？ 朱儁軍は腐った官軍じゃねえって、波才の兄貴も知ってたはずだろ？」

「ああ」

「朱儁の軍は皇甫嵩の軍と同じで、民に優しく義に厚いんだろ？」

なら、こんなのは兄貴の信条に反するんじゃないか？」

『朱』の旗の翻る、死屍の山を指差しながら言う。しかし波才は静かに、何も語らない。

何でもいいけどよ、と後に付け加えて、女は巨大な戦斧を担ぎ直した。

顔は燃盛る炎を向いているが、視線は真っ直ぐ俯く波才を貫いている。

批判する訳でも称賛する訳でもないその純粋な問いかけに、波才は頭を抱えて、表情の闇を濃くした。

「確かに、反するな……………」

「なら、なんでだ？ 俺にくらいなら、教えてくれてもいいだろ？」

「そうだな……………」
顔を上げた波才の表情は、炎の影で良く見えないが、ひしひしと肌に伝わる程に強い感情を秘めていた。

面食らう女性。

そこには、強い恐怖と怯えと後悔があった。

「はつきり言えば」

一旦切つて、波才は空を仰いだ。

その瞳から一滴垂れたように見えたのは幻だろう。

そんなもの、彼から枯れる程に尽くした。

「怖いんだ」

「怖い？」

思わず聞き返した。獅子の様に勇猛な光を宿した瞳が、大きく開かれた。

少なくとも女が初めて波才と出逢つた時は、そんな感情とは無縁なように思える程に使命に燃え、義を唱え続けて、蛮勇などではない確実な剛勇さを持って居た筈だ。

だから、今の無口でガタガタと震える波才は、本当に本人かどうか疑わしいほどであった。

「何が怖いんだ。波才の兄貴は、俺の知り合いの中で俺の次に強いぜ？」

「……………」

「ちっ、何だよ？ 何が怖いんだ」

「——全てが、だ」

「全て、だつて？」

「我に仇為す全ての存在が」

「らしくないな。いつもの兄貴らしくない」

とは言え、波才の異変には以前から気付いては居た。

大分前から、張角・張梁・張宝と連絡が取れていない。

それから眼に見えて白髪が増えてきた。振るう剣速も落ち、飯を食う量も減った。糞れ、酒を良く呑む。自分を諭すように自己暗示をして、独り言も増え神頼みするようによく祈っている。

口には出さなかったが、眼に見えてその変化は顕著だった。

死臭を含んだ温い風を頬に浴びながら、此処にはもう白波賊をしていた自分を諭して共に歩もうと言ってくれた『波才の兄貴』は居ない、ということが、心に染み込んできた。

「愛想を尽かしたか？ …見捨てないでくれ、などと云う事も云う権利も我には無い」

口と表情がまるで一致していない。

隈で真黒な目元、白髪之交じった黒髪。真っ赤に腫れ上がった紅い眼。

嘗て格好良いだろうと、目元に赤く塗っていた化粧も、汗で流されて血涙にしか見えず。

独りになってしまうと孤独に怯える童子のような面構え。

波才を慰めてあげられない自分へと、何時までも女々しく弱音を吐く波才への腹立たしさ。また、寂寥。嘆かわしくて、辛くて、切なくて、心が締め付けられるように軋む。

「……安心しろよ。俺は、兄貴を、見捨てたりしねえよ」

二人の間に沈黙が降りる。それは以前のように心地よいものではなくなっていたが、それでも二人は動かない。ただ、縋りつく側が変わっただけ。立場が逆転しただけ。いつも通りだ。

ぐっ、と女の拳が強く握られる。手の平が赤く赤くじわりと滲んで、一滴の深紅が滴る。

あの時、確実に助けられた。この男に。

部下に見捨てられ、仲間に見捨てられた俺に、敵ながらに斬りつけられながらも手を差し伸べてくれた。

俺は知ってる。本当の兄貴は勇猛果敢な強者だ。心優しく、民を慮る事の出来る、本当の英雄だ。

だから、絶対にこの男を助ける。俺に‘足りなか’った『叶えない夢』を与えて、自分だけ蚊帳の外へ退場なんて赦さねえ。

この際、王朝なんて、どうなったっていい。それで叶えられるのならいくらだって利用してやるし、叶えられないんだったら、この戦斧で叩き潰す。

重要なのは、兄貴達が追い求めてやまなかった夢。民の平穏と戦無き地平。

そして波才の兄貴がそれを成し遂げること。
絶対に叶える。この名に懸けて。

—— 徐公明。この俺の名に於いて。
—— 鬼灯。この俺の真名に於いて。

血を手の平に擦りつけながら、傍らの戦斧を拾い上げる。

「俺は、徐晃だ」

—— だから、俺は斃す。

聞こえる足音。人馬の駆ける音、嘶く声、怒声。

波才の兄貴を殺すつもりなら、須く悉く万物一切、俺の斧の錆だ。
護り抜いて、生き抜いてやるよ。

波才の兄貴は、俺なのだ。

第四葉……………英雄の産声（後書き）

徐晃、でました。

波才と抱き合わせ販売中です

第五葉…………… 舞踏会への赤絨毯（前書き）

繋ぎで御座い。

分かりにくい処があれば書き足しますので。

第五葉……………舞踏会への赤絨毯

「御伝えしますッ！」

暗がりに煙の臭いが渦巻く森の中、一人の兵士が転がり込んできた。

兜には矢が刺さり、腕からは血を垂れ流している。

（最悪の予想が的中したようですね）

ガタガタと震える兵士を見て、冷静に朱儁は分析する。

「貴方はどの陣でしたか？」

「だ、第一陣です」

どうやら最も劉備陣営に近い位置に配置した陣がやられたようだ。正直甘く見ていた。まさか最も近い陣がやられるとは。おまけに速い。そして、これから第二陣へと波才軍は攻撃を開始するだろう。

第二陣が壊滅すればもう朱儁軍は破滅だ。

成程、大体解った。

そう返して、朱儁は踵を返そうとする。その後ろ姿に負傷兵が眼を大きく見開く。

傷口にきつく布を巻かれ、付き添う近衛の兵の馬の後ろに乗せられながら驚くように声を投げた。

「何、問題ありません。元々その為に出向いたのです。ただ、休息が少し縮まった程度」

丁度その時、林を静かに駆け降りてくる人影が。

向けた背を、再び戻した。流石、と口角を上げた。

渡りに船と云うよりは用意周到なのだろう。判断が早い。

「朱雋様。我ら劉備配下、出撃可能です」
「そのようで。我々は――」

はっ、とその義勇兵は敬礼して、下がる。

その背を見送って、木々から木の葉が舞い落ちるのを見つめる。

さあて、と岩鏡は頬を両手で張った。

乾いた音が響いて、馬に鞭打った。

「桃香様、どうやら予感は的中したようですね」
「そうだね、愛紗ちゃん。出陣の用意は出来てる？」
「無論です。いつでも出来ます」

暗闇に呼ばれて陣屋から出た桃香は、夥しい煙の臭いを感じていた。

愛馬の手入れをし終えた愛紗も、同様に崖下を見下ろしている。
鼻腔を擽る灰色の煙が何ともむず痒い。

彼女たちが立てた予想は至極簡単なものだった。

話を聞いている間に考えた。と云うよりも真逆、直感だった。

波才は、機を見るに敏、情報戦に余念の無い英傑。

ならば、朱雋が席を外したその隙を見逃すはずがない。

朱雋も中々の將軍であるから、細心の注意は払ったのだろうことは疑いようもないが、ただそれが波才に一步及ばなかっただけ。

此処からは未知の領域。此处から向こうは、自分と同じ思いを持つ筈の英雄との舞踏会。

踏み込む勇氣はある。あると、桃香は思っている。

右手に握る靖王伝家に力が籠る。左手に握る空気が生温い。

その生温い空気が、出来るのかと試す様に、己の全身を舐め上げる。背筋に冷たい汗が伝う。

奥歯を噛み締めて、震える心の中の自分を端に追い遣って、勇み立つ自分を表舞台に。

「さて、と。じゃあ行こうか。助けを求める、死地へ」

「そうですね。桃香様には、指一本、触れさせは致しません」

そう言えば、昔よりも愛紗は落ち着きを手に入れた。

あの瞳のように、彼女は静かな水面の如くに。

（それも貴方の影響なのかな、軍さん）

彼が齎したものは、桃香にも愛紗にも鈴々にも大きい。

再び見える時、あの白銀の殺意が色めき立つ時、その背中を見れているのだろうか。

敵になつたらと思うと、ぞつとしないが、不思議とそうはならない気がしてた。

「輜重は近隣村へ避難。放った斥候も帰還。準備が整ったのだ」

考えに耽る桃香の左に、鈴々が立った。馬は嘶き、呼吸は安定している。

隣には、桃香の愛馬。毛並み鮮やかな馬だ。

おかえり、お疲れ、と姉貴分二人から労われ、鈴々も満更ではなさそうだ。

「朱雋様は、大きく迂回し第三陣と合流する模様です。劉備様」
「やっぱりこの煙は第一陣から上がってるんだね。こっちに來ないかな？」

「既に陣の位置は看破されているようですが、ここを攻める代償はでかいでしょう。ならば自動的に第二陣に矛先が向くのは必然」
「つまり、挟撃策、なんだね」

そう言う桃香の表情は暗い。

「如何なされました？ 桃香様」

「岩鏡さんは、將軍だから当たり前なんだけど……」

「第二陣を見捨てるのが、忍びない？」

「うん……」

「桃香姉ちゃんは優しいすぎるのだ」

「解ってる、解ってるよ……」

俯くその姿は、慈悲か優しさか、それとも傲慢か、甘さか。

どう応えることも出来ず、何とも言い難いその空気に、煙たい風がとぐろを巻く。

時刻は一刻一刻と迫る。

桃香は、袖で目元を擦って、きつと前を見据える。

光る水粒は、恐らく煙の性だろう。

『桃香』と云う少女の想いは不要。
今からは、『劉備玄德』だ。

兵たちに向き直り、微笑みかけた。

「さあ行くよ。刹那さえも惜しいからね」

「皆、全速全身だ。疾風よりも早く駆けよ。木々など、我らには何

の障害にも成り得ない」
「気張って行くのだ！」

第六葉……超えへき壁（前書き）

展開も更新も遅くてすみません。

第六葉……………超えべき壁

桃香達が闇夜のしじまを乱すことなく駆け抜け、朱儁軍第一陣営に到着した頃には、少しばかり東の空に朝日が差し込み始めていた。否、正しくは、朱儁第一陣営『跡地』だろうか。

一瞬、其処が朱儁から言われた場所かと疑うほどに、其処には何もなかった。

残っているのは、地面に既に乾いてこびり付いた血潮と折れた朱儁の牙門旗程度。

愛紗は唸り声を上げた。

「どうやら波才とやらは兵法にも通じているようです」

辺りを見渡しながら、桃香は柔和なだけでは無いその眼を細めた。此処に陣を張らせたくないのだろう。休憩出来ぬのは騎馬にとつては致命的だ。

黎明を迎えたとは言え、未だ辺りは暗い。ちよつとした暗がりはまだ深淵の闇だ。進めば罠に嵌まり、後退すれば挟撃策に間に合わなくなる。ここいらに伏せて奇襲を狙っている可能性も在り得る。

下手に動けば自らの首を絞める羽目になってしまう。

「やり手なのだ」

「そうだね。こういう時、どうすればいいのかな？」

「最善は、此処で警戒しつつの小休止。と云うよりも、それより打つ手がないのですけどもね」

桃香は振り返って、兵たちの顔を見た。
赤くも無く、蒼くも無く。

つまり、それは正常・冷静。過度に緊張する事も無く、過度にだらけることもなく。

これが、兵の状態に於いて一番、肝要なことである事を桃香は臆げながらも認識していた。

「流石に、指揮官無しとは云え、そう簡単には第二陣が陥落する事も無いでしょう」

「それを信じるしかないのだ」

そこで暗がりから一人、兵が寄って来て耳打ちした。愛紗は丁度いい、と嗤った。

鈴々が蛇矛を肩に乗せて、首を傾げる。

「第二陣は近隣村と結託し、濠を作って、籠城を開始したようです」「良くその村も許したのだ。波才はこの辺では英雄のはずなのに、なのだ」

「それと同じくらい朱儁軍も英雄なんだよ、きっと。それに官軍が鬼気迫る表情で頼んできたら、断れないだろうしね」

「そうですね」

「それにしても籠城かあ。考えたねえ」

「少数で多数を相手するにはそれぐらいしかないですからね。指揮官も無知では無いということでしょう」

「いや、この迅速さで籠城を開始できるなんて、優秀な部類だよ」

霞む夜明けに眼を細めて、桃香は村の方へと視線を向ける。

煙は小火程度にしか上がっていない。防戦一方ながら、首尾よく行っているようだ。

再び周囲の草場から物音がごそそとして、五人ほどの兵士が出てきた。

大分前に放った偵察隊。

ここいらに伏兵がないこととの報告を受けた。

桃香が安堵のため息を漏らし、鈴々が少々落胆したように嘆息する。

自身も馬上から降りながら、声を張り上げて愛紗が吠えた。

「よし！ 警戒組も休憩——」

その瞬間。

五人の内の一人が、大きく振りかぶった、

「死に晒せエ、関雲長！」

鈍色の凶刃が、愛紗の眼前で翻る。

「なっ！」

咄嗟の事ではあったが、流石の愛紗。身を僅かばかり捻り、それを躲避し、宙に跳ぶ。

闇夜越しにちらと覗いたのは、端正な顔立ちと、荒い短髪のしかし美しい金髪だった。

「貴様………何奴！」

「それとも何か、関雲長。お前は殺す相手に、一々名乗んのか？」

地面に減り込んだ斧が重々しく持ち上げられる。

持ち上がった瞬間、矛が斧に弾けて、赤い紫電が奔った。

「死ぬのはお前なのだぁぁあ！」

甲高い音を立てて斧から火花が散る。

ち、と舌打ちして女は斧を手放して後退した。

顔を隠していた笠が取れた。殺気だった瞳が、靖王伝家を構えた桃香を怯ませる。

残りの四人が、着地の際に膝をついた女を庇うように前へ出る。

桃香が駆け寄る。荒い息を整える愛紗と五人を遮るように立つ。

「あ、愛紗ちゃん！」

「総員、総大将をお守りしろ！」

その叫び声と重なるように義勇兵の叫び声も重なった。

それを皮切りに、愛紗を庇う桃香を庇うように立ちはだかる。

「慕われてるなぁ、劉玄德」

皮肉そうに口元を歪めて吐き捨てる。

唾を吐き捨て、口元を拭う。斧を持ち上げ肩に乗せ、見下す様。

四人の表情は見えない。不動であるのに、剣呑な気配を放っている。

愛紗は奥歯を噛み締めながら、偵察に放った義勇兵の五人が殺されたこと、そして金髪の子を筆頭に、四人も只者ではないことを痛感していた。

「とは云えど、何者であれ、桃香様の命を狙うようならば。容赦はしない」

「赦さないのだ！」

鈴々が並び立つように宙返りから着地して、蛇矛を構える。

「ちつ。うぜえよ、お前ら」

「だから、どうした」

「そう言うのがうぜえ。そのくそつたれな忠誠心もうぜえ。お前が俺の前に立っているのもうぜえよ」

捲し立てる。端正な顔が乱暴に歪む。義勇兵の中から、怯えた悲鳴が上がった。

「おい、お前ら」

視線を前方四人へと向け、

「何儀は残れ。他は退いてろ。あいつらとお前らじゃあ、相手にもならねえ」

不遜な物言いだ、三人は頷いて下がった。

何儀、と呼ばれた最も背の高い藤色の髪の女は細長い、幾つも束ねた只の鉄針を握る。金髪の女は片手に斧、片手に短剣を携える。

獅子の様な獰猛な瞳に見据えられ、義勇兵達が恐怖に身を固めるのが空気を伝う。

桃香は下がって、と小さく呟く。

対峙する三人とは対照的に、総員、纏れる足を堪えながら慌てて馬に乗る。

「鈴々ちゃん、先に向かつて。彼女達は私達がやるから」

「……。解った、譲るのだ」

「ならば、私は斧の方の相手を」

偃月刀の切っ先を金髪へ向け、愛紗が桃香から離れる。桃香の手には金色に煌めく剣。

鈴々は持ち前の軽さで宙を翻り、馬に飛び乗る。馬は上半身を身を反らす。

一つ嘶いて、駆けだす。それに数千騎続く。
橙の陽が東の空から天壤へと向かう。

一つ眼を閉じて息を吐く。また吸って、凜とした、殺伐とした荒野を見据える瞳。

その眼には踏み越えべき針山。黄色の赤絨毯の先へと。

一つ風を裂き、偃月刀が唸りを上げた。黒髪が風を纏って靡く。
金色を塗りつぶす漆黒。

「何儀、さん。逝くよ、此処からは死地だから。覚悟して」
「……義勇軍大将・劉備玄德。その眼は、私を越えられる？」

「もう一度訊ねよう。貴様の名は」

「
いいぜ。俺の名は徐公明。お前を殺す名だ」

第七葉……悲しみと過ち（前書き）

少し文がゴチャゴチャになってしまった気がしております。

第七葉……………悲しみと過ち

「はあっ！」

剣閃一閃。桃香の緩慢そうな豊かな身体とは裏腹に、瞳に宿る堅固な意志のように、その戟は鋭く迷いが無かった。

何儀は両手の針の束で剣戟を往なしていく。

しかし、鷺鳥の如き猛攻は大気をも切り裂く様。藤色の髪がはらはらと数本宙に舞う。

「その眼に、一転の曇りもない？」

「どうだと思う？ 私は迷ってないよ。貴女を超えていくよ」

頬から滴る深紅の粒を指で掬いにとって、何儀は無表情にそれを見つめる。

桃香の剣閃は全てかわしている。しかし確かに、つつ、と伝う。

何儀が幾月も前に聞いた情報とは、大きく齟齬がある。

（このままでは、苛烈に生きてきた自分が負ける？）

「まさか、まさか」

（あの日、私は出逢った。白銀の王者に、楓の主に？）

白銀の男に見込まれた自分が負けるなど、矜持に懸けて己が赦さない。

己の矜持？ 違う、これは彼への崇拜にも似た童子の様な憧憬。

「貴女には、負ける訳にはいかない……………！」

「奇遇だね。私も、そう思ってるよ！」

何儀が右手の針を構えて、素早く懐へ入る。桃香はそれを宝剣で受け、流れる様に右へ振るう。

後続の針を繰り出す機会を失って、そのまま舞踏を踏むように半回転した。

正に空回り。自嘲的に呟いて、何儀は己の笠を取った。

そして額を晒す様に巻かれた黄巾を投げ捨てる。

動揺を誘う為では無かったが、桃香は瞠目した。彼女の瞳の焰は黄から紅に。

瞠目したのは正に、彷彿した楓の葉であった故。

「足りない」モノ、見つけた。見つけたよ？ 御願いい見えて、羌楓様」

「！」

「負けるわけにはいかない、これが決意？」

「……」

脳裏に逆巻くは只一人の想い人。

風格は始皇帝。古代の楽毅の如き武勇。白起の如き冷徹さ。

出会えたのは奇跡。あの白銀の瞳は、何儀、否、藤を惹きつけてやまなかった。

「霸ッ！」

身体を捻って、生まれたのは爆発力。

勢いを伴って投擲された一本の針。桃香の正鵠を射ぬかんと意志する。

手から離れて、真っ直ぐ加速する。

桃香はそれを、ただ薙いで弾いた。

「そうだね。でもね」

無垢な、しかし得体の知れない口元の笑み。

「軍様は私にも教えてくれたんだよ。だから、私はもっと、意志、するの。しなくちゃならない」

桃香も、藤も、この緊張が何を意味するのかを理解していた。張りつめた緊張の糸が解れ撓み、自然と視線が交錯した。

此処にあるのは、己と彼。

此処にあるのは、思慕と憧憬。

此処にあるのは、女と女。

視線が交差した後、二人に奔ったのは熾烈な一閃。
無形の感情の拮抗、それは大きな渦と成りて。

――風が吹き荒れた。楓が薫る。

――歓喜に震えて。これで又一つ。

大きく風が逆巻いた。

仕えべき主君が巻き込まれたのを見て、愛紗の心の臓が大きく跳ねた。

「桃香様！」

思わず口から出た叫び声。

鬼灯の口角が、羅刹の如く吊り上がった。

斧が重く鈍く翻って愛紗に肉薄する。

「よお、余所見してる暇があんのか？ 大したもんだなあ！？」

狂気を感じさせる瞳が愛紗の精神に迫る。

攻撃が死力を感じさせる。抱いたのは純粹な恐怖。

その斧から滲む怨嗟が無性に焦燥を誘う。

脇目に桃香を追ってしまふ。

「大丈夫だよ！ 愛紗ちゃんも集中して！」

「！ 申し訳、御座いません！」

鼻が着く程の距離での鏢迫り合いの果てに、愛紗の力がまさった。青龍がその牙を衝きたてる様に鬼灯の肩を挟む。

肉が挟れて削げ落ちた。

興奮状態による無痛も消え失せ、鋭い痛みが鬼灯の体内を駆け巡った。

声に成らない噛み殺した断末魔が零れ、噛み締めた唇からも鮮血が飛散する。

端正な顔が苦痛に歪む。しかしその表情から臆病は読み取れず。

氣息奄々と肩で息をする鬼灯。

視界も朧げに霞んでいる。血を失い過ぎた、鬼灯は嘔く。

荒地の地面に、ぽたぽたと赤く滲む。

「ちっ、くしょう。畜生め。痛えじゃねえかよ」

「それで痛くなければ既に人でなく」

炸裂した斧の刃が頬を掠め、生臭い臭いが鼻を劈く。それを下で舐めとる。血を振り払い、偃月刀を廻せば何かが触れるのを感じた。

楓。

「！ これは……………」

瞳に宿る凜とした漆黒の双眸に、湿り気が帯び始めた。
手にとって、懐かしむように、親しむように、焦がれるようにその葉を軽く食む。

慈しむ聖母の頬笑みと娼婦のような妖しい笑みを緬い交ぜにして、口元が緩む。

――憤。牙を剥いた。

「巫山戯てんじゃねえぞ手前ら！」

肩が震える。斧を握る事も覚束ない手に、血がドクンとなだれ込んだ。

血管が浮き出て、眼が血走る。

「ざっけんじゃねえぞ！俺の『叶えたい夢』は、てめえらの恋慕如きに殺されるのかよ！」

発狂するように叫ぶ。

「手前の目ん玉は只の生娘だ！大層な名目で人を殺しておいて、拳句てめえらは男の尻追っかけてるだけじゃねえか！」

空気が止まって、全ての視線が鬼灯に注がれた。

鬼の灯。鬼の焰。

血涙の慟哭が響いた。

愛紗の表情が緊張に凝り固まった。視界の端に映った桃香の静かな双眸はどうやら揺れてすらない。しかしどうでもいい。

肩の傷を抑えながら、只只管に我武者羅に叫ぶ。

怒り猛り憤るその脳裏には、嘗ての『英雄』の姿がある。

しかしその視線の先に自分は居ない。

鬼灯は、こつちを見てくれ、決死に叫ぶ。

愛紗の驚いた眼が見据えるが構わず、涙が零れた。

愛紗からも又、涙が伝った。

――獅子の慟哭。

――愛紗は己の手を見つめる。その手が薄汚れている気がして成らなかった。

第八葉……募る想いと思い（前書き）

タグにもつけちゃったけどキャラ増え杉。

今度キャラ紹介載せますね。

第八葉…………募る想いと思い

幽州へと続く街道をよろよと『義』を掲げた旗が立ち並ぶ。からりと乾いた風が一団を掠めた。その頬は竄れかけている。輜重を回収してから、もう一月も練り歩いている。

鬼灯が膝をついて亡骸のように表情を喪って倒れかけると、それを助けるように藤がそれを支える。

結果的に見れば、義勇軍には首級を上げることできなかったが、藤と云う同胞が増えた。が。

朱雋軍は壊滅状態だった。遅陣によって挟撃は為されず、第一陣・第二陣は野戦にて敗走し大損害。

村は大きな被害を受けていなかったのは朱雋軍の計らいなのは間違えようもない。

桃香と愛紗が到着した頃には疾うに波才軍は見事に姿を眩ませていた。

岩鏡は沈痛な面持ちで、桃香と愛紗に、「合流まで持ちこたえられず、誠に遺憾です。申し訳御座いません」と深々と頭を下げたのだった。

更に言えば鈴々率いる騎馬隊も伏兵と奇襲を受け疲弊しきって、総勢の三分の一を喪った。

——つまり、大敗北を喫した。

朱雋軍は一旦都へ帰還し、皇甫嵩の軍と合流するらしい。

愛紗は己が手を見つめる。

己に投げかけられた、鬼灯の叫びが揺さぶりをかけてくる。

—— 只の少女の眼。

桃香は軍の云った‘足りない’ものを掴んだようで、迷うような色が見えない。

—— 『叶えたい夢』。それが徐晃の‘足りない’ものだっただろう。

それを与えたくれた『波才』の消失。残ったのは想いの残滓。恋慕の先は何処へ。

もし自分がそうだったらと考えると辟易してしまう。

はう、と切なげな溜息が胸から溢れだした。

—— 所詮、自分はこの程度なのか。思慕の情だけを望んでいるのか。

視線を後ろへ投げかければ、憔悴した兵たちが見える。

未だ城までは遠い。

その事実が、疲労に追い打ちをかけるのだろう。

以前なら率先して慰撫をしたのだろうが、そんな余力が無い。

胸の奥が、しこりが、重い。

ふと、藤と視線があった。

吸い込まれるような瞳に映った己が、ひどく汚れている。

—— こんな軽い気持ちで命の駆け引きをしているとは、愚昧の極みではないか。

何かを言いたげだったが口を噤んだ藤は針の束を背に担いでいる。それで桃香と討ち合った時、何を得られたのか。

聞きたいが、億劫だ。倦怠感と怠惰が、大きく押し掛かる。

—— こんな気持ちで厄介で邪魔だ。

—— 早く軍様にお逢いしたい。でも、こんな半端な気持ち

ちじや駄目なんだろう……な。
幽鬱は未だ続いている。

同時刻。

街道から少し逸れた獣道。

そこを、一人の剣を携えた女が身軽気に岩場を超えていく。
蜿蜒長蛇の列を成して行軍する一つの隊を見つけた。

『義』の旗がはためく一団は、何処か茶色に霞んでいる。

「是。僭越ながら発見致しました次第」

その声は厳格さを含んでいる。

女は一見すると男のようだ。

背丈も高く、処女雪の如き白髪のは髪は乱暴に短く切り揃えられている。言葉で云うなら男装の麗人。鼻も高く、全体的に整い過ぎている印象を受ける。

男よりも女からの人気が出そうな風貌。

彼女の名は、徐庶。

第二陣で指揮を取っていた者。敗走したとは言え、腕は確かである。

水鏡の元を発ってから、仕えべき主君を探す為に流浪を繰り返し、その一環として従軍していたに過ぎない。彼女自身、もう時期が来たと思っていた。

一兵卒としての能力も高く、兵法にも通じている。
野放しにするには惜しい人材であると云えた。

真名は雪柳。

彼女もまた、楓の元に馳せ参じ集う者の一人。

第閑話……姫は踊る、されど進まず。(前書き)

つまりキャラ紹介。

・目安

武力：(正史) 呂布を100として。
軍略：(正史) 賈?を100として。
知力：(正史) 周瑜を100として。
統率：(正史) 曹操を100として。
政治：(正史) 諸葛亮を100として。
馬術：(正史) 呂布を100として。

第閑話……………姫は踊る、されど進まず。

・羌楓軍（蚩尤）（幽樹）

背丈：約185cm

武力：105

軍略：92

知力：86

統率：87

政治：80

馬術：105

概要：色白。てか蒼白。銀縁眼鏡に朱色の髪、190cmもの長身の持ち主。

インテリ武将。実は蚩尤。得物は両刃の刀で、爪は鉄でできてる。

今作の、未だ出てないけど主人公。実は2度生き返っている。

劉邦——すもも李と恋仲だった。

第零葉に於いてこの時代に堕ちる。

「私は〜です」

・波才【字無し】（真名は未だ無い）

背丈：178cm

武力：73

軍略：81

知力：52

統率：89

政治：49

馬術：79

概要：鬼灯の嫁。眼の下に赤い隈どりのような化粧。顎にはチリ

チリ毛が眩しい。

元々は『英雄』。しかし某3人姉妹と音信途絶えてただの根暗鬱お兄さんに。

原始黄巾党の指導者。因みに名前は作者の捏造です。

作中では『原始黄巾党』と『黄巾賊』と云う風に区別しています。

「我くなのだ」

・朱儁公偉（岩鏡）

背丈：165cm

武力：62

軍略：80

知力：78

統率：82

政治：56

馬術：76

概要：官軍のランサー。皇甫嵩と二枚看板。

三国志正史で、波才に敗北を喫している。

個人的なイメージとしては、天然おっとりお姉さん系。普乳。

眼鏡っ娘。黒髪だけど愛紗のような美しさに乏しい。苦勞性で枝毛もちらほら。

儉約家で、鎧や兜は機能美を重視。兵法よりも実践を重視。個人的な武よりも大軍を指揮する指揮官。

「私^{わたくし}はで御座います」

・徐晃公明（鬼灯）

背丈：169cm

武力：92

軍略：75

知力：7 1
統率：9 3
政治：6 2
馬術：8 7

概要：初期のキャラとしては強キャラ。正史を考慮してのこのステータスですから。

金髪短髪。動物で譬えるならライオンでしょうか。

斧と短剣の使い手。おっぱいは大きいよ。

白波賊をしていた時に波才から勧誘されて波才に惹かれる。
波才ラブ。今後をどうするかは謎。

「俺だぜ」

・何儀【字無し】（藤）

背丈：173 cm

武力：8 1

軍略：5 2

知力：5 3

統率：3 8

政治：3 7

馬術：7 6

概要：初期設定では死ぬはずだったのに。何故か仲間にいる歩兵部隊の副将。

語尾に「？」と付けるキャラ。私自身書いていて、凄く使い難いであろうと思うキャラ。

紫の髪に紫の瞳に無表情。おっぱいは美乳。

得物は針。細長い針を束ねてぶんぶん振りまわす。

軍大好きっ娘。自己満足の臭いがプンプンするキャラその？。

「私だよ？」

・徐庶元直（雪柳）

背丈：175cm

武力：83

軍略：90

知力：90

統率：79

政治：80

馬術：80

概要：数値化してみても解ったよ。こいつはバグキャラだ。

白銀の髪。雰囲気は氷。無表情と云うよりもクール。

ノッポ女の多い今作でも群を抜いてノッポ。しかし微乳。

正史に基づいて武器は剣。知力が高いのは諸葛孔明と同門

だから。強いのは仕様。

男装の麗人。俺的男の娘。……え？意味が違う？

自己満足の臭いがプンプンするキャラその？。

「此の柳で御座います」

じゃあ、目安的に既存キャラの数値をば。

・劉備玄德（桃香）

背丈：163cm

武力：79

軍略：66

知力：78

統率：89

政治：77

馬術：81

・関羽雲長（愛紗）

背丈：167cm

武力：94

軍略：85

知力：83

統率：85

政治：71

馬術：90

・張飛翼徳（鈴々）

背丈：153cm

武力：91

軍略：30

知力：45

統率：85

政治：23

馬術：90

・趙雲子龍（星）

背丈：165cm

武力：91

軍略：86

知力：85

統率：86

政治：73

馬術：88

彼女達は伸び代がありますので、まだまだ強くなるはず。

原作キャラの概要が無いのはご容赦ください。

今後もキャラ設定は載せていきますね。

これからどうぞ宜しくお願いします。

第閑話……姫は踊る、されど進まず。(後書き)

感想をお待ちしています。

12月17日……重大なミス発覚。諸葛『公』明になってたで御座る。

訂正：『公明』↓『孔明』

第九葉……蟠りの宴（前書き）

そろそろいぢやらぶが書きたいこの頃

第九葉……………蟠りの宴

「ようこそ来てくれた、桃香」

「久しぶりだね白蓮ちゃん」

再会を祝して抱きあう二人を尻目に、藤は辺りを見まわした。

質素な造りの城だ。此処に至るまでの道程まで、昨今の不況にしては顔色の良い農民の姿が目立った。国庫を割いて農民の生活向上を努めているのならば、大した仁君だ。

しかし彼女自身から感じる雰囲気、悪こそ感じないのだが取り分け多くの仁を感じるわけでは無かった。戦士としての希薄も乏しい。と云えど弱そうにも感じられない。良くも悪くも普通か。仮に彼女がそれを抑えてその程度にしか感じさせていないのだとすれば、とんだ役者。それはもう人跡未踏の領域の実力者だ。

「客将として迎え入れるよ、最近一人増えたとはいえ、未だ未だ人手が足りなくて困っていたんだ」

「ありがとう！ 助かるよ白蓮ちゃん」

藤が見回している間に、話が纏まっていた。

公孫？の手と桃香の手とが結ばれた。双方に安堵の笑み。理由を推測するのは容易かった。

……玉座の左右に立つ太い石の柱、後方に列を成して並ぶ柱の数々。

設計者は高い美的感覚を持っていたに違いない。——藤は玉座の脇を注視する。

脇に控えた針がずれて硬い音が鳴った。
帯刀を許されたのは桃香がこの公孫？の同門であったかららしい。
藤は力強く針を握り締めた。

丁度その時、より強い闘志を感じた。
気を張り詰めていたのは藤だけではなく、愛紗も同じだったよう
だ。

彼女の眉は顰められたままの斜め。

「桃香様」

「何？ 愛紗ちゃん」

「発言を御許し下さい」

偃月刀が重い音を立てる。

その固い物腰に、桃香も顔を引き締めた。
首を傾げる公孫？を睨みつけながら、愛紗は声を荒げた。

視線は真っ直ぐ柱に。

「そこに隠れている二人、神妙に出ろ！ さもなくば――」

「おや、ばれていたのですな、雪柳？」

「此の柳、不覚」

現れたのは二人の女性。

左は白銀の処女雪を彷彿させる白髪はくはつの長身の女と、右は短く丁寧
に切り揃えられた淡い水色の髪はの女だった。

左は知性と威厳。右は妖艶と覇気。
絵になる程に様になっている。

只者ではない事が、空気を伝って肌に痺れた。

「ああ……失礼だろう、子龍、元直」

そこで気付いた様に、

「済まない。彼女達は私の客将をしてもらってるんだ」

何処か自慢げに、公孫？は胸を張った。小さくも大きくもない胸が揺れた。

「お初にお目にかかる。白蓮殿の客将をしている、趙雲子龍と申す者。真名は星」

「同じく、徐庶元直、真名を雪柳。御会いできて恐悦至極に存じます」

悪びれる風も無く二人は頭を下げる。

二人の後ろに構える様に、玉座に公孫？は腰かけた。腕を組む。

「私は公孫？伯珪。真名を白蓮だ。改めて宜しくな」

冬を目前に控える庭園は、寂しげで。

透き通った池の水。朽ちて葉を落とした木々。

茶褐色に覆われた世界。

望郷の寂しさで胸が詰まりそうになる景色の中、六人は枯れ葉を踏みしめた。

藤、桃香、愛紗。白蓮、星、雪柳。

そして巨木の下に円を描くように座り込んだ。

静寂。沈黙。やがて白蓮が白い息を吐いた。

「ここはな桃香、私たちの想い出の場所なんだ」

手を伸ばして、愛おしそうに樹の肌を撫でる。
その頬は微かに朱に染まっている。杯を呷る。

——酒を湛えた盃を、星へと手渡す。

愛紗は、薄ら寒い感覚が己の中に再び吹いたのを感じた。

——星は一口含んで、桃香へと繋げた。

「この樹は楓の樹。此处で、この乱世で戦い続けなばならぬ目的を見つけたられたのです。——嗚呼、今すぐにでも激しく

抱いて、欲しいくらいに焦がれているのに」

「そうなんだ。——私にとっても……私たちにとっても……
…思い入れが多いんだよ」

そう言って、星は小さな口づけを、降ってきた楓の葉に落した。
蕩けるような、陶醉のだらしない笑みを星は浮かべている。

——桃香もその杯を雪柳へと渡す。水面には恋する瞳が
映り続けている。

受け取り手は僅かに震えている。それは寒さか温かさか。身体は
熱いはずなのに。

「此の柳も、ここで聖上と出逢ったので御座います。生涯仕えべき御方であると、この未熟な心の臓の奥が、震え疼いたのです」

頬を染めてその端正な顔を苦しげに歪める。心服して止まぬ主君と云うよりも、桃香や星のそれと同じで。

藤も、瞳を濡らして虚空へと言の葉を漏らした。

——雪柳から藤が受け取った。

譬えようもない心酔。皆よりも、余りにも強すぎる想い。

「私が、賊に堕ちた時、助けてくれた……。だから、恩は必ず返す。当然？ ……当然」

それは彼女自身の決意か。

凜とした瞳は、想いを固めたようでもあり。

——愛紗の手に渡った。

しかし桃色の空気の中で一人、蒼く口を閉ざしている。

ぼつり、と口から想いが零れた。それは水面に堕ちる滴のようで。

「——波才を思い慕いながらも世を憂う獅子に、言われた事があるのです」

妙な言い回しだったが、それは愛紗の心情の率直な吐露。

愛紗の瞳には何者も映っていない。

秘められた虚無。黙って皆、その言葉の先が紡がれるのを待った。

「思慕の情だけで、人々の意志を呑み食らうのか、と」

——独白。懺悔にも似て。

「只の小娘の眼でしかない、と」

恐る恐る言の葉が紡がれていく、

「『足りない』ものがなにか、解らないのです。手の中から、すり抜ける様に、解らないのです」

苦しみ。喉の奥が搔き篋りたくなるような。

言葉が堰切ったように溢れ出た。

「私には逢う資格がないのではないか、と思つてしまつて」

「苦しい。苦しい。どうすれば、この思いが解けるのでしょうか」

「私は資格が無いのかも」——「

——涙が、涙が。伝う。頬を、乾いた肌の上を。

——その頬を、誰かが拭つた。

「失礼。人を想うのに、資格など必要なので御座いますか？」

「え？」

「そんな大仰なものではない筈です。世の中で最も価値があり、最も価値が無いとも言える『愛』は、此の柳にとつては最優先。聖上は、それほどの御方だと愚考致しております」

饒舌に話し始めた雪柳に皆の視線が攢蹙する。

「敢えて言うなら、只の嫉妬でしかない。かの獅子は、天下と想い人を天秤にかけて、想い人を想い過ぎる余りに天下の民を選んでし

まった」

怜悯な光が煌めいた。

「この大陸の無辜の民と、想い人を秤に掛けてどちらを選ぶうがその人の勝手。確かにそれは余りに龐大な命を預かる王としては失格かもしれませんが、貴女は現状、王ではなし。やがて仁君に従いその御心に従えばそれは必然、民を救うでしょう。さて、貴女がただ只管に『想い人』を想うことに何の問題がありませんか？」

その透明で澄んだ瞳を愛紗は見つめる。その瞳を覗き込んだ。

「彼女は、正念場の時に、愛紗殿の均衡を保っていた天秤が『想い人』に傾いたことに瞋恚を感じたのでしょうか。己に無かったものを貴女が持ち得ている故に」

「だから貴女が深く気負う必要はないのではないのでしょうか？ 必要なのは『愛』。『想い人』と仲間をーに、民を二に考えるだけで、その『決意』を己の柱にすれば、‘足りない’ものを嘆く事もなく、獅子に揺らぐこともない、と僭越ながらに思います」

一つ深く雪柳は、長々と申し訳無い、と頭を下げた。

皆眼を大きく睜目した。それは一重に愛紗の暗がりが晴れた事に起因する。

——明確に『決意』を意志して下さい。

……その言葉は誰のものか。

——美しい花々。

——美しきことよ。

楽しそうに呷る六人の姿が上から見える。

風に揺らめいて、髪が靡く。

それは朱色。

もう少しで、と嘯いた。

第十葉…………それは想い出の中に（前書き）

劉邦季。

彼女の真名は『李』。

蚩尤と出逢つて、交換した真名は『幽華』と『幽樹』。

第十葉……………それは想い出の中に

冬へと向かう冷気は、巨木をも蝕む。

樹の幹に腰を掛けて、杯を傾ける。

粉雪舞う宵闇の帳の中は、酒がよく身体に沁み渡る。

水面の上を無垢な白が無邪気に踊っていて。

手に取る雪が溶けてひんやりと冷たい。

熱爛の湯気が眼鏡を曇らせた。白い吐息が誘うのは幾許の寂しさ。

その揺れた水鏡に映る曇った顔が、困った様に歪んだ。

感覚と心の、二つの世界。

表の世界では自分を慕ってくれている数人の、楽しげな少女達の姿が見える。

その中に入るべきは、『軍』。

裏の世界では只一人、一人だけの、微笑む李——幽華——の姿。

そして、其処には『幽樹』が、居た。

向こうに眼を呉れる……………北京の町並みは軒並み静かだ。
瞼を閉じた——

——瞳を開く。

心の中の二つが、交わることなく私の心を締め上げていく。

右目の奥の幽華。

左目の奥の桃香。

『愛してるんだ、幽樹。幽華たる私だけの、幽樹』

耳に残るその声が、未だ頭の中で渦巻いている。

(私にとって、彼女は全てだった)

その声。その肌。その温もり。その唇。その柔らかさ。

餓えた己が彼女の身体を求める。

私は蚩尤。神代の世界に生まれ落ち、殺された。

私は軍。時を経て、生き返った。幽華の側に。

こんな私を側に置いてくれた幽華。

李と云う真名と、私だけの為の『幽華』と云う真名。

身体の内奥で、心の奥で触れ合って、血潮の上で戦った唯一無二の
片腕。相棒。伴侶。

だけど。

そして運命の最後の日。

項羽を打ち倒して、手に入れたのは、斃れた彼女と、色褪せた世界。

此の手に残る感触は、千年の時の中では拭い取れはしなかった。
消えていく温かさが、訪れる冷たさが、抜けていく身体力が、
未だに、未練がましく、此の手の平から取れない。

——李。……………幽華。

失ってからずっと、涙が枯れない。

私は、何をすれば……………

—— 答えなら、すぐ側に在ったことに気付く。

視線を下ろした。

其処には、六人の少女達。

黒色、紫色、白色、水色、赤色、そして桃色。

想いと思いの狭間に揺れる少女。

一途で従順な、救われた少女。

目指すべき目標を与えられた少女。

共に歩みたい、側に居たいと望む少女。

非凡を求める少女。

そして、非力を嘆く少女。

劉備玄德。

劉、の血を継ぐ少女。

桃色の、慕ってくれている筈の少女。

「これは運命なのでしょうね………幽華？」

やはり、と軍は空を仰ぐ。

透き通った透明な冷たい空気が肌を刺す。

その微笑む姿が、眩しく、また愛おしくも感じる。

（そう、ですね）

——答えならすぐ側に。

第十葉……………それは想い出の中に（後書き）

『山海経』によると。蚩尤は、黄帝に反旗を翻した旧・天神の豪族であり、八十一人もの兄弟が居たそうで御座います。

勇敢で辛抱強く、風や濃霧や煙、雨を巻き起こし、砂鉄や砂利を食らい、皮膚は鉄よりも堅い。化物と呼んでも遜色のない人物でありました。

『路史』によると姓は『羌』。

彼が黄帝との戦争に敗れると、逃げぬようにと嵌められた嚴重な枷は、死に耐える蚩尤の血で真っ赤に染まり、怨嗟で幾重にも覆われた楓の葉になった伝えられています。

五兵を編み出した兵神としても名高い彼ですが、彼の名は、凶兆を顕す星や真っ赤な楓の葉が描かれた旗『蚩尤旗』でもその名を大陸に知らしめています。

——そして、その『蚩尤旗』を軍旗として掲げたのが、何を隠そう、高祖たる劉邦なので、御座いますよ。

実は、桃香は、軍の血を引いていません。

——つまり？

第十一葉…………「おやすみ」(前書き)

短いすけども…………。

主人公格の桃香さんのターン。

9 / 26…………修正。「馬元義」な訳がない。人選適当過ぎた事に今気付きました。——結果：「馬元義」から「管亥」に。

9 / 28…………修正。こんな大軍勢ありえねえ。——結果：「二十万」から「十万」に。

第十一葉…………「おやすみ」

冬も中頃。また草木の枯れ逝く季節が来た。

桃の花を落した白湯で喉を鳴らして、凍てつく身体を温める。

次の秋には再会できるものと信じて、桃香は準備を急ぐ。

態勢として、先ず幽州の白蓮と一時的に共同戦線を張る。ほぼ同等の権限を烏滸ましいと知りながらも許可を得た。彼女自身も軍と共に歩みたいと望んでいるから問題は無いだろう。

合わせれば大規模な軍勢になるのは確実。それについては、軍師は雪柳、兵長を愛紗と鈴々、その補佐に藤。騎馬を白蓮と星。大將を桃香とすると決定した。そして可能ならば、軍に助力を乞う。これは満場一致であったのは特筆しない。

目下、波才の問題もある。

近況はと云えば、岩鏡曰く、冀州北部に潜伏していた原始黄巾党は敗戦一色だった黄巾賊の張曼世と管亥の軍勢と合流し、十万強の大軍勢に膨れ上がった、と。また、張角・張梁・張宝が曹操軍に討ち取られたこと。皇甫嵩と曹操と連携して、次は二の轍は踏まぬと意気込んで、再度協力を要請してきたこと。…………最後に軍師の損失の嫌味は忘れていなかったが。

皇甫嵩の計略の都合で決まった、冬下旬の作戦開始まで時間は短い。

国力の増強と兵力の増強を同時進行せねばならない状況下。適材適所より、練兵や警邏は武官寄りの愛紗や鈴々や星が担当して、藤や雪柳、廬植門下だった白蓮と桃香は書類仕事に追われていた。

蠟燭の幽かな光が淡く筆先を照らす中。

桃香は走らせていた筆を止めて、ふうと一息ついた。

手が痺れるほどではないが、これ以上酷使すれば明日の作業に支障をきたすと悟って、寝台の上に身を落とした。

「今、どこに居るのかな……………」

こう頭も身体も使わない時間になると、どうしても思考がそちらへと向いてしまう。

謎めいた風貌、冷めた視線、携えた長剣。総じて不明だった。しかし、感じるのは郷愁。何と言えはいいのか、それは大昔の恋慕？

血が疼くのが止まない。

淡く甘い灯が艶めく肌を照らした。どことなく悲しげな灯りと窓から差し込む優しい三日月の明かり。

甘く酸っぱい思考が頭に渦巻いた。

布団に顔を埋めて、いやいやと左右に揺らす。

ほわん、と蕩けた桃香は起き上がって蠟燭に息を吹きかける。

艶めいた桃色の唇から放たれた吐息は、暗がりと呼んだ。

静かに眼を瞑って、口元をぱくぱくと動かした。

お、や、す、み。

燻ぶる想い。

「おやすみ……………」

第十二葉……………右中郎將と左中郎將

冬も終盤に差し掛かった。空気が乾燥している。

空気が肌を刺すのは乾いているからだけではなさそうだった。幽州北京では、今朝方から、殺伐として張りつめた空気が漂っている。朱儁・皇甫嵩の来訪である。

民衆も兵隊も武将も更には王までもが緊張していた。が。

妙にご機嫌な岩鏡は鼻唄でも唄いそうなほどで。

それはどうやら傍らに佇む彼に起因しているようだった。

彼の名は皇甫嵩。

一見すれば好青年のようだ。糸目に掛けられた黒縁の眼鏡、首の後ろで結われた緑髪、口元には消えることの無い底知れない笑み。

総じて幅広く女性から人気が出そうな風貌だ。岩鏡は首つたけの様子であったが、桃香や愛紗は皇甫嵩の終始含み笑いに、勘弁被りたといったような様子であった。いざ立ち会って、愛紗は鷹の様な猫の様な、喰えない奴と云う印象を受けた。

その喰えない男は、作り笑いを浮かべたまま握手を求めて手を差し出した。

「どーも始めまして。朱儁君の友達の左中郎將の皇甫義真と申す者です。ふふ、波才君に散々な目に遭わされたようですね。ですがもう何の問題もありません。この義真にかければ、波才など笑止。ご安心ください」

「……………あ、はい。どうぞよろしくお願いします」

意外な饒舌に、拍子抜けと云うか肩透かしを受けたような気分になった。

それはもしかしたら、飄々とした風のようにもあった。台風の様で、微風の様で、旋風の様で、まるで掴めない。

（あの腰に携えたどう見ても農業用鎌に鎖を通したものにしか見え

ない武器は……何だ)

気取ってるようにも素のようにも見えてしまう、舞台俳優さながらの仰々しい動きを見つめて、愛紗は怪訝そうに眉を顰める。

「ああ、何を考えているのかが手に取るように解りますよ？ 胡散臭いとか考えてるでしょう？ 良く解りますよその気持ち」

眼鏡を人差し指で持ち上げて愛紗をじっと見つめる。半笑いの口を愛紗はしばき倒したくなった。

寡黙そうに見えてまるで豪雨のように放たれる言葉の数々に一同は辟易するばかりだったが、その中に重要な事項を織り交ぜて話すために話を最後まで聞かなければならなかった。岩鏡が申し訳なさそうに頭を下げて義真を連れて去るまで、それは延々と続いた訳で、呆然とした空気の中の、

「……矢張り殿方と言うものは、冷静沈着でいて然るべきなのでしょうな」

「……子龍も偶には良いこと言うじゃないか」

という星の呟きは、至極真つ当だったのかも知れない。

余談。

日暮れの町中を歩く二つの影。

岩鏡と義真は、護衛を撒いて静かになりつつある北京の町並みを歩く。

それは初々しい恋人のようでもあり、長年連れ添った番いのようにもあつた。

「……北京は、中々に良い町そうですね義真？」

「そうですねえ。あの劉備君達が来て治安や整備の目が行き届くようになったからでしょう。ちらほら見える警邏の兵も少しずつ僕たちへの警戒を強めているようですし、良く調練もなされている」

へえ、と呟く岩鏡の頭を撫でて、義真は振り返らずに後ろへ手を

振った。

それに慌てて跳び出て敬礼する警邏を気配に感じながら、義真は歩きだす。

律義に振り返って敬礼した岩鏡は急ぎ足で距離を縮める。

茜色の空を仰いで、彼は感慨深く岩鏡の耳元で囁いた。

「手早く用事も済んだし、今日はゆっくり休めますね」

「！それはどういう意味ですかあ……？」

空を見上げる義真の前に回り込んで、岩鏡は上目遣いで彼を見つめる。

日差しに照らされて翳った彼の表情にはやはり薄ら笑いが張り付いていた。

でも、岩鏡にとってそれは温かく感じた。

「今日はゆっくり休みましょうね、岩鏡」

頭をわしわしと撫でるその温かくて安心する手を感じながら、岩鏡はこくこくと頷いた。

旋毛に落された接吻。

温かい。これは幸せ、岩鏡は想う。

それは恋人。

冬の短い夕暮れの中で伸びる影は寄り添って。

夜の帳と共に燃え上がる焰は。

それはそれは熱く熱く、夜の暗幕に隠れて、静かに気炎を上げて燃え上がるようだ。

第十二葉……………右中郎將と左中郎將（後書き）

やっちまっ たよっだ。

第十三葉……………治世の能臣、乱世の奸雄（前書き）

次こそは戦闘シーンに入りたいと思おうと思ってる。

第十三葉……………治世の能臣、乱世の奸雄

波才一派の出没情報を受け慌ただしく斥候が往復する幽州、北京、中央城の玉座の間。

微笑む義真や寄り添う岩鏡、緊張した白蓮と桃香、そして騎都尉の曹操が轡を並べて卓を囲んでいた。

前に岩鏡と義真が滞在していた時に話に上がった曹操。一勢力としては弱いものの指折りの実力者。無法者と無能者を悉く嫌う一面もあり、反面有能者や英雄を須く愛する。女が強いこの時代故に、女色が非常に強いらしい。

桃香はちらと件の曹操を一瞥する。

左右に待るは、姉の夏侯淳と妹の夏侯淵。周囲に覇気を撒き散らして牙を剥く姉と、静かで凍てつくような視線を向ける妹。鋭利な抜き身の武器のような、英傑二人を従える曹操の器量が窺える。そして彼女自身の驚異的な能力の高さは如何ほどか。武力も軍略も器量も覇気も叶う気がしなかった。

しかし夏侯姉妹よりも愛紗や鈴々の方が武将としての能力が高いと思っっている。それだけが臆病な桃香を逃げ出さずにさせている心の拠り所だった。

地位で云えば明らかに朱雋や皇甫嵩の方が高いのだが、曹操は慇懃無礼で高圧的だ。それを咎められる様な生半可な気迫では無く、誰も口に出さない。

寒いのに甚兵衛だけを着込んで涼しげな、しかし場違いな義真をねめつけ、曹操が口を開いた。

「で、どうするの？」

だが会議の内容など煩瑣と云わんばかりに、星や愛紗などを物色するように目を細めた。左右の熱視線は気にならないのだろうか。睨まれても悪びれることのない義真が顎に手を当てて、

「張曼成と管亥の軍勢、波才、徐晃と云う風に別れたようなので、

各地で迎え撃つ算段ですが」

「皇甫嵩と朱雋、私達が波才本隊と当たる心算ですがどうで御座いましょう？」

有無を言わさぬ光を眼鏡の奥に灯して岩鏡が引き継いだ。

「波才本隊が約五万、徐晃が二万、張曼成と管亥が三万と云った具合なので。まあ曹操殿には張曼成と管亥あたって頂きたい所存ですね」

文句言いたげな曹操を見据え、糸目が薄く開いた。瞳の奥の妖しい光が煌めく。その蛇の様な、凶悪な光に、桃香の皮膚が僅かに粟立って、曹操は汗を誤魔化す様に溜息をついて押し黙った。

「仕方ないわね。洛陽の援軍を頼ることにするわ」

「是非そうして下さい。……さて、御二方も異存はありませんよね？」

「あ、ああ。敵は徐晃か……まあやれるだけはやるさ」

「そうだね。負けないよ」

垢抜けた白蓮と幼さの抜けた桃香。曹操は心の中で驚嘆した。

悪くない。

「具体的な作戦は各自にお任せします。本格的にばらばらなので各個撃破望ましいんですけども、どうしても救援が欲しければ敗走する前に連絡してくださいね」

蛇の眼光は真っ直ぐ曹操に向いている。

欲しいものを見つけた時の童子のような表情が失せて、苦々しく口角を上げた。

「万が一や億が一でもあれば有難く呼ばせて頂くわ。でも、私は忙しくて救援に行けないかもしれないのよ。御免なさいね」

「そうですか。劉備殿と公孫？殿は大丈夫そうですから、そう心配してませんよ。もしもの時は、頼りにしていますよ？」

蛇と霸王の睨みあいが続く。蛇は武人二人と霸王を以ってしても揺らぐことは無い。

白蓮は一刻も早く逃げ出したかった。

「そ、そうかつ。早く次の議題はないのかっ!？」

場に渦巻く殺意や恐怖に急かされて話が進んでいく。焦り怯える真面目な岩鏡や白蓮を余所に激化していく水面下の錨迫り合い。

心に一陣冷えた風が吹いた。桃香は、薄ら寒く感じた。春、その先、その先が待ち遠しい。

もしかした義真と曹操は相性が悪いのかも知れないか思いながら、桃香は漠然と茫然と時間が過ぎるのを待った。隣に立つ愛紗も瞼を閉じて我関せずといった風情。

身体の寂しさと寒さが妙に、桃香を憂い静かにさせる。

秋の足音を探るように瞼を閉じる。ただ静かだった。

興味無さそうに振る舞える桃香を、曹操は不思議に思った。

(どうしたらここまで無頓着そうに振る舞えるのかしら?)

眠いのかどうでもいいのか。落ち着いていると言うよりも只、静か。

腹黒い義真とは別の意味で、その奇妙な魅力は底はおるか全貌、更にはその表層さえ見えない。

その豪胆さ、義勇軍で終わるには余りにも惜しい。

配下に加われば、王道を敷くことも容易になることは疑いようも無い。

側に立つ関羽と言う武人も欲しい。

初めて、その主従を羨ましいと思った。

無為自然なその体裁から、隙は無い。

明鏡止水。泰然自若。

己が劣っているとは毛ほども考えられないが、質の違う器の大きさを感じる。

それを探り当てられなくて、妙に苛立ってしまった。

「話はこれまでね。早く支度を済ませる為、ここで暇するわ」
引きとめる声は無い。

義真はやれやれと嘆息、岩鏡は慌てふためき、白蓮は安堵の嘆息。
桃香は、さよなら、とだけ言った。その無垢で虚無な瞳は何を思
っているのか。

予想の範疇を逸脱している。

春蘭と秋蘭を引き連れて向かう足取りがそこはかとなく重いのは
何故だろうか。

あらゆる面で勝っている。負けていない筈だ。

なのに、何故これほどまでに悔しいのだろうか。

（妙に腹が立つわね）

後に続く二人に視線を向ける。

何よりも愛するその才能と忠誠。心の臓が撥ねた。少し身体が疼
く。

「春蘭、秋蘭。後でたっぷり可愛がってあげるわ」

はい、と大きな声で、頬を染めて応える二人がいじらしい。
少しだけ気分が晴れて、どう可愛がるかを考える事にした。

第十三葉…………… 治世の能臣、乱世の奸雄（後書き）

才氣迸る曹操様のご登場です。

これから絡むはず。いろんな意味で。

第十四葉……毒には毒を以って制す・上（前書き）

今回は上・下構成です。

これで十四葉中に戦闘に入る約束は果たせそつだ。

岩鏡・義真のターン。

第十四葉……………毒には毒を以って制す・上

顔合わせから暫し経過した晴天の日。

質素で堅固な鎧に身を包んだ一団が、長社へ向け、荒野の中で駒を進めていた。

総勢四万騎。

先頭に立つのは義真。『皇』の旗と共に、その緑髪が揺れる。

側に並び立つ、『朱』の旗を掲げた、岩鏡も凜と戦士然としている。良く手入れされた馬は良く懐き、自由自在に動いているようだ。器用に岩を除けながら進む岩鏡。義真は、彼もまた器用に馬を駆っていた。

岩の少ない場所を進む岩鏡とは対照的に、義真は岩と岩を縫うように動く。

蛇行。

ため息交じりに、義真は遠くを見据えた。

馬の蹄の音に耳を傾けつつ、岩鏡は義真を横目に一瞥した。

「はてさて……。大見得を張ったは良いものの、前途多難に違いないですね」

「何せ五万で御座いますからね。これは多くの血が流れるでしょうし」

珍しく弱音を吐く義真。

岩鏡は無理もない、と思った。五万なんて言う大軍勢とは交戦経験がない。

激励の言葉を掛けようと、開いた口。慰めの形をして、止まった。薄く開いた眼。

その蛇の眼は、岩鏡を激しく痺れさせた。

「だから、まず小細工ですね。楽して沢山殺せるように、ね？」

振り向き様の横顔が、睥睨するような流し目が、とても恐ろしく見えた。

白い吐息が、細くとぐろを巻いて立ち上った。

「御覧よ、この兵糧を」

後ろを指差し、輜重隊の積み荷を見つめる。

岩鏡も、それに倣った。

愉しそうな声色で、眼鏡を上げる。

「実はこれ、砒霜を含んでいるのですよ」

砒霜、というものが何かは分からなかったが、義真の、悪童のような無邪気な笑みから察するに、物騒なものであるということ。岩鏡は容易に感じとれた。

「砒霜と言うのは、非常に強い毒です」

毒、その言葉に岩鏡の顔が曇った。

義真は、それに満足そうに頷いて応えた。

「毒には毒を以て制す。かつての英雄も、もう見る影もなく。既にこの王朝の害悪、毒でしかないのですよ、岩鏡君」

北叟笑む義真に、躊躇いがちに、批判の音色を含ませて。

恐怖を含んで応えた。

「それは、余りにも惨いのではないでしょうか……」

悪辣な悪童は、嗤った。小馬鹿にするような、見下すような、そんな。笑み。

その半眼が岩鏡には怖くてならなかった。

「優しさですか、甘さですか？」

その言葉はまるで、喉元に衝き付けられた短刀。

「それは……」

静かに小さく唾を嚥下して、岩鏡は視線を動かさないままだった。

「僕からしてみれば、甘さではない」

「……っ」

「このまま増長させれば、より多くの民が苦しむ。」

——確

かに彼らの言にも一理や二理もあるでしょう」

其処で区切って、義真は空を仰いだ。

垣間見えるその眼光は、濁って澄んでいる。

「この王朝は、腐敗しきっている。宦官によって政治は墮落し、天子は傀儡。金や賄賂が物を言う時代に成り下がってしまった。民衆が蜂起するのも致し方ない」

携えた鎌が重々しく揺れた。

気付くと、義真の顔が触れるか触れないかの距離まで迫っていた。
「ですが」

細い目の奥の光から目が離せない。

義真の口の動きも、揺れる髪先も、全て岩鏡のものになった。

「模範となるべき、ならねばならぬ英雄が、実害になってしまうのでは、話にならない」

「本末転倒も甚だしい」

「これで貴女が、岩鏡君が僕を卑怯と罵ろつと、一向に構いませんよ」

顔が離れる。

前髪に隠れた表情が暗く翳つて、奥が見えない。

「僕は——俺は、これを『義』と信じているのだから」

ふと一瞬見えた、奥歯を噛み締めるような表情。

それすらも演技なのか。疑いは深化する。

「——仮令、岩鏡が俺を見放そうと、」

義真は馬を進めた。

岩鏡はその背中を見つめる。憂い？ 決意？ 寂寞？

「これが、最も有効で、最も民を安寧へ導ける『真』の『義』である、と、」

でも力強く、義真は謳うように、自分に言い聞かせる様に、云う。

「俺は確信しているから」

そう語る義真を眺めながら、岩鏡は思った。

この男は食えない、勝てない。狡猾で、でも筋は通して。まるで物語の主人公の様に、役者の様に、振る舞いて駆け引きをする。

この男は蛇のようだ。鋭く痺れるような眼、静かに忍び寄り、巧

妙に巻き付き、絡めとるように舌で舐め擦る。

負けた。岩鏡は舌を巻く。もう絡めとられた後だから、逃げることは出来ない。

惚れてしまった後だから。深みに嵌まって抜け出せないような奈落に心が浸かってしまったから。

「……………義真」

「はい？」

「貴方が望む彼方まで、共に居させて下さい」

「———勿論」

口角が歪んだ。

そう応える表情は。

不敵に、狡知に、嗤っているように見えた。

蛇の如く行く。蛇が行く。

死の舞踏へと続く、この土気色の絨毯を。

薄汚れた黄を、真紅に染める為に。

第十四葉……………毒には毒を以って制す・上（後書き）

・皇甫嵩義真（真名はなし）

背丈：173cm

武力：???

軍略：81

知力：77

統率：69

政治：61

馬術：78

概要：官軍の切り札。岩鏡を愛する。

糸目、緑髪。

底知れない実力と狡猾さを秘めた人物。

第十四葉……毒には毒を以って制す・下（前書き）

これにて義真のターンは終了。

第十四葉……………毒には毒を以って制す・下

「嗚呼」

光の射さない洞窟の暗がりの中で、一人の男が呻いた。

男の目の周りは赤く塗られている。

赤い化粧は溶け頬に赤く伝い。虚空へ向けられたのは、呪うような眼差しだった。

「貴女様は、逝かれてしまった……」

その手の中にあるのはかつて直々に預かった、黄色の布。

愛しい無垢な笑顔が、未だ網膜に焼き付いて離れない。赤く滴が滲んで、無垢な黄色がまだらに汚れていた。

男には、それは見えない。

ただただ暗闇で慟哭する。

ぐぼつ、とくぐもつた咳が口から漏れた。抑えた手には血が生々しく光っている。

男は、布を再び頭に巻きつける。

刀をとった、

もう止める者は居ない。

愛すべき主君も、鬼灯も、此処には居ない。

「はは、はは……」

狂ったような声で、掠れた唾いが溢れた。胸が軋んで、痛んで、血が撒き散らされる。

闇の胎動に震えて、男は立ち上がった。

その男の名は、波才と『云った』。

ぼやけて霞む視界の中に、野太い声が響く。

洞穴の入り口で、腕を組んだ男が仁王立ちしていた。

波才はちら、と視線を向ける。男の名は程遠志。

筋骨隆々の肉体を晒している。

不愉快そうに波才は舌打ちをした。

「兵の五分の一は死に、三分の一は体調不良を訴えているんだが」
「知っている」

すると、程遠志は呆れたように頭を掻く。

知っているのならどうにかしろ、と非難の眼差しから目を逸らす。

「風土病や飢え、不衛生故にな」

「知ってんならどうにかしたらどうなんだよ？」

「どれも我ではどうしようも無い」

「食糧ぐらいはどうかなんじゃねえの？」

「無駄だ。補給路を断たれた」

「！」

報告を受けたのはごく最近になってからだった。

波才も、義真や岩鏡を舐めてはいなかった。しかし微に入り細に入り設計した補給路の橋は落とされ、道に岩や木々を積み重ねられた。更には拠点まで制圧されていることに気づ

波才自身毒を呷ってから、官軍がわざと奪わせていることに気づいていた。

このまま全滅するのも時間の問題だった。

「おいしい！ どうすんだよ！」

胸倉を掴み上げて程遠志が唾を飛ばす。

波才はそれを拭いながら血を吐き捨てる。

「今宵、夜討ちをかける」

「……」

「皇甫嵩が長社を拠点にしているのを確認している」

「……そこなくっちゃな」

「部下にも伝える。苦痛は間もなく終わる、とな」

「どういう意味かは知らないけどな、俺は官軍ごときにや絶対に、負けねえぜ？」

力強く程遠志は言い放つ。死に逝く台詞としては上々。

背を向け出ていくのを視界の端に捉え、波才はまた小さく吐瀉し

た。

大蒜にんにくを袋から取り出して口に含む。

「——時間は、もう無い……」

脳裏には天和。人和。地和。

鬼灯の死ぬなよ、という声が頭を過る。

無理だった、すまない、と小さく呟く。

刀をとる手が震える。

洞窟の外へと目を向ける。

夜、外に光は見えない。

其処に居るのは女神か死に神か。充血した目では、見ることが出来ない。

しかし進むことしかできない。

これが革命の代償。波才に後悔はない。

「来ましたね」

夜。突風が頬を掠める。義真は小さく息を呑んだ。

今夜は風が異常に強い。波才軍はこれでないとは動けないという条件があつたため、義真の今夜、という予想は的中したと言える。そしてこれは義真にとっても都合だった。

茂みが、草がぶつかってけたたましい音が生まれる。

しかし、数万の波才軍が決戦を仕掛けてくるのに行動する音は人工的で不自然。

「三万〜四万も動けば、分からぬ訳がない」
敵軍勢は四方から。

義真は身体を震わせた。

寒さに因るものか武者震いかは解らない。ただ隣の岩鏡を抱き寄せるだけにした。

暫し呆けていた岩鏡は、頬を朱に染めて、静かに抱きしめ返す。

「っ……。こ、これで少しは温かくなれるのならば、私は何時でも

……」

「続きは後です。——それに、この策で大分熱くなるでしょうし」

義真は田単の故事を反芻していた。

戦国時代の斉国の名将、田単。

彼が燕国を破った計略は火牛の計。

「火牛の計……ですか」

「ええ。籠城戦で田単が執った奇策です。今回のような日は、大いに猛威を揮ってくれるでしょうね」

「……できるでしょうか？」

「無論」

少し表情を翳らせて、岩鏡は言う。

「正直、私は少しばかり、怖いので御座います」

義真は驚いたように目を剥く。

その後微笑して、応えた。

「僕も、怖いですよ。戦の前は、何時も怖い」

「そうは、見えないのですが」

「恐怖を、押し殺しているからですよ。緊張で、決意で」

「決意……」

「守らなくちゃいけないものがある、なんて理由つけてですよ。自分を窮地に置くんです」

「守らなくちゃいけないもの……」

「だから失敗は許されない」

「守るために？」

「そう」

「例えば……？」

「岩鏡君、君とかね」

貼り付いた笑みに、柔らかい微笑を重ねる。

期待通りの台詞なのに、岩鏡は面食らって黙り、やがて両手で顔を隠す様にして義真の胸に収まった。

愛しい人の髪を撫でて、義真は二言三言囁く。もつと紅潮して、胸にいやいや、と顔を押し付けて、背に両手を回した。

もつと撫でて、と思いながら、つむじに落とされる熱を帯びた唇を感じる。

口にも、と上を向いて目を閉じる。静かに熱を共有して、寒さをまぎらわす様に形をなぞるように口付ける。

首に回した腕に義真の力強さを感じて、もう堪らなくなる。戦争の前で昂ってるから仕方ないよね。岩鏡はまた唇を押し付ける。

蕩けるような熱の中で、そこはかたなく視線を感じて瞥見すると、居心地悪そうに兵が立っている。

慌てて離れようとするが、義真が強く抱き締めるから離れられない。

羞恥に晒され恥ずかしそうに声を上げる。義真は愉快そうに笑んでいる。

悦しんでやっているな、と睨み付けると、義真は残念そうに唇を離す。

「さて、そろそろ頃合いや良し。牛を放して下さい」

「はっ！」

漸く去れた兵を尻目に、朱を超して茹で蛸の様に赤い岩鏡を余所に、瞼を閉じて涼しげな夜風を目一杯に吸い込む。

喧しい鳴き声と共に、油を撒いた木々が燃え盛り始める音が耳を支配する。

やがて肉の焼けるような、香ばしくて下卑た悪臭が鼻を劈く。

——瞼を開く。

——蛇の眼光。

「英雄さんよ。精々地獄を味わってくださいよ」

燃え盛る火の中。

波才は、焼け落ちていく世界の中で。

一人の少女を、想った。

それは長年を共にした、最愛の主君ではなかった。
只の部下だったのに。

死ぬ間際に想起したのが、彼女とは。

もう自分は長くはない。

死んだ人々を想っても……………。

……………。

波才は、燃え盛る紅蓮の中を、歩む。

毒に侵され、霞む視界を頼りに、踏み出す。
逢いたい。

ただ只管に、逢いたい。

「鬼灯……………」

この手を。

触れさせてくれ。

第十四葉……毒には毒を以って制す・下（後書き）

義真、どうみても悪役です本当にありがとうございました。

第十五葉……霸王と兵神・上（前書き）

復歸。

投稿。

時間ができたので。

第十五葉……………霸王と兵神・上

「ふざけてるわね」

私は呟く。夜の湿った風が髪を攫って鬱陶しい。

態々この私が田舎くんだりまで来てやったと言つのに、黄賊共は夜通し宴会、宴会、宴会。

いい加減嫌気がさしてくるわ。何かの策略かと思つて律義に毎夜毎夜偵察出してやったのに。吞めや騒げやの馬鹿騒ぎ。

田舎にしてはやけに踏み固められた道。後ろから蹄の音が聞こえる。

「まあ、そうおっしやらないで下さい華琳様。補給路も順調に断つているのですから、収穫は充分にあります」

「そう、ね」

淡い蒼の片目を隠す髪を靡かせ、弓を握り直し私を諭すのは我が腹心にして秋蘭。

轡を並べ、同じ高さから奴らの根城を睥睨する。

「ああ、それともう一つ」

「何？」

「どこの輜重を点検しても量が著しく減っているのですが、如何なことでしょう」

「ふむ——ああ、そうね。なるほど。合点がいったわ」

頭に「？」を浮かべる秋蘭。

教えるのは後にしましょう。閨でたつぷり、とね。

「戦力面から見れば、取り敢えず、中に管亥と張曼成が居るのは確認しているのよね？」

「はい華琳様！…俄かには信じ難いですが。華琳様程の御方が認める奴が、この馬鹿騒ぎに参加してるなんて」

悪態を吐いたのは桂花だった。猫耳が可愛らしいわ。

大の男嫌いだけど、そこも私にとっては高評価ね。使えない無能な男が余りに多い世の中だものね。

有能で何より私を心酔している。私の自慢の軍師。

「管亥が怠るとは、確かに考え難いわね」

管亥――、原始黄巾党の波才の右腕。剛毅、と揶揄される程の英傑。

詳細は詳らかにされていない。つまりそれは彼が情報戦や諜報に長けていることを意味する。

そして、武力は遥かに波才を凌ぎ、官軍では手をつけられないと謂われたほど。

数少ない有能な男の一人。できるなら、彼は欲しいのだけど。

「――まあ。我らには姉上あねいさまがいるから、何も問題はないのですがね」

「ん？ 呼んだか秋蘭よ」

ずっと先で振り返ったのは、姉の春蘭。黒い髪が月夜に溶けて幻想的でそそられる。爛々とした瞳は、虎か獅子のよう。首輪のついた猛獣。

私の元に歩み寄る姿は忠犬。撫でてやると尻尾を振ってすり寄ってくる。

それでも、こと武力にかけては我が軍切手の実力者。ちよつと頭が足りないけど、それも愛嬌の内よね。

「ええ。貴方達には期待しているわ、春蘭、秋蘭、桂花」

「！ はい、華琳様！」

「必ずや御期待に沿って魅せましょう、華琳様」

「はい！ 男なんて早く潰してしまいたいよう！」

異口同音に応える。

いじらしく愛おしくとても頼もしい。

「次の黎明時、朝駆けするわ。引くわ、用意をしましょう」

今も未だ喧しく蛙鳴蝉噪と騒ぎ立てる者共よ。

死に逝く覚悟をなさい。

私を敬い畏れ、そして果てろ。

——風が私の頬を撫でる。それは傍らで渦巻く。

「……」

（外を取り巻く風が変わった、か）

夜も深まり暗闇が増す。

どこで鎌首を擡げているか分からない英雄の眼光が、光っているに違いなかった。

黄巾賊の根城ではから騒ぎが行われていた。

から騒ぎ、と云うのも無理して騒いでいるからで。

何より、横になり黄疸をつくり隈を濃くした男達が憔悴しきつて横たわっている。

管亥は嘆息を零した。視線は窓から城の外へ向けられている。

黄色の布で短い髪と口元のみを覆っているが、それでも覗く活動的で若々しい肌の色。仄に紅の交じった黒い瞳や凜とした眉、中肉中背の九尺僅か程度の背丈。眉目秀麗と云うよりは威風堂々。年齢は曹操と変わらないだろう。少年と青年の中間点。

しかし器は非才で、聡明で剛胆。とは言え老獪さには欠けて直情径行であった。

策を考えたのは管亥だった。

馬鹿騒ぎして注目を引き付け、宴を断続させることによりこの城に満員でいると思わせる。実際は少しずつ見つからない様に曹操陣営に伏兵として忍ばせる。

そして、朝か夜に一気に襲撃を受けた際に、少人数で籠城戦を敢行。一方、張曼成による指導の元、大量の伏兵を展開し曹操陣営を

強襲。

策だけ見れば、策だけ見れば、管亥の有能さが窺えただろう。

しかし現実是非情で、此方は賊軍。後ろ盾などあるはずもなく、物資や食糧は現地調達。更に補給路も断たれた。飢えるのも時間の問題。

そして最も深刻なのが、断たれた上に中身を確かめられた事だった。つまりそれは逐一内情を探られているようなもので、この城の人口などばれているだろう。

謀略や策略と云った類の物は万が一にも億が一にも、画竜点睛を欠いてはならない。隠密に緻密を重ね、ようやっと始動するものであつて。

相手が悪かった。慎重に遅く動かれた為に、こちらは少人数であることを悟られぬよう騒いでいたのが裏目に出て、もう兵の体力は無い。

再度ため息が漏れる。

声をたて続けなければならない兵士たちにもそれは届いて、陰気に響く声が深まる。

（負け戦が確定しちゃった。まずいぞ……）

昔から爪を噛む癖は直らなかつた。緊張や焦燥すると必ず噛む。

波才に恩義はあつた。しかし張角やら張宝やら張梁などは顔も知らないし、義理を立てる道理も無い。究極的に言えば、黄巾賊自体は、どうでもよかった。

降伏しても構わない。

とは言え死は怖い。

逃げ出したい。しかし自分が原因で、仲間が死に逝く咎には耐え

られない。

噛める爪はもう無い。

ただただ、少年の小さな背には、どうにも重き荷だった。

——夜は更け行く。

月は雲に翳り。

明るく輝く遠い東の空。

遙か蒼天には、血の様な太陽が昇っている。

第十五葉……………霸王と兵神・中（前書き）

兵神。

第十五葉……………霸王と兵神・中

曹操軍の騎馬隊が黎明を駆け抜ける。

所々恐らく黄巾賊に因るものと思われる倒木や大岩が散見されたが、何の甲斐も無く乗り越えられていく。

大軍の行軍で地響きは激しい。

幽かな蒼天の日の出が往く先を照らす。

去りゆく空は暗い。

西。

陽が届かない？ 違う。

煙が、西の空を支配している。

西は未だ、黄天の空だった筈だ。

旧・曹操野営本陣。

一帯は焦土と化し、灼熱の焰が木々や人々を呑みこむ。

うねる様な炎熱の波動が黄色の布を、絶えず噴き出る漆黒の煙の

暗幕が空を覆う。

消し炭へと炭化した死体と半身爛れた死に欠けの屍。

それは何れも黄色の布を巻き付けていた。

一人の男がその中を練り歩く。

その男の髪は異境の朱髪。

並外れた長軀と提げた長身の両刃剣。

荒廃した世界を映し出す鏡のその奥。その双眸からは何を推し量ることも出来ない。只無比に、無情に、無慈悲に歪む。

風が一阵舞い、足に絡みつく炎の蛇を切り裂く。

鼻を劈くのは芳ばしい死臭。何食わぬ顔をして男は歩く。業火の中は不思議と静かだ。不自然に大きく足音が場に静かに染み渡る。

異様。圧迫的な存在感も、汗一粒見せぬ透き通った肌。息苦しうにも見えない。ただただ淡々と何か者を探す様に奥へと足を踏み入れる。

砂を踏み躪る音が聞こえた。

音、それは強大な、凶大な恐怖。

張曼成は邪気の塊の様なそれに圧倒された。

童顔で女性的な顔の半分は焼け爛れ、四肢は欠け、刀を握るその手は心許なく震える。

左腕が瓦礫の下敷きに潰れ、火が燃え移ったので腕を切り落とし。血が間欠泉の様に吹き荒れる中でも、痛みが身体を麻痺させ逝く中でも、苦しみはその恐怖に上書きされる程。呻き声は口から消

え、内臓が締め付けられ、絶え絶えな氣息に変わる。

失血して霞む視界と終焉を告げる鼓動の明滅。

身体に移り移った火が身体を消し炭へと変え、存在が消えていくなかでも、視線をずらせない。

失うものは何も無い。

それでも、恐怖を感じる。

これは根源的な畏怖。

そう、まるで人が神々へ向けるような――

「張曼成」

厳正な声が耳の中で反響する。一切の余韻は無い。その言葉に在るのは意味だけだった。

呼ばれた事に気付くのに時間は時間がかかった。

「……はい」

「苦しいか」

裁き。

これは有罪判決、死刑宣告。そうに違いない、張曼成――

枇杷は、炎の影に揺らめく姿を見て、今までの罪を清算をするのだ、と思った。

手にした銀の剣が、己の首を断つに違いない。

「苦しくは、ないかなあ………」

「逝きたいか、生きたいか」

おや、この死に神は選択の余地を呉れるのか。幽かに目を大きく開く。

罪と咎に塗れた汚らしい手。

見つめて枇杷は厭になる。

「殺してくれる、のかい？」

「殺めることは容易い。人間から堕ちた悪鬼、しかし地獄では生温い」

はは、と乾いた笑いが枇杷から漏れた。

諦観。悲観。ただ、絶望はない。

どこまで堕ちるのだろう、黄巾賊。夢見たのは太平だった筈。はははは、得られたのは死ねない地獄だったよ波才。

しかし。

「——しかし、私も又堕ちた身」

影が揺れる。

銀色の刃が薙がれた。

「私は英雄では無い」

黒煙が消し飛ばされる。

風が吹き乱れるような轟音は、断末魔か。

「私は、只の愚か者」

自嘲的に嘯く。

枇杷の身体がふわり、と浮いた。

血が固まり出血は無くなった。それでも酩酊感は無くならない。ただ、どうであれ拒否権が無いのは知っていた。

ついで来い、悪鬼。手前は、選ばれた。
世界に、手前に、泰平を呉れてやろう。

第十五葉……霸王と兵神・中（後書き）

地獄へは遠回り。

兵神の行軍は此処から。

第十五葉……………霸王と兵神・下（前書き）

出会い。宿命。

改行と云う名の余白が多いのは仕様ですので。機能美機能美。

第十五葉……………霸王と兵神・下

「華琳様」

「何、秋蘭？」

「よろしかったのですか？」

一馬身程先行なさっていた華琳様は、私の呼び掛けに御顔を向けずに応えなさりました。

「ああ、燃やした事？」

「はい」

速度を落とし、真横に並びなさる華琳様。

その横顔からは何の気掛かりも後悔も見えない。

何のしがらみも無いような、飄々としたもので。

晴れ晴れとした様な口元から漏れる、痛快そうな歪んだ嗤い。

背筋が凍る。滴る汗さえ見透かされているような錯覚。

「……本陣を燃やしてしまわれるなんて」

「そうね、私の触れた物が汚らしい賊の男が触れるなんて耐えられないわ。だから燃やしたのよ。うふふ、ついでに賊共も燃えてたわね？」

「ついで……………」

ついで、程度なのか。霸王にとって何万の命は。

「秋蘭、私に着いてきなさい。さすれば、泰平を上げるわ」

恍惚として、選択肢を選ばせない不敵な表情。

そうだ、と思った。

これが霸王。私が従う君主。

何者よりも気高く、何者よりも誇り高く、そして情け容赦ない。

胸に蟠りが無かったわけではない。

でもただ、唯々諾々と従っていれば良いのだ。

華琳様——曹孟徳の御心の礎に我が魂を。我が亡骸を。我が全てを。

悔いは無い。

——滴る汗を拭う。何故だか、冷や汗が止まらない。

城の直前まで駒を進めようが、城の動きが無い。

それまで行われていた喝采が嘘のように鳴りを潜め、不気味なほどの静寂が広がっていた。

命を受けた春蘭が駆け出す。携えた剣に兵が呼応し、雄叫びを上げる。城門を蹴破り、鬼のような膂力を以て楔が放たれる。瞬間の進攻。断末魔が数回聞こえた後は静かだった。

弓兵が矢を構え騎馬の馬が唸り時間が刻々と過ぎ行く。砂嵐が視界を遮る。第二波の許？の軍勢が城へと駒を進める。

やがて城壁に見慣れた黒髪が摩く。空高く剣が掲げられた。
つまらない幕引きね、と呟く声が二人に聞こえた。

秋蘭、桂花。一様に、声の主を見つめる。

城の内部から運び出されたのは死に欠けた黄巾。それは襤褸雑巾
のよう。

桂花は媚びる様に首肯する。

秋蘭は、身を裂かれた様に、苦虫を噛み潰す。

痩せこけたものの自力で歩くことが出来る敵兵は保護されていく。

そして一瞥する。視界の端には、四肢を欠いて、飢え罹り苦しむ
人々。

もう彼らは戦えない。治療する手立ても保護する食料も余裕も無
い。

つまり。

理性では解っている。只、本能が悲痛を、無情を、叫ぶ。

——— すまない。すまない。

華琳が城内へ馬を進める。

遅く動く時の中で、逡巡を感じる。

中へと向かう風が秋蘭の頬を撫でる。

（私は弱い）

だって助けられない。

これは甘さ？ 優しさ？ 驕り？

答えが欲しい。

救いが欲しい。

——それは強さへの……

秋蘭は辺りを見回す。

弓矢を持つ両手が震える。

「どうしたの？」

「いえ」

風の声が、聞こえた気がした。

「お疲れ様春蘭。後でたっぷりご褒美を上げるわ」

其処らじゅうに死骸の転がる通路を抜けて、広がったのは玉座の間。

血生臭さが鼻から抜けないまま見えたのは、書斎と云うには広すぎる、天井の高い戸棚だらけの部屋だった。

入ることが許可されたのは私達のような将校だけ。

兵達は待機を命じられ、残党狩りを開始した。

「管亥はどうしたのかしら？」

「ごめんなさい華琳様あゝ。逃げられてしまいましたあ」

姉上あねじやが書簡と埃に塗れながら言う。

……どうやったらこんな器用に全ての書簡は落せるのだ姉上よ。

「姿を見たのね？」

「いええ。ボク達が来た途端に逃げ出したそうですよ」

許？——季衣が応えた。それに華琳様が、ぴくりと眉を上げる。

絶を握る手が、肩が、張っていた力を抜く様に落ちた。拍子抜け

したようだ。

「『剛毅』が？ 冗談でしょ？」

「どうやら真実のようです華琳様。残党兵が、そう証言しています」

桂花が姉上といがみ合いながら入ってくる。どうにも馬が合わないようだ。

あーあ、こんなに粗相したのはどのどいつかしら、と毒を吐くと、うつ、と肩をすぼめる姉上。とても可愛いです……御馳走様。

華琳様が悩むように組んだ腕を解いた。

「……そう。いいわ、管亥は諦めましょう。その代わり、この中から捜すわよ」

桂花がやった、と目を輝かせる。姉上も陰ながらよし、と喜んだ。あはは、と季衣が困った様に笑う。

人手が足りない問題が解消されない、か。苦労かけてすまないな。

「それで、何を捜すのですか？」

「ふふふ」

意味深に微笑みなさる華琳様。

「書物よ。それも分厚い、ね」

「木の葉を隠すなら森の中……途方もないじゃない……」

桂花が半ば諦めを露呈しながら、呟く。そんな彼女を華琳様が見つめる。くすくす、と笑んで応えた。

一刻も早く帰りたいそうだ。ああ、露骨に顔に出すのは気を付けた

方がいいな。

黴臭い部屋に厭き厭きしたのか、それとも早く『御褒美』が欲しいのか。

どちらもだろうな。……桂花のことだから。

「ありますかねえ？ ボクお腹もうぺこぺこですよ」

「これ季衣……しかし確かに、桂花の言う事も尤も。本当にあるのでしょうか？」

「管亥が持ち出してなければ、ね」

「確率は未知数ですが、在るよりも格段に低い……のでは？」

「でも、尋常じゃない位焦った人間が態々分厚い書物を持ち出すかしら？ それに残党の連中によれば、どうやら然程興味を示さなかったそうよ」

「執務室もその他の書架にも無かったので、此処にあるのはほぼ間違いないですね！ 流石華琳様！」

そう言った処で、桂花がうん？、と首を傾げた。

「少し宜しいですか華琳様？」

「何、桂花？」

「それって、どんなのですか？ 厚い、薄い？ 新しい、古い？」

「張角から受け取ったそれを、波才が管亥に託したと言われる、古臭くて分厚い書物よ」

「なかみはどんなのなんでしょうか？」

それまで黙っていた姉上が口を開く。

無垢な瞳に、桂花は呆れ返って口を閉ざす。華琳様は、嬉しそうに苦笑した。

「……………そうね。それには、世の理、それから全ての事象に対す

る答えに限なく記載されているらしいのよ」

「それは…凄い」

息を呑むような音が聞こえた。

……全ての事象に対する答え、か。

この不幸の果ても、無情の理由も、この言いしれぬ漠然とした不安の答えも、載っているのだろうか。

そして……私の生きる意味も。

「それで、その名は？」

私の問いかけに、華琳様は、妖しく、悪戯めいた笑みで、
言いよつの無い艶やかさとおぞましさを匂わせて。

嚙下する唾の音が鮮明に耳に届く。

嗚呼、と恍惚そうに、

「太平用術の書」

「あ、それってこれのことですか？」

銀色の風が逆巻いて。

黄ばんだ羊皮紙のような紙をはためかせ。
銀色の双眸。

愉快そうに、不愉快そうに、歪むそれに。
私は、釘付けた。

第十五葉……………霸王と兵神・下（後書き）

うわぁ今回もまた最後まで書けなかった……

第十六葉……遠ざかる足音

「あらゆるものへの応えなんて、知りたいですか？ 自分の全てを？ 世界のすべてを？ 何もかもの、存在理由も？ 知れば狂ってしまうような、狂気の歴史を？ 真実を？

——もしそうなら、器の多寡も知れてる。期待はずれですよ、曹孟徳」

高い書架に腰かけた男が、辛辣に言葉を並べる。

ただ淡々と紡がれる台詞に、反応したのは春蘭だった。

肩を震わせながら、剣の切っ先を向ける。

「黙って聞いていれば好き放題言いおつて！ 赦さんぞ貴様ア！」

言うや否や。

真っ直ぐ駆けだす。

華琳様の制止も聞かず、棚の壁を蹴り上げ飛翔する。剣の腹が、男を二分せんと斬りかかった。その刹那。

「狗は退いてなさい」

突然笑みを浮かべた男から、厩大な風が放たれた。

質量を持つ圧倒的な風。

空中で、真正面から受けた春蘭の身体が跳ね飛ばされ、床へ落下した弾む。

肺から空気が押し出され、カハッ、と息を吐く。

——追隨するような矢が弓の弦から放たれた。

秋蘭が放った五条程の矢。

届く直前に、男の姿が消える。

渦巻く風を残して。声が残された。

「夏候の妙才。冷静を欠いてはなりませんよ」

忽然と、秋蘭の眼前に姿を現す。覗きこむように、挑発するように腰を屈める。

驚くほどの背丈だった。

銀色の双眸が彼女の動揺した顔を映す。

——打ち付けるように繰り出される鉄球を蹴り飛ばす。

釣られて壁へと叩き付けられる季衣へと視線を向けようとしても、目の前から注意が逸らせない。背筋に冷や汗が伝い、身体が震える。

「力量を、彼我の才を、差異を、測りなさい」

「無意味。華琳様を御守りする事こそ、我が使命なれば」

「不毛な忠誠。勇ましくもなければ恐ろしくもない」

「それでも、だ！」

震える、遅い身体を叱責し、右手を衝き出す。男は秋蘭の拳を掴み、握り潰そうと力を込める。

男のもう一つの拳が鳩尾に吸い込まれる。

「ぐぼっ……」

くぐもった声が漏れた。視界も揺らいで、身体が意識と共に崩れ落ちる。

——そして又、位置を変える。

如実に現れる身長差に、華琳は見上げる羽目になる。
見下すその眼光に、慎重さを偽って声を投げかける。

「貴方が……管亥？」

「まさか」

また風を空気を裂いて位置を変える。数歩ほどを一息に後退した。
茫然と立ち竦む桂花や怯む秋蘭、漸く立ち上がった春蘭と季衣を
一瞥ずつ。

男は嗤った。

「だったら、何者よ」

視線を一身に受けて尚、万物の王の様に泰然と構える。

ぶわ、と風が発生し、本や紙が舞い上がる。長剣を掲げた。

巻き上げられた紙束を鎌鼬に切り裂く。

紙吹雪の中。

視界を覆い尽くす程の白、白、白。

華琳ははっと息を呑む。
耳元で、囁く声がする。

「私は、羌楓の軍」

劉の名の元に。

幽かな華の残り香を求める、
哀れな死に損ないです。

「軍……へえ」

第十六葉……遠ざかる足音（後書き）

うーん、出来が不安です。

修正かけてマシにするのでご勘弁を。

第十七葉……………近付く足音・上（前書き）

安全と安心と信頼の鈍足亀更新。 亀に謝れ。

と云う訳で漸く桃香編。

頑張れヒロイン！

第十七葉……………近付く足音・上

時は遡る。

朱儁も皇甫嵩も曹操も退出した玉座の間。

彼らが去ってから暫くが立ち、桃香達も出陣してからも暫くが立つが変わらない空気が流れていた。

白蓮が眉間に指を当て、椅子の上で胡坐を掻いている。
精神統一でもしているのだろうか。

星は柱に凭れかかり、その様を見つめる。
待機を命じられ進退窮まる身としては板挟みで冷静でいられないのも理解はできる。

重苦しい訳ではない静寂を切り裂いて、白蓮が口を開いた。

「まだ、かなあ……………」

得物を磨き息を吐きかけてから、星は嘆息交じりに答える。

「未だでしような。便りが無いのが良い便り、せめて黙して待ちましようぞ」

縋る様な瞳で見つめていた白蓮は再び瞼を閉じる。

時折震える右手が剣を握ろうとするかのように辺りを探る。
苛立ちか悔しさか。

それを推し量る術を星は持たず、また武器へと目を落とす。

持て余す感情は溜めこまない方が良いのに。常々星は思う。
しかしこれが白蓮。誠実で、生真面目で、心配性で、損な性分。

白蓮が白蓮たる所以なのだ。

何より、それこそが己が仕える理由。軍が手を取る理由であると思う。

酒を口元に運び呷る。

無論星も不安に思う点もある。

しかし見やれば、額に塩辛い汗を見せながら奥歯を噛み締める白蓮が居る。

自分が冷静を保たねばならない。

仕えている食客の己が、支えてやらねばならない。

故に。

「……まだかなあ」

「未だでしような」

「まだ、かあ……」

執拗に繰り返される言を、

宥める様に諭す様に応えてやるのだ。

聞こえる足音。

ゆらゆらと揺れて、武器に括りつけた鈴の音が啼く。

どのくらい走ったかは把握し切れない。
汗が流れて乾く程度の時が流れた。

それでも北京からそう離れてはない。

馬の地鳴り。

砂塵が吹き荒れ燦然と太陽が照りつける。
その中で一際響く音。

しゃん、と鈴の音が啼いた。

桃香は砂塵舞う荒野で目を細めた。

愛紗、藤、雪柳、鈴々。

続く軍勢と勇将に、沸々と笑いが込み上げてくる。
噛み殺しながら馬を駆る。

壮観だ。爽快だ。

私は、非力じゃない。卑屈になる必要なんて無い。

靖王伝家を握る汗ばむ手。
力が一層籠る。

「……桃香様、御機嫌ですね」

不思議そうに、愛紗が肩の位置を並べて言う。

「あはっ、解る？」

敢えて茶化す様に、獰猛に笑みながら応える。

愛紗は内心で感心する。

変わったな、と思わざるを得なかったが、口には出さない。

在る程度筋肉の付いた身体、ほんのりと健康的な血色の肌色。弱
弱しさを感じさせた瞳も、もう無い。

痩せた、というのは不躰か。

只、以前の様な儚さは無い。泰然自若とした、摩訶不思議な落ち
着きがあるだけだ。

まだまだ速度を上げようとする桃香。
後ろから声がかかった。

「桃香、余り、はしゃいじゃ駄目」

藤が淡々と言葉を並べた。

愛紗は後ろを瞥見する。

涼しげな顔で走る雪柳も居た。

口の脇に苦笑を見せながら。

冷たそうな唇が困った様に動く。

「些か勇み足が過ぎるかと思じ上げますが」

「……そうかな？」

「そう」

「敵はもう近いと愚考致します」

「蹴散らすことは容易い。でも、死んじや意味無い」

「その通りです」

「……でも、先に行けるよ。私なら」

「鈴々はもつと行けるのだ！」

蛇矛を握り、鈴々が躍り出る。

ちりん。鈴の音が啼く。

風を纏った鈴が揺れて音を吐き出す。

見えてきたのは靡く『黄』の旗。

未だ距離はある。

荒野の中心に本陣を立てるのは何故。

死ぬ気か。決着か。自身の表れか。

細められた目が、ずっと覇気を帯びた。

その意気や好し。潔い。只、それ故に氣にくわない。

「総員」

びりびりと大気が震えている。

獅子が、殺意と怨念を渦巻かせて吼えているのか。
もう片方の長刀を抜いて、本陣へ向ける。

「加速せよ」

獅子の斧の光が煌めく。

『黄』の旗は薄汚れて。

黒く、赤褐色に変わった。

それでも立ちはだかるというのか。

「遠慮なら要らない」

金属の、装填された様な重々しい音が耳に届く。
赤くたなびく髪。

来い。

そう聞こえた気がした。
行くよ、今。

「切り込め！」

第十七葉……………近付く足音・中（前書き）

第十七葉……………近付く足音・中

「徐晃様。敵本隊が切り込んできます！」

「お前は俺の目が節穴にでも見えんのかよ。俺にだって見えてら」

夥しい砂煙が前方から見える。

兵士達は慌てて戦支度を整え始める。

——おせえよ、お前ら。

恐怖は無い。

勝機も闘争心も勝算も気力も無い。

只、この世の未練さえも失った。

「波才の兄貴の遺志を俺は胸に刻み続ける——」

小声で呟く。

そうすれば、未だこの世に害悪として残っている理由を正当化出来るはずだから。

後追いを出来ない自分を責めなくても済むのだから。

静かに、空っぽの瞳で見つめる。

「分裂した、か。来るぞ、挟撃策が」

「挟み撃ちだ！ 総員、体制をとれ！」

鬼灯の声に呼応するように軍勢が動く。

しかし眼前の軍勢とは比較するのも烏滸ましい程の練度の差があ

る。

——今更、どうという事もないな。

「もうどの道間に合わん」

平和を願ひ蜂起した者共。無情等と嘆く術も道理も持ち合わせてない。

渴いた心に空しく吸いこまれるだけだ。

「せめて」

砂漠の砂のような此処と心。

慰めは要らない。

「地獄の御供にでも付いて来てもらおうか、な」

斧を握り直す。

乾いた風が頬を掠める。

作戦区域に突入。

戦車の残骸の板切れ等を踏み越え、紅蓮の中へ身を躍らせる。

『黄』の旗がそこいらに転がっている。踏み越えるのに良心の呵責は無い。

既に、黄巾党は過去の遺物になりつつあると桃香様は見解なさっていた。

各地で多くの反乱の英雄は碎け散り、残ったのは徐晃だけ。恐らく、今の私達の敵ではない。軍様のご加護を受けた私達には。

「——はあああああつ！」

雄叫びを上げる。

びりびりと震える大気。

部下の部隊も、馬も呼応して、精神が高揚していく。

肌が粟立って、此処が戦場である事がはっきりと意識できる。

居た。

振りがぶる徐晃の姿が見える。

構わず駒を進める。

「矢を放て！」

戦国時代の一国の趙の名君・武靈王が採用した馬上戦術が「
胡服騎射」。

馬から矢を番え、股の筋肉で馬を固定しつつ放つ。

やがては、とも思いますが、ねえ。命中まで期待してはいません。今は混乱の引き金になれば上等。

……矢が着弾し、その間に各兵抜刀する。

そのまま右往左往と陣形も体を成してない敵兵に切り込む。

大蛇が卵を呑むように。

大波が漁村を呑みこむように、瞬く間に包み込まれて逝く。

私は、偃月刀を構えて、徐晃を目指して一直線に呐喊します。彼女もまた神速の足を以って駆けてきます。

丁度、影が重なる時、徐晃の身体は太陽を背にして激しく跳躍し舞っていた。

斧が降ってくる。

「徐公明、その首貰うぞ！」

「取れるものならば！」

（！ 強い！）

馬上からの偃月刀と斧が激しく火花を散らす。

「甘えよ！」

偃月刀に絡まる斧を弾く様に、徐晃は身を振りつつ距離を取る。

舞踏を踏むかのように、華麗に斧を振るう。

片手の斧による戟で、既に数人の部下が落馬するのが見えました。

大切な部下の命。

しかし大局を見失っては是非も無し。そのまま直線状に駆けます。

「なんだ！ 関雲長てめエ逃げんのか！」
「どうとでも言え！」

そして再び胡服騎射。

憤る徐晃を尻目に、真っ直ぐ駆け抜けます。
所謂、車掛の陣。

「×」の形を描く様に馬を進める戦術です。

ああ、ほら。

遙か彼方から、怒涛の地鳴りが。

――無間の槍衾。

――どうか生き抜いて下さいね。

第十七葉……………近付く足音・中（後書き）

あと桃香、鈴々、藤、雪柳と車掛は続きます。

次回はその先の御話。

次は色々な物語の節目。終焉であり、また新たな時代の幕開けでもあります。

進行が遅くて申し訳御座いません。

もう少しテンポ良く進めたいものですが、力量も技術も及ばず。精進して参ります。

第十七葉……………近付く足音・下

矢に当たって脳漿を垂れ流す死体。転がる首や手首。乱暴に切られた馬の足。血塗れの刀、黄色の布。その中には黄色の布を巻いていない首もある。

血溜まりは池のようで、波紋を描いて生々しく光る。

その中に、鬼灯は立ち尽くしていた。

斧から絶え間無く血が滴り、その赤い髪は血を浴びて深紅色に染まっている。

茫然と見つめる先には、淡い紫色の髪に細長い針を携えた少女。近くには黒い髪を一点で結い、生温い死臭を帯びた風に絡まれ靡かせる少女が居た。

それは、かつての反逆の同胞であり腹心とも言えた者と、かつて対峙した英雄。

更に遠くには取り巻く兵。桃色の王と橙の少女、静かに佇む白銀の氷細工の様な女性。

つまり、此处には自分しか居ないということ。

「観念しろ徐公明。もうお前に道は無い」

「……………」

「無碍にはしない。投降しろ」

「……………はっ」

口の中の血を吐き出す様に吐き捨てる。

単純に不愉快だ。

「糞つたれ。男の尻追うだけの売女が何をほざいてやがんだ」

「負け犬の遠吠えなぞ聞こえぬ。早く諦めろ」

「処女みてえな面しやがつてよ。純ぶってんじゃねえよ」

「口が汚いぞ雌。純潔は捧げべき御方が居るのだ」

視線が交錯する。

空気が、みし、と軋んだ。

愛紗の表情は透き通っている。瞳はいやに冷徹だ。それに鬼灯は北叟笑む。

「さっさと尻尾巻いて男の元へでも行つてろよ。邪魔だ」

「ほう、余程命が要らんと見える」

「だから、うぜえつつつてんだろ。黙れよ」

ぐ、と愛紗が腰を落として重心を下げた。

偃月刀に刻まれた青龍が呼応するように狙いを定める。

鬼灯が思っているよりも幾分愛紗は冷静だった。

軽口程度で揺らぐような心持ではない。

「霸ッ！」

真っ直ぐに駆けだす。地を弾く様に、跳ねる様に距離を縮める。

大きな胸を仰け反り、そして両手を突き出す様に斧を向ける。

がんツ！ と激しい火花を立てて武器が鎧を削った。

額と額が接触するかしないかの距離。

零度の邂逅。血が水飛沫を上げる。

「おいおいイ。どうした、そんなもんかよ？」
「抜かせ！」

身を屈めて踏み込み、偃月刀を右、左、右、上、正面と自在に衝く。

右手の斧で受ける。その顔には余裕の表情が浮かんでいた。

「大した事ないなア関雲長！」

右手の斧で偃月刀を反らし、左手の斧が煌めいた。

くっ、と漏らし、身を擦って紙一重に躲す。

加速する時の中で、愛紗は徒手空拳を繰り出す。

左手で偃月刀の柄を握り、右手で顎を殴る。

ぐらり、と鬼灯の瞳が揺らいた。

「ぐがあ……はっ——」

間一髪。

偃月刀を握り直す。

そのまま地面に衝きたて、軸にして跳んで後退する。

ざっ、と片手で地を血を擦りつつ着地すると、一拍置いて、迎撃の斧の連戟。

偃月刀で受け、ぐっ、と押し潰されそうになる。

鬼灯がにやり、と笑む。

が。

「——させない」

音もなく針が飛来した。

咄嗟に右手で往なすと、間もなく紫色の旋風が押し寄せてきた。鬼灯の前に立ちはだかる。

入れ替わる様に愛紗が遠ざかって行く。

一騎打ちしかないと言っても言うのか。
舐めやがって、と鬼灯は舌打ちする。

——鬼灯が犬歯を剥いた。

斧が軋轢に震える。苛立ちを隠せない。

「テメエ……裏切り者が。良くぬけぬけとその面見せられたな」

「手を組んだのはより早く軍様と出逢う為。もう貴女達なんて必要無い」

「そう、かいッ！」

尖端が途轍もなく鋭利な針が束ねられている奇奇怪怪な得物。
当たれば只では済まない。

それを何より、かつての同胞たる鬼灯は重々承知していた。

「相変わらずえげつねえなあオイ」

「死んで」

「てめエがな！」

そう勢いよく踏み込む。しかし斧は虚空を斬った。

持ち前の身軽さを生かし、藤は一足で遙か後方まで下がった。

逃がすか、と更に踏み込んだ鬼灯。

次に見えたのは射出され宙を奔る針。
爆発的な臂力を乗せて、針は散弾的に鬼灯の頬を掠めた。
驚異的な動体視力で見切った。

が。

空高くに打ち上げた針の雨。

余裕だ、と呟く。

先程の殴打で、ぐらりと脳が揺れる。

鬼灯の足に刺さった。

「ぐあああつ！」

苦悶の表情を浮かべる。

一本の針を握り、藤が押し寄せた。

「覚悟……」

「ちい……いいい！」

抜こうとしても力が入らない。

血が間欠泉に噴き上げ、血溜まりに冠を作る。

針が抜けないまま、自由が利かないまま。

斧の隙間を縫い掻き潜り、針が迫る。

「御休み」

「く、そがア」

もつ……駄目か、と唇を噛み締める。

瞼を、ぎゅつ、と強く閉じた。何処に風穴が開く？

早くしろよ。

未だかよ。未だ死ねないのかよ。

痛いなあ……足。

こんなことなら

「――済まない」

声？

声が聞こえた。聞き馴染んだ声。

おい…おい。

こつそりと瞼を開ける。

嗚呼、と心が震えた。

申し訳無さそうに囁いた。

気の利いた事は言えないから。

「死に切れなかった、とだけ」

――波才。

「てめえ……漸くかよ」

「だから言った。済まない、と」
「それで済むのかよ？」

庇うように剣を翳し、針を弾いた波才。
死に欠けた茫洋とした瞳は無く、やや蒼褪めながらも瞳には確かな生気を湛えていた。

ち、と舌打ちしたのは藤。

波才は、静かに敵に向き直った。

「久しいな、藤」

「死んでなかったの……」

「地獄より舞い戻ったぞ」

足は確かにあった。

藤は近くに刺さっていた針を引き抜く。

ざ、と音がした。

藤がちら、と見やると愛紗と桃香の姿があった。

頭数は揃った。藤に並ぶ。

鬼灯が、ぐ、と小さく呻いた。

針が乱暴に引き抜かれた。

それは無造作に投げ捨てられ、からんからんと血の上を踊った。

「俺も、まあ地獄から来てやったぜ、波才の旦那」

「良く来た、管亥」

「ははは……懐かしい顔だなア、おい管亥」

——
管亥。

少年は向き直った。顎に手をやって、生意気そうに、値踏みするように桃香を見据えた。

「始めましてだな、俺の名は管亥」

「始めまして管亥さん。劉玄德だよ」

「へえ、あんたが。曹孟徳よりは怖くなさそうだ」

「そうかな？ そうかもしれないね。でも、逃げ帰ってきた分際で、大きな口を叩かないで？」

強かに言葉を交わす。

表面はにこやかに笑っている体だったが、瞳の奥が笑ってない。

桃香はあくまで自然体で、頭に血の上った管亥を冷ややかに見つめる。

「桃香様、彼は私が」

「どうしたの愛紗ちゃん？」

「彼は危険です。恐らく徐公明に匹敵するかと」

すると桃香は薄ら嗤った。

ぞつ、と愛紗の背筋に蛇の舌が這った。

満面の笑顔を浮かべて労いの言葉を浮かべた。

「へえ。うん、頑張つてね」

「御意に」

飄々と振る舞う桃香に菅亥は怪訝そうに眉を顰める。釣れない女だ、と口の中で呟く。

それより一刻も早く背中に蟠る何かを除きたい。

愛紗の偃月刀が目の前にあった。

早いが遅い。俺には見える。

どつ、と圧倒的な力に飛ばされた。

桃香は息を小さく吐いた。
真摯な瞳で、波才を射る。

「……始めまして、波才さん。貴方とずっとお話がしたかった」
「我、と？」

はい。桃香は応えた。

「どうしてこんな終わり方なんですか？」
「理解しかねるな」

波才は喉まで出かかった血反吐を呑みこんだ。

「貴方は英雄だった」

「まさか」

「それは民が証明してくれます。しらばっくれないで下さい」
「ならば、どうと云うのだ？」

血の上を桃香は歩く。
転がる首の上を跨いだ。

波才は動けなかった。

「ここまで堕ちたのは、なんで」

「…」

「大義を見落としたのは、なんで」
「…」

言い終えると、桃香は波才を見上げる形で至近に迫った。
覗きこめたのは無機質な瞳だった。
苦渋が滲んでいる。

「応えられない程度なら」

その程度なら。

「私は、今、貴方を超えられる」

英雄。そんなもの。

黙っていた波才が口を開いた。

「汝に問おう」

「近しい仲間が死に逝った時、」

「その恐怖に、寂寞に、耐えられるか？」

問い掛けた。

是か否か。

桃香は黙って其の先を待った。

「仲間と、敵愾心を抱く只の民を天秤にかけられるか？」

「敢えて言つなら」

「我には出来なかった」

血の滲む黄巾。

外れて、血の池の水面に浮いた。

「我は弱者だ。身体共にもう滅入っている」

「肉体は毒に病み、精神は崩壊寸前」

沈んだ。黄色の布が紅い先に見える。
波紋が立った。

「我を正当と云う心算も道理もない」

「只、これが、黄巾の正しい成れの果てであつたのだろっ」

それだけ、だ。

波才は言つた。

風が戦ぐ。血の池に波紋が立った。

波才は目を瞠る。

『それは、只の甘えではないのですか？』

「それは、ただの甘えでしかないと思う」

『恣意で徒に命を弄んだだけ』

「自分勝手に人を殺しただけ」

桃香の表情は透明だった。

腰から下がっているもう一对の剣が震える。

切っ先を向ける靖王伝家。

血が纏わりつく。

朱色に、ぬるり、と艶を持って光る。

『堕ちた英雄よ』

「堕ちた英雄よ」

『高きを見上げられぬその眼差しに』

「高きを見上げられぬその眼差しに」

『我が』

「我が」

『姿を』

「姿を」

『「刻みつけよ」』

風がごう、と鳴った。

血が、沸騰する程に揺れている。

胎動。樹の根が、荒地から伸びた。

それ等は絡まり合い、一つの大木を形作った。

血が吸い取られ。

幹で溢れて。

馨り彩った。

楓。

遥かなる時の枷。

―― 反逆の英雄に嵌められる。

―― 断罪の葉。

―― その男の髪の色。

―― 白銀を鏤めた深紅の色。

第十七葉……………近付く足音・下（後書き）

やったよ妙ちゃん駄文だよ！

詰め込み過ぎ……………？

いや、頑張ってたかっこよく読んで下さい）。D・（b

第十八葉……蒼へ溶け込む黄色の空（前書き）

短いですが。

第十八葉…………蒼へ溶け込む黄色の空

洛陽へと通ずる道程。

歩き続けた遙かなる道程。

この長きの終わりももう見えた。洛陽の城門が見える。振り返る事は無い。三人の人影が夕暮れに伸びている。かつ、かつ、かつ。規則的に響いていた足音が止まった。

波才と寄り添うように歩んできた鬼灯は、慄然と呟く。

「…………なあ波才の兄貴」

「何用か、鬼灯」

波才は静かに鬼灯へ目をやる。

夕暮れを背景にして、鬼灯の表情は見えない。

「これで良かったのか」

「…………」

互いにもう、頭に巻かれていた黄色の布は無い。

無精髭も剃って、髪も整えた。

以前の様な陰惨な鬱々とした表情は無くなっていた。

「…………いや、兄貴が断ち切るつつたんだ。俺は信じてるぜ」

そう言った言葉も力無く、何処となく自己暗示に聞こえた。

波才は、前だけを見据えていた。

頭の中では、全てが終わったあの日の事が、鮮明に反芻されていた。

「もう過去だけは見ない」

ふ、と息を吐いて応える。

「あの少女に言われた、今を見ると」

「…………」

今度は鬼灯が無言になる。

「故に、今しか見んよ」

そう応えると、鬼灯は、応、と笑んだ。

顔色は見えなかったが、どうやら朱が差しているのは夕日のせいだ、と波才は思った。

（最近よく笑う）

桃香率いる義勇軍に敗れ、軍と出逢ってから幾月が経ったか。鬼灯は、無垢に、快活に笑むようになった。何故かは詳しくは聞いていない。聞くのは無粋だ、と波才は納得していた。その笑顔は何にも代え難く得難いモノであつたが故。

「……そうか」

夕暮れの風は些か冷たい。

砒霜の毒は抜けきつてないので、余り身体を冷やすわけにいかない。不満そうな管亥を尻目に、鬼灯の抱擁が管亥を包む。鬼灯から粗暴そうな表情は抜けて、慈愛を以って。

軍から華陀という五斗米道の者を尋ねるよう言われている。彼は名医で、忽ち病も治ってしまうだろう、と。

「漸く、一步が踏み出せる、な……」

「そうだな」

「ああ、そうだなあ……」

長い道程だった。

本当に、本当に。

——黄天の空は沈んだのだろう。

しかし。

零から、始めるのも悪くない、と、

波才は空へと手を伸ばす。

いや、正確には零では無い。

鬼灯が居る、管亥が居る、充分だ。

これからは蒼天の世。

未だ死んではない。死んでいないから、こうしてられる。

死んではないから、次の戦乱へと。

生きて再び、時代に一石を投じよう。

——その為の新しい主君。

「はてさて
曹孟徳は、洛陽の何処に居るのだろうか。」

第十八葉……蒼へ溶け込む黄色の空（後書き）

彼らも未だ退場はしないのです。

第十九葉……………再会と涙の染み

桃の花が香る。とろり、と蜜を垂らしたような淡い灯りが部屋を照らして、少女を甘く彩った。

普段は静かで無骨な狭い部屋も、夜の外套に包まれて淫靡な雰囲気になっっている。

とろん、とした、瞼。長い睫毛が微かに震え、艶かしい舌が唇を這う。

軍に触れられた髪が、手が、身体が、舐めたくなるほどいとおしい。胸の苦しさも忘れて、自分の身体を抱く。

彼が来る。その事に、桃香の気分は高揚していた。

「やっと、だね……………」

呟く声は夜に紛れて霧散した。

桃香は反芻する、幽かな記憶の糸を手繰り寄せて。

彼の真名は蚩尤。真名は受け取ってくれたけど。

桃香達の要望に、彼はやんわりと苦笑して応えた。

王にはなりません、と。只、私は貴女の御側に。

笑む朱色の兵神。

その瞳の奥の感情は読めない。

ましてや、恋慕を映す少女達の期待する様な答が得られる訳がない。

その真意を確かめたかった。

白銀の鏡に遮られた思いを。

「蚩尤さん……………」

心地良く身体が温かい。

呷った酒の盃は空だ。

はう、と物憂げな嘆息が漏れた。

ああ、遅い。

時間を刻むのは気分だけ。遅く感じる。この一瞬も、無限の様に。

もしかして忘れられ――

「――桃香？」

「はうん！？」

肩に手がおかれた。

慌てて振り返ると、困り顔の軍が居た。

桃香は目を丸くする。

「ど、どうして！」

「ああ、いえ……。声をいくら掛けても返事が無かったので……」

歯切れの悪い軍。桃香は怪訝そうに眉を寄せた。

眼鏡を抑え、咳払いする軍。

桃香は気付いた。薄手の寝着。

自分の開かれた胸元。淡く照らされる薄桃色の唇。覗くふともも。瑞々しい、均整のとれた肢体は柔らかそうだ。

ああ、と。

気分が落ち着いて。

悪戯をしたくなった。にたり、と意地悪そうに口元を歪む。

「ああ。いけないんだ軍さん。いやらしいんだあ」

幾分か大人びて成熟した色香を放つ桃香の汗ばむ肌。

軍と云えど男である事に変わりは無かった。

寧ろ英雄色を好む。李に操を立てるということもあって禁欲的な生活を経た軍にとつて、李の血を継いだ少女と、という背徳感と蹂躪したいと思う気持ちもあって、堪らなかつた。

そつと寝台に押したおす。白銀の眼鏡をとつて、白銀の瞳が桃香を映した。

（李……）

褐色肌に濃い桃色の髪、桃香よりも成熟して豊満な身体。片目を隠す様に伸びた艶やかな髪。ぷっくりとした唇。触れたい。でも触れられない。

彼女の血を色濃く受けた桃香の身体。充分、魅力的だった。

躊躇いませんよ、と茶化す様に口元を緩ませた。

「桃香、良いのですか？」

「何？」

「私は、人間ではないのですよ」

「今更だよ。私は、『軍さん』が大好きなんだから」

弱弱しく微笑む。背中の手を回す。

ぎゅっ、と抱きしめながら、桃香は羞恥で真っ赤だった。人間じゃなくなつて構わない。人間に拘る理由なんてない。

（あうう……）

触れたかった。ずっと。

こんな至近距離で。胸の鼓動も、息遣いも、感じれるなんて。幸せ。

（そうだ）

「ど、どうして、仕えてくれるんですか？ もっと、活躍できるような勢力もありますのに」

桃香だから、とか、愚問ですね、とか、そう言う答が欲しかった。

だけど。

その答えは、桃香の心に、隙間風を生んだ。
ずき、と胸の奥が強く痛む。

「――私は、劉へと傳く者であるが故に」

劉。

（そんな……）

「貴女は劉備玄德。私の、仕えべき主です」

――劉の血に枷を嵌められた。

その表情は、意味深に微笑んで。

心の立ち入りを阻むような、
どこか距離のある、

拒絶、されてる、ような、

「そ、うだね……」

——夜の暗がり。

固まった桃香の身体。

暗黒は桃香の表情を隠した。

ぎし、と寝台が軋んだ。

扉がぎい、と開いて。

隙間風がさし込んだ。

桃香は身体を掻き抱く。

寒い。寒い。

去り行く背中へ手を伸ばす。

お願い、行かないで。

独りにしないで。

温めて。寒い。

劉じゃない、桃香を温めて。

血なんかじゃない。

私を望んで。

お願い。お願いします。

『桃香』を求めて、よ………

第二十葉……………再開と戸惑い

愛紗は、呼ばれた気がした。
足が動く。

季節は夏。

新緑の葉が眩しい。木漏れ日も心地良いが、日陰は格別の涼しさがある。

湿っぽくはあるが、鬱陶しい程ではない。
澄み渡る蒼穹を両手を伸ばして仰ぐ。

「……………軍様」

草原の中に静かに聳え立つ樹。
その巨木に腰かけ、優雅に手を拱く姿があった。

愛紗は駆けた。再会してから、二人きりでゆつくりと過ごせる時間
間は初めてだ。

「此処は良いですよ。涼しい」
「そうですね…心地いいです」

隣にちよこん、と座る。

規則正しい自分の鼓動が聞こえる。軍の息遣いを聞く。

緑の香りがする。平和を感じた。

言葉が浮かんでこなくて、口から出たのは社交辞令。

「い、今まで如何なさっていたのですか？」
「今まで、ですか？」

軍は思案顔になる。その様も絵になる。
物静かで、爽やかで、飄々としてて。底知れなさこそあるものの、
それすらも魅力。

義真の胡散臭さとは対照的な印象であった。

愛紗は暫し見惚れていたが、優しく頭を撫でる手に我に返った。

「色々な勢力を見てきましたね」
「勢力を？」

余り血生臭い話はしなくなかったが、それも自分達義勇軍の為なのだな、と返って興味が惹かれた。
でも、と軍は続ける。

「やっぱり此処が一番、居心地が良い」

微笑みかける。愛紗の心の臓が、一つ、撥ねた。
その黒髪を、風が、優しく撫でる。

「わ、私達のどんなところが！ いい、一番良かったのですか？」
「愛紗も、桃香も、とても愛らしいですから」

愛紗の身体がぐい、と引つ張られた。
そのまま膝の上へのせられる。嬉しがる以上に驚いた。
朱髪が頬に触れる。くすぐったいけど、良い匂いがした。

これが欲しかった人の……匂い。

恥じらう愛紗。頬に朱が差す。

軍は、少し神妙な顔つきになって。

「余り二人きりの時に言う話でもないんですけどね」

そう前置きして、

「少し、都の方で問題が発生してましてね。身の置き方を考えなくてはならないな、と思ったのですよ」

再び愛紗は我に返る。残ったのは自己嫌悪。切実に軍は心配してくれているのに、浮かれている自分が憎らしい。

「どんな……事件ですか？」

平静を装って尋ねる。

軍は言って良いものかどうか迷った。

まあいいか、と一人ごちて後話し出す。

「洛陽で宦官と対立していた何進大將軍が、上洛の檄文を発し、大虐殺を経て、失踪してしまったのです」

「！」

「重い話ですけどね——問題はそこじゃないんですよ」

軍はふう、と空を仰ぐ。

どこまでも青い空は洛陽へと通じているのだろう。

「その、大將軍の檄文にいち早く賛同した者が居たのです」

愛紗は黙って聞いている。

これからの情勢は自分らの命運を左右する故。

「董卓ですよ」

人差し指を愛紗の眼前に立てる。
それをじいと思つめる愛紗に微笑みかけた。

「少帝弁を廃して、献帝協を立てて朝廷を恣にする。『董卓』は暴政を極めているのです。……とまあ、袁紹の見解ですけどね」

肩を竦める。

「と言うのも、私は余り深くまで踏み込めなかったからなのですが」
曖昧にはぐらかしてみた。

軍は自分の意志を告げるつもりは無かった。
無理に混乱させるよりも、普通の知識だけで良い。
艶やかな黒い髪を撫でながら、軍は目を細めた。

『反董卓連合』が出来るのも時間の問題でしょう、と軍は云う。

さあ、と風が草木を揺らした。愛紗は髪を掻き上げて黙す。

黄巾の熱も冷めないままこれか、と嘆息してしまう。

「そう難しい顔しないで下さい。どうにかしますよ。私が」

立ち上がって一つ伸びをして、軍が手を差し伸べる。
微笑みは温かだ。

その手を握り返す。

この手を握っていれば、大丈夫な気がして。

――軍は静かに愛紗を見据える。

「さて――――愛紗、立会いましょうか」

同じように立ち上がって伸びをする愛紗に、刃を毀した偃月刀が投げ渡される。

咄嗟に掴みとって軍を見ると、腰を据え、構えて立っているのが見えた。

それに応える。

武器の刃が陽を反射して煌めく。

視線が交錯して――

キン、と甲高い音が舞った。

「霸ッ！」

どちらともなく踏み込み、鎬を削る。

火花が舞って、再び軍が切り込む。

寸での処で躲す。

服の布がすつ、と切れて肌が覗く。

恥じらう間もなく、軍の戟が愛紗の頬を掠めた。

「実力を、本気を見せて下さ――」

身体を宙で捻る。

い、と動く前に、軍の頬に、つつ、と血が滴る。

「油断大敵ですね、軍様！」

愛紗の口元に笑みが生まれた。

獰猛な物ではなく、単純に愉悦に歪んだ。

「……ええ、その通りです！」

軍もまた嗤った。

朱色の髪が翻り、刹那の時で偃月刀を繰り出す。

いくら刃を毀してあると云えど、当れば只では済まない。

また宙で身体を捻る。愛紗の服の袖が持つてかれた。

偃月刀に力を込めて、返す刀で振り下ろす。

（やった！）

当たったと思って心の中で歓声を上げた。

彼の得物は偃月刀ではない。しかし、兵神を出し抜いた、と思う
思いは強かった。

が。

「ふむ。まあ、及第点でしょうかね」

轟、と風が唸る。それが振り下ろす刃の速度を緩ませた。

気づけば軍は刀下には居なかった。

ひとひらの楓の葉が踊って、愛紗の目が奪われる。
集中が切れた。

ふわり、と地に足が付いた。

そこで、こつん、と首元に偃月刀が突き付けられたのを感じた。

つつ、と汗が伝うも、恐る恐る振り返る。

息一つ切らしていない軍の笑みが、愛紗の視界に入った。

（無理だったか）

あと数瞬早く振り下ろしていれば、とか思う愛紗。

（もう遅い、か……）

潔く偃月刀を投げ捨てる。すると偃月刀が二本地に当たって、小気味良い音が鳴った。

まだ跪いたままの愛紗に、軍は静かに言った。

「——愛紗、忠誠を、期待しています」

俯く愛紗の目が、大きく見開かれた。

風が戦ぐ。

はい、と動いた口。

ちょっとした胸の痛みと、違和感が口の中に残った。

秋の足音は未だ遠く。

新緑の葉が一枚。

風に煽られて。

舞うように、悲しむように、空に吸い込まれた。

第二十葉……………再開と戸惑い（後書き）

11月23日……………若干軌道修正

第二十一葉……………始まりを告げる朝

かつて愛紗の朝の日課と言えば素振りだった。

朝の麗らかな日差しを浴び、新鮮な空気を吸い込み、目を覚ます。肉体が目覚めても中々に精神が目覚めない時は、矢張り素振りや自己鍛練が効果的だった。

長い間続いていた習慣。

しかしそれもまた、変化があった。軍の性である。

朝、眼鏡を掛けていない軍（兵神と云えど睡眠は不可欠）を見るのも新鮮だったし、また再びの立会いを依頼するのも有意義と考えている。偃月刀での立会いはあれ以来無いが、彼の本領である二刀と鉄扇で立会えうことができた。愛紗は見事に翻弄され地に這いつくばったが、愛紗は笑顔を浮かべていた。

偃月刀が朝露を帯びて、眩しく光っていたのが目に焼き付いている。

朝の風を浴びた愛紗の声に、軍の声が重なる

——— 珍しく今日の愛紗の朝は遅い。

昨晩は書簡に追われて多忙であった故だった。

が、今日の行先は庭では無かった。

戸を軽く叩いて入る部屋には『会議室』の札が掛っている。

朝議。

扉の向こうには、不本意ながら女性の比率の高い空間があった。

桃香。鈴々。星。白蓮。藤。雪柳。

そして、軍。と、軍の隣に待てる見知らぬ

れた枇杷とか言う

——— 誰か。女だ。

——— 以前紹介さ

その総員が桃香と白蓮を玉座に据えて座っている。

控えの衛兵に、全員に、軽く会釈して、愛紗も座る。

未だ刻限には余裕があつたはずだが――、と不思議がる愛紗は知らない事があつた。

重苦しい表情の白蓮を見やる。

何かを見ているようだが、遠くて見えない。

どうしたものか、と居振る舞いを正す彼女の耳に、こつそりと比較的低い声が届いた。

「予想通りでしたよ」

ゆつくりと首を軍の方へと向けると、苦笑しているのか微笑しているのか判断に困る笑みを浮かべていた。ああ、と納得する。また白蓮を一瞥し、苦労性は大変だな、と心の中で呟く。

つまり、あれと見て間違いないのだろう。軍の予想通りなのなら。

「――全員、こつちを見てくれ」

白蓮が頭を抱えたそうな表情を浮かべつつ、古めかしい紙の束を机の中心に置いた。

どさり、と重々しい音。

墨がぼけて霞んでいる点もある様だ。

しかし、概ね内容の理解が出来た。案の定である。

――董卓の横暴。洛陽の危機。早急な対策の必要性。

『反董卓連合』。

おおまかにそれだけの内容だ。

なのにこれだけの紙の量。書かされた文官は過労になるだろう。

尾ひれ背びれ所か羽まで生えて飛んでいきそうな文書に、白蓮は頭を抱えていた。

差出人は冀州の袁本初。

どうやら、白蓮の古馴染であるらしい。

行商人の間で洛陽の評判は悪くない。寧ろ良い筈だ。白蓮は引つ掛かるものを感じていた。

「軍。ひれを五割程度差っ引いたとして、これにどれだけの信憑性があるんだ？」

全員の視線が軍に集中した。

ふむ、と呟いて軍は思案顔で瞼を閉じる。

見惚れていたいのには山々であるが、これは迅速を要する。

先を急ぎたい白蓮に、軍は静かに口を開いた。

「恐らく、十割程度嘘ですね」

「！」

全員の大きく目が瞪られる。

白蓮がうんざりしたように背凭れに深く腰を据え、嘆息した。

「なんだ嘘か。また麗羽の奴が突拍子もないことをおっ始めたと思つたらこれか」

安心したような呆れたような。白蓮はまた溜め息をついた。

しかし、と軍は続ける。

細められたその目は冷酷で切実で、何より先を見据えている。喉まで出かかった反対の意見を、白蓮は呑み込んだ。

「この招聘には、応じようと私は考えています」

有無を言わさない、と言う表現は正しくはない。軍はあくまで淡々と自分の意見を並べているだけなのだから。

「これからの時代、最早漢王朝は形骸どころが過去の遺物となるでしょう」

つまり、群雄割拠の戦乱。

そう語る軍の目にふと何かの残滓のような未練のような色が浮かんだが、それを推し測る術を、桃香も愛紗も持ち合わせていない。

軍の桃香に仕える、という言葉は真摯だ。過去を過去と割り切る。言葉にするのだけならどれだけ容易いことか。

今の、劉の血を継ぐ桃香の、超えべき壁に、情けも躊躇もしない。只利用するだけだ。

其処に善悪の価値はない。あるのは勝利が衰退もしくは埋没か。群雄割拠に向けて、やるべき事は弁えねばならない。

言外に伝わる意思に、白蓮は押し黙った。腑に落ちない、と顔に如実に出ている。

「……解ったよ。任せるさ、軍」

「忝ない。納得して戴けたようでは何よりです」

軍は一息付いて湯呑みを傾ける。

その様を茫洋と眺めていた桃香は、軍の目指す未来が自分の理想と噛み合っているか、あの夜からずっとはかりかねていた。夢想家ではいられない。相手がいくら軍と言えど、時には押しも懷疑も必要なときはあるのだ。しかし——件の事項については、軍は多くを知っている筈だ。兵法に精通している軍が、只の勢いで判断する訳がない。

だから、此处は軍に賛同しておいた方が吉だろう。むやみやたらと軍が死人を出すとは思えない。それは大軍を相手にする董卓側にも言えるし、《人中》と謳われる呂布や、名高い張遼や高順等を敵に回す連合側にも言える。

軍には何らかの策があるのだろう、と桃香は結論付けた。

席に腰を下ろし、瞼を閉じる。軍に決定権は無かったが、異議を唱えられる雰囲気ではなかった。

惚れた弱みと言うよりは軍に対する劣等感の現れと言えた。

腕を組み思いに耽る。

軍は頭上を駆け抜けていく言葉を耳に留めようとせずにも目を瞑る。

かりかりかり……

枇杷の筆が紙の上を走らせる乾いた音だけが頭に残っている——

第二十二葉……………洛陽の嘶（前書き）

時は少しばかり遡ります。

第二十二葉……………洛陽の嘶

賑わいが洛陽の街に飪する。失踪や虐殺の不穏な中央から離れた町並みは、どこも活気に満ち溢れているようだ。鉄の臭いからは遠く、甲高い鋼の音は聞こえない。

その一角、質素気味な、清潔そうな茶屋。

軍は、無駄に陽気な酒呑みに絡まれていた。原因は覚えていない。ただ小腹に少し、と入った店先で、銀色眼が物珍しいと云うことが直接的な原因だったような気がする。

軍の向かいに居る少女の。

艶やかな桜色の唇が盃の水面に触れる。思わずさわりたくなるような。

軍から、呆れたような、感心したような、妙な独り言が漏れた。

「昼から……随分吞みますね」

「あつたり前や！うちを誰やと思ってんねん！こんなん吞んだうちにも入らんわ！」

知りませんよ初対面なんだから、と軍は嘯く。あはは、と豪快に笑いながら叩く手は痛い。細身の軍は前揺れする。気さくと言うよりは豪快。それでも、失いたくないと思わせる儚さは持ち合わせて中々に不思議に絶妙な少女だ。軍は興味を惹かれた。

ちら、と片目で容姿を見やった。

張遼、張文遠。通り名は張来々。

印象的に長い裾の藍色の袴。しかし横の切れ込みからは白い何かが覗く。サラシも女性的な豊かさを隠しきれておらず、丸みを帯び

て柔らかさそうである。藤よりも濃い紫色の髪は団子に結われて、覗くうなじは白く絹のようだ。

人懐っこい猫のようで、半袖の軍の腕の傷を柔らかくしなやかな指で撫でる。軍の視線に気付くと、にやあ、と口元を緩めて軍の団子の詰まった頬をむにむにと指でつつく。

すけべえやなあ。にたりと笑う張遼に、軍は咳払いで返した。

「自分、おもしろいなあ。それに強そうやし。どうや、一辺手合わせしてくれんか」

朗らかに盃を置き、脇に置かれた堰月刀に手を触れた。目が瞬きだけ、す、と抜き身の刀のように細められた。その途端に忽ち、軍の湯飲みの茶の表面が小刻みに軋むように振動し始めたのが解った。

再び痴女紛いに目を戻す。

嬉々とした豪気が垂れ流すかのように放たれている。他の客に殺意を悟られない程度に調整する、中々の腕前。軍は、見事、ほうと呟いた。

「……いえ。私ごときでは、相手にもなりませんよ、張將軍」

やんわりとした拒否。思わず右手が懷の鉄扇に触れてしまった事に軍は自分で気づいていない。張遼の目は速い。見逃すことはない。嘘や、と呟く声は賑わいの中で霧散した。滲み出る覇者の風格に、張遼は出会ったときから圧倒されていたのに。強者にしか解らないような、怖気のするような、血塗れの。

拒絶の瞳を前から見据え、頬を膨らませて、けちい、と不満げに漏らす。大げさに振る舞うのは、動揺を悟られなかった。

顔を近づけて、上目遣いに軍を見上げる。大抵の男はこれに抗えない。

鼻を燻る香りは耽美。熟れた柑橘の甘さ。

豊満な胸が腕と腕に挟まれて、むにい、と柔らかく前に押し出された。

「ま、ええわ。ちよいと面貸しいや」

「はい？」

「面貸せ、言ったんや。黙って付いてきい」

余り軍に動じた様子はなく。張遼は不思議がると共に諦めた。むく、と起きあがって張遼は出口に足を向ける。

「！」

仕方ない、と立ち上がりかけた軍がその形で固まった。奇妙な体勢で静止した軍に、張遼は柳眉を顰めた。

「なんや、うちに着いてくるの厭か？」

「い、いえ……そう言う訳ではないのですが……」

齒切れの悪い軍。

煮え切らない彼に、張遼は半ばふざけて、

「おやおやあ？ 恥ずくて言えんことやったら、耳元で、な？」

軍の口元へ耳元を近付ける。

脂汗が垂れている軍の、鬼気迫る形相に次第に減っていく笑み。

「んな……どうしたん……そんなごつつ怖い顔して」

「……こ……っ……」

「こつつ？」

何百年振りだろうか。

恥ずかしさと辛さに顔を朱に染めて、

「腰が……攣った……」

間を置いて。

あははははは、と腹を抱えて転げ回る張遼を、後でどうしてやる
うか、と考え始めた。

「これは……本当にやめてくれ………！」

「ええやんええやん」 うちと軍の仲や。 あっはっは、遠慮せえへ
んといてえ」

「かつて無い辱めを私は受けている………」

「恥ずいんか？ おっ、さっきのがきんちよが見とるで。 軍、手え
振ったりいや」

「おぶられたまま出来ますかッ………！！」

「あっ、おっ。 軍暴れるなや。 落ちる、落ちるでっ………！！」

「！」

「あっ————」

第二十二葉……………洛陽の嘶・続

ぼつかりと空いた城の玉座は、長い間使われていないようで、埃と冷気を帯びている。

王は不要、と言わんばかりだ。董卓は統治者であれど支配者ではないらしい。

張遼に案内されるがままに手を引かれて来た（引き摺られた）軍は、暫くその空虚な空間を眺めていた。

別の扉から帰ってきた張遼は、ばつが悪そうに頬を掻いた。

「わざわざ来て貰ったんに。どうやら居らへんようやわ」

「構いませんよ。寧ろ今のご時世に玉座でのうのと座っているようなら私が斬り殺してたでしょうから、ある意味丁度良い」

「お、おおきに」

目の据わった軍の冷たさに、張遼は背筋に何かを感じた。
今まで飄々と剽軽な素振りを見せていたのに。

玉座に思い入れでもあるのだろうか。幽かな追憶を手繰り寄せる軍の横顔に、張遼の視線は見上げる形で注がれた。

（……………でもええ男やな）

どきん、と大きく心臓が跳ねる。

男なのにきめ細かく白い肌、線の細い輪郭、無機的に輝く銀の瞳、火の粉を放つような朱色の髪。

しなやかにのびる両刃の剣。殺人の煌めきは、無比の美しさを感じさせる。

程良い酔いが吹き飛んだ。素面に朱が差す。
酒の性ではない。

先程まで酒が入っていたとは言え、身体を密着させていたのだ……から。

思い出した。

そう、たった服二枚を隔てただけで、殆ど身体と身体が触れあつ

て――

「張遼殿？」

（やばいやん、肌重ねたんや。うちの純潔……）
あわわ、と猫のように口元を緩ませる。

「……霞や」

「え？」

「受け取りい。つか受け取らんと許さへんよ、うちの真名」
「……え？」

強引に詰め寄る、顔を真っ赤にして鬼気迫る張遼――霞。

しかし、軍の視線は霞へ向かつてはいなかった。

奥の奥……、玉座の後。

それを追うようにして動いた霞の視線が、親の仇を見るかのように睨みつけた。

赤色の鬼の仮面を被った白髪の男が、静かに口を開く。
申し訳なさそうな声色が滲んでいる。

「すまんね野暮で。……………いつ気付くかと思っておったんじゃがね」
「貴方は……………何者です」

赤鬼は、は、と溜息を漏らした。

「なんじゃ、もう耄碌したか軍……………否、こつ言つた方が良いかな
《蛮神》蚩尤」

「……………何者だ」

「同胞の顔すら覚えとらんのかね……………『儂』は寂しいよ、軍」

軍の眉が、ぴくり、と動く。

赤鬼の仮面が楽しそうに揺れた。笑っているのか。

「……………まさか貴方は」

軍の手も震えている。

「儂はこつして再会できて嬉しいよ。これで涙も帳消しじやな」
「……………」

軍の口が、懐かしい名前を呟くように動く。

白銀の目が、湿っているようにも、潤むようにも見えた。

「冥府より手紙を届けに参つた次第じゃよ、羌楓軍。」

「蕭何……………」

「……………姫様からおことへ」

ふわり、と手紙が蕭何の手から舞った。
軍の手に渡る。

軍の手に渡った古めかしい羊皮紙の上で、流暢で、震えた字体が踊っている。

遙か昔の渴くことの無かった想いが、羊皮紙の上で染みとなっていて乾かずにそのまま。

『我が最愛の幽樹へ』

「……っあ」

綴られる言の葉。

渴いた頬に一筋、感情の結露が伝った。
羊皮紙に、新しい染みが広がった。

幾百年の時の白銀の雫。

苦しみが白銀の瞳からすべりおちていく。

『すまない』

——雨が降り始めた。

『そして、ありがとう』

蟠りをほぐしとかすような。

温かい。

温かくて、優しい雨だった。

『……………さよなら』

——軍の眼鏡が、からんと音を立てて落ちた。

滂沱の雫が、止め処無く流るる。

『幽樹だけの幽華より——』

第二十三葉……………瞳を幕を開く（前書き）

繋ぎの回。

洛陽を超えた軍の変化は。

少しだけあっさり気味の不思議な文になったお。

第二十三葉……………瞳を幕を開く

——瞳の奥に涙を隠す。静かに軍は目を開く。

洛陽で出会った、董卓や賈馱、呂布から陳宮、徐栄や高順。出会って直ぐに心を開いてくれた彼女達。

それも、もう数に圧されてしまうのでしょうか。

愚昧も、狡知も、聡明も、全ての意志が錯綜するこの戦乱に。己が牙を天へと衝きたてる資格を欲す『英雄』が為に。

「大將はこ・の・わ・た・く・し！ 袁本初で異存ありませんわよね！？」

金髪と甲高い声。

聞いているだけで辟易してきそうなの。

他の勢力の方々も、頭を抱えて溜息をつかんばかり。

曹操、袁紹、袁術、袁遺、孫策、王匡、韓馥、劉岱、鮑信、橋瑁、孔由、許湯、焦和、孔融、張楊。

大変な数を集めたものです。

……………まあ、ある意味この手の傲慢さも必要と言えば必要ですがねえ。

「……………すみません、袁本初殿。外の空気を吸いたいのので、主と共に少し席を外しても？」

「えっ……………軍さん？」

さり気なく伸ばされた桃香の手を握る。

あ、と漏らした桃香は手を弱弱しく握り返す。それを引っ張り、私はズズ、と椅子をずらす。

「あら、貴方は……どこのどなたかしら？」

高慢そうな金色の瞳が私に向けられた。

付き添う衛兵の鎧も兜も無駄な金細工に目が痛くなる。

無礼にならない程度には、挨拶しておきましょう、かね。

「幽州の公孫伯珪の食客・劉玄徳の護衛、羌楓軍と申します。以後、お見知りおきを」

「護衛？」

「ええ………それでは、失礼します」

言葉を終わりまで聞かない。

私は瞥見する。全ての勢力の主を。

この戦乱を幕開かす『英雄』達を。

善悪は無い。

この大陸を制さんとする『英雄』共。

誰もの視線が私を射すくめる。

尊大な霸王の瞳も、首輪を食い千切らんとする褐色の獅子も、誰も彼もの。

それを睨み返す。

只、私には、桃香には、劉には、関係無い。
只、桃香の手が温かい。

「先鋒は………！」

嗚呼、やめてくれ。そんな声はもう聞きたくない。

『冠』に縋る哀れな道化よ。

無知は何よりも罪なのだから。
死よりも重く。

愚かな神の二の轍は踏むな。

——ボタン。

第二十三葉……………瞳を幕を開く（後書き）

感想を……………お待ちしております……………

第二十四葉……………悲願の為に

軍議と呼べるかどうか分からない会合も漸く終わった。
袁術の無駄に大きい陣屋の傍にある『孫』の旗の立つ陣屋まで戻
ってきた。

腰の骨が悲鳴を上げている。バキバキ、と鳴らすと、私はふと違和感を覚えた。

風が逆巻いて、私を取り巻く。

「……………風の声が聞こえる」
「いきなり何を言い出すんだ」

呆れ気味の冥琳。
え、いや、だって、さあ。聞こえない？ 風の声。

「さっぱり聞こえないな。……………聞こえるのは『孫』の悲鳴だけだ」
「そうね。でも……………」

私はにやり、と嗤ってみる。
冥琳の大きく見開かれた目。可笑しくなって、少し頬が緩む。

「風は、味方してくれるみたいよ？」
「なんで解る——いや、解るぞ。ずばり、勘、だな？」

ふふ。鬱々とした温い風を一気に吹き飛ばすような清々しい風の
声。

聞こえるわ。今。

「御名答♪」

ざり。

聞き慣れない足音。

軽くて、軽過ぎて、底知れない。

一人の男。

私は、感心したように嘆息する冥琳に、目配せしてみる。

「ほら、ね？」

孫家。私が生きていた時代より太古の戦国時代の名将・孫武と孫
？の末裔の名門。

大黒柱であつた女傑・孫堅殿が病に臥したのを契機に、袁家の財
力に吞まれてしまった哀れな一族。

……まあ、それはお互いさまでしょうけども。

「――御名答。」

ん。遠くで二人の少女が話し込んでいるようです。

片方は、褐色肌に桃色の髪に意志の強そうな瞳の女性。

そしてもう片方が褐色肌に濡鴉色の髪、眼鏡をかけた厳格そうな女性。

…桃香よりも、幽華はこちらに近い肌の色でしたね…。

「――ほら、ね？」

先ほどの陣屋で見た孫堅殿の娘、孫伯符と周公瑾と見て間違いはなさそうです。

「…孫家筆頭・孫伯符殿と軍師・周公瑾殿とお見受けします」

「ええ。如何にも、私が孫家の孫伯符よ」

「同じく周公瑾」

二人の腹を探るような、それでも礼儀を損なわない凜とした眼差し。

孫家の存亡を賭けて、必死なのが窺えます。

風を手繰り寄せる。私の元へと風が集う。

「私は公孫家・義勇軍大将護衛・羌軍と申す者です。以後、お見知りおきを」

「さっきあの陣屋でも聞いたわ。…で、それで？」

「雪蓮…否、孫伯符は、弱小諸侯の孫家にまで何の用だ、と言っている」

「弱小……謙遜も美德ではありませんが、過度の謙遜は卑屈ですよ？」

ふ、と周公瑾が笑んだ。

何を思ったのか、浮かんだのは不敵な笑み。

「御褒詞賜り恐悦至極。噂の『兵神』から戴けて、な」

「噂なんて尾鰭背鰭は付き物です。周公瑾、貴女はそれを鵜呑みにはしてないでしょうに。」

……まあ用件は二つほどです」

話は長くなるかもしれないな、と伶俐な瞳が私を映す。

やもしれませんね、と応えようと、来なさい、と孫伯符が言った。

服の裾を翻し、褐色の獅子は私を呼んだ。

手招きされて、陣屋の中へ足を運ぶ。

二人が長椅子に座り、私も腰を下ろします。

……どうでもいいのですが、二人ともとても脚が長い。

「で、二つって？」

「まず、御存じでしょうが、我々は先鋒を総大将様より仰せ付かったので御座いますが」

そこで区切る。

二人は頷いた。

「そこですね……孫家引いては袁術の御助力を仰ぎたいのですよ」

「ほう？ 袁紹から無茶を言って大量の兵を巻き上げた貴公が、まだ不足と申すか」

「兵は幾ら居ても足りませんのでね」

「解ってるわ。で、どうして私達に持ちかけるのかしら？ 中央で力を持っていた曹操や袁遣のような、より有力な諸侯は沢山居るわ」

その言葉とは裏腹に、試すような、そんな声色が感じられます。卑屈は悪徳ですよ、と私は返して嗤う。

「孫堅は生きている」

「……」

二人の瞳が大きく見開かれたのは隠しようがなかった。虚をつくことができたようで。

これで流れは吞めた。手のひらにある。

名将たる孫堅殿——睡蓮が居れば、彼女を旗印に、再び

各所に散った孫家の武將を隈なく引き戻せる。

やがては大陸をも平らげる事が可能になるであろう勢力へと戻せる事は疑いようも無い。

袁術に露見しないように留意するのも必然と云えます。

「孫家の独立は悲願でしょう？」

「……ええ、そうね。しかし、それがどう援助に繋がるのかしら？」

素直には吞んでくれませんか。

それだけ業も思いも深いのでしょうか。

「袁術の軍勢は大きく、独立の仇。……しかしながら、当の袁術自身は未だ乳呑児に毛の生えたようなものです」

「それで？」

「袁紹よりも総大将に相応しいのは貴女である……等と睨ければ、

彼女も動くでしょう。そうすれば、泗水関戦を名声だけを恣に、被害を少なく越えられる。お互いに、ね？」

孫伯符は損得勘定しているのでしょいか。黙ったまま、私の顔を見据える。

それに怖ずことなく、真っ直ぐに見つめ返す。

そして、漸く口を開いた。

「何故貴方が母様を知っているかは敢えて訊けないけど……袁術の傍には一人ばかり切れ者が居るわ」

「それを、貴公は超えられるか？」

それが条件だ、と言外に言われているようだ。

無論。

「無論。……こう見えて、女性を口説き堕とすのは得手でしてね？」

私はにこり、とらしくないと言われるであろう笑みを浮かべてみる。

「冗談のつもりですがねえ。かまって頂けないと言った甲斐がないのですが…。」

「……」

思案するのか、片手を額へ近付け、腕を組む。

やがて二人は僅かに俯いて、小さく、はつきりと、こく、と頷いた。

「交渉成立ですね」――

――さて。
笑みを消す。

陣屋の布越しに、巨大な影が映る。

私にとっては、此方が本題。

「――先程、ちらと伺えたのですが」

二人の驚く顔。

それだけ私は真剣な顔をしているに違いない。

「一人ばかり、異質な男が居るでしょう、この陣営には」

恐らく、そいつは私の旧友。同胞。……そして、私の嫌いな男。

口をつぐむ二人。

懐かしい氣を感じる。この皮肉めいた、憎らしいほどに膨大で異質な氣。

「――居るんでしょう、樊??」

……お前もまた、時代の潮流に導かれて。

「嗚呼、再び相見えるのもまた下らぬ余興。卿、落ちぶれた『兵神』……他愛も無いことだ」

第二十五葉……………伏龍鳳趨

「変わった来客だね」

雪柳が、同門だと言う少女を、二人ほど連れてきた。

義勇軍と公孫軍の軍議の終了間際、もぞもぞと蠢く袋の中から、雪柳が取り出したのである。

しかし軍は出席せず、野暮用です、と言って枇杷を連れて何処かへ行き、愛紗と鈴々と藤は鍛錬に席を外している。故にこの場には桃香と白蓮と雪柳と星しか居ない。主要な軍が居なかったが、やむを得ない。あとで紹介しよう、と言う事で話がまとまった。

「この金髪が諸葛亮孔明で御座いまして、もう一人の藍色の髪が？
統士元に御座います」

「は、初めまして！　しよかちゅ孔明と申します！」

「……………？統士元れしゅ」

つば広の帽子を目一杯にかぶって、肩を寄せ合う二人。

時折桃香や白蓮と目が合うと、怯えたように縮こまってしまふ。

軍師の投入を希う白蓮にとっては願ったり叶ったりである筈だが、どうにも渋い顔をしている。

首を傾げつつ、雪柳は二人をずい、と前へ押し出した。

「……………少々内気な面も御座いますが、必ずや御期待に沿う活躍をするかと」

「雪柳が言っただから能力面での心配はしてないが……………、实战に出た事はあるのか？　机上の空論では勝てても実戦で出来ずに負けて

全滅、なんて笑えないぞ」

「……それでも白蓮殿よりは優秀かと」

「さりげなく毒吐くね雪柳ちゃん」

「事実であると愚考致しますが」

「否定しろよ。……いいよ解ったよ。否定する要素が無いよ。ふーんだ、どうせあたしなんか頭悪いですよーだ」

「駄々を捏ねる幼児の様に気色悪いですぞ白蓮殿」

「ぱいぱいちゃん、大人気ないよ?」

「桃香まで……味方が居ないとは……」

話が止まらない。

おどおどする二人を余所に、激化していく。

遠い目をして、心の中で、本当に此処で良かったんだろうか、と思う。

そこに、突然、ぽん、と頭に手が載せられた。

「何やら賑やかですね」

見上げると、朱色の髪が目飛び込んだ。

二人は目を見開いて、それを凝視した。

あ、と口を動かした。

「あつ、軍さん」

「おお、良い所にきたな軍。助けてくれ……」

「おや主。これは丁度良いですな」

桃色の髪も赤色の髪も淡い水色の髪も、一気にふわりと軍へと香

らせた。

助けを求める白蓮の瞳に、軍はどうでもよさそうに曖昧に笑った。

「賑やかなのは結構ですが、緊張感は持って下さいね。口煩く言いたくはないですが」

困った様に軍は頬を掻く。

女三人居れば姦しいとはよく言ったもので、軍自体寡黙な為に、想定外の騒々しさに呆れるよりも驚きの方が大きかった。

「……聖上」

「ああ、雪柳。如何しましたか？」

「それ」

それ、と云って視線を動かす。

軍も動かした。

「はうう」

「あうう」

居心地悪そうにする少女達。

手を置いていた事に、軍は今更ながら気付いた。手をどかすのも何だからと思つて、そのままわしゃわしゃした。

「それ扱いなんだね……。雪柳ちゃん推薦の軍師だつてさ」

「ほう。人見知りがちな雪柳に知り合いが居るのが些か驚きが隠せないのですけども」

「こつちが諸葛亮孔明。そつちが？統士元」

「しょ、紹介が大雑把だよ」

「ゆ、雪柳ちゃん……」

「……紹介するの飽きたので御座いまして」

非難気味の視線に、雪柳は氷の彫刻の様な端正な顔立ちを困った様に歪めた。

はは、と星が笑った。

頬が引き攣り、目が据わっている。

「しかし主。その旧知を見る様な眼差しは何ですか？ 場合によつては、審問、なんてことも有り得ますぞ？」

「ばれてましたか？」

「その手の嗅覚は無駄に過敏ですからな」

そうですか、と軍は返して、二人を見下ろした。

「久しいですね。と言っても、貴女方は覚えていないかもしれません」

「あ…御会いできるまで気付きませんでした、貴方は羌楓、さんですよ？」

「司馬先生が、良く、は、話してた……」

「おや。彼女から聞いているんですね？」

彼女、と云う単語に、女性陣の表情に翳が射した。

「そんな怖い目で見ないで下さいよ。……ただ昔、兵法書を紐解くのお手伝いしただけですって」

そう言って、軍は、へううと直ぐに縮こまる眼鏡の小柄な策略の人を懐古した。

人見知り具合と舌つたらずさまで受け継がせたなら、大層頭も回るに違いない。

いじけていた白蓮の頭を撫でつつ、軍は席に腰を下ろした。

「白蓮は有能ではありますが、どうでしょう。到底この子達には及ばないかと」

「……折角忘れてたのに。傷を深くしなくたっていいだろお」

「——白蓮。今夜は、たつぷり可愛がりますから、そう落ち込まない。貴女は、私の大切な人なんですから。自信を持って下さい。期待していますよ」

「軍……。あ、あたし頑張るからな！」

「主……大切なのは白蓮殿だけなのですか？」

「勿論、星ですよ」

突然甘ったるい空気になった先生の師を見て、え、と優秀な軍師二人は固まった。

どう足掻いても、この状況から脱出する方法を見つけれない。

更にいそいそと抱かれに向かう同門の姿にも絶句して、どうしようもない。

無表情な親友が媚びる様にしな垂れかかる姿は、幼い二人を赤面させる程度には扇情的で、酷く滑稽であって、思考を停止させるには十分すぎる。

周囲にまともに会話の通じそうな人も居なくて、立つ瀬を失ってどうしようか、と視線を交わす。

すると、再び陣屋の入り口が捲られた。

少年の様な瞳には似つかない諦念と疲労を含んだ瞳。

「……おおう。誰だよ君達、って僕にはそんなことはどうでもいいんだ」

また変な人が増えた、と半泣きになる二人を尻目に、髪を短く切りそろえたかつての黄天の士——かつて張曼成と名乗っていた——枇杷は、真剣な表情をして、副官としての職務を全うする。

「軍様」

軍も、又、狡猾そうな瞳を鋭く細めて、枇杷を見返す。
もうですか、と呟くと、腰を上げた。

枇杷は、老成した少年のような瞳で、抜き身の刀のように表情を殺した軍を見据える。

「——泗水関の城壁に、『華』、『張』、そして、『呂』の旗が立ち並んだよ」

第二十六葉……………追憶の中

「あはは、本当に出てきちゃった」

立ち並んだ『華』『張』『呂』の牙門旗。
『華』の旗が地上にも見える。

自ら堅固な城塞を捨てて奔るその有様は、正に猪。

酷く滑稽。楽しそうに雪蓮が嗤った。それはもう楽しそうに。

「この程度の挑発に掛かるなんて、流石猪ね」

「あれは……ほう？ 卿の母君に能わずしたいつぞやの娘」

「そうよ。……って變？、居たの」

体軀は軍よりも高く、大袈裟な狩衣を纏う男。

以前は凌操と名乗っていたのだが、軍の出現と共にその名を捨てた。最早その名に意味など無くなった故に。只、孫堅の忠実な家臣としての性格も捨てた為に睡蓮を酷く悲しませた。
彼自身、投げ出された数百年後の世界で、再び、三位の強さを冠された名を使うとは毛ほども思っていないが、

（儘なるものでもあるまい）

それは以前の世界で良く思い知っていた。

「何処かの自殺願望者の介錯を頼まれましたな」

「あら、そう。でもお生憎様ね。貴方のお役目は、無いわ」

剣を抜いて掲げる。

それだけで、幾万の兵が、手と成り、足と成り、刀と成り、盾と成る。

結束は大したものだ。同時に無惨である。それが戦争の全てだと思っている將軍も兵士も。

……無理もない。樊？も、そう思っていたのだから。長い間。

未だ鮮明に思い出せる。西楚の項籍羽に、膝をつくその瞬間。その瞬間迄、そう信じて疑わなかった。

ぐ、と樊？は人知れず拳を握りしめる。

軍と戦う時も感じた、次元の違う、殺意にも似た、あの気迫。鉄の小手を嵌めた腕。振るう。雪蓮の背中の敵を薙ぐ。しかし身体中に張り付いたそれは拭えない。

「無駄」

「やけに積極的じゃない？　　どういう風の吹きまわし？」

呟きが聞こえたらしい。雪蓮は口元を喜悦に歪め、桃色の髪を翻らせた。

無駄口叩く暇などあれば手を動かせ、と皮肉る。

馬の地鳴りと大声が小声を掻き消す。
見やれば、華の旗が揺らめいている。

「覚悟しろ！　孫策！」

「あら。遅かったじゃない」

「ぐ……生意気な口も聞けなくしてやる！」

斧が砂塵を巻き上げ、土気色の煙幕が辺りを包む。

兵士の波が引いた。一騎討ちが始まったのが理由らしい。

あの時代にそんなものは無かった。あったのは一方的な虐殺。同じ土俵に上がることさえ赦されない。

羌楓軍も、項籍羽も。

しかしながら、樊？は第三位の地位を得た。

「息を切らせるのが早過ぎるんじゃないかしら？」

鉄と鉄が熾烈に火花を散らす。甲高い音が、徐々に一方的になっているのが鮮明に解った。

「……抜かせ」

「言うことも短絡的……つまらないわ。猪はもう寝なさい」

鋼の煌めき。無慈悲な瞳が華雄を貫く。

背中に伝う冷たさを噛みしめ、震える唇を不敵に歪めた。

「……寝るのははたしてどちらだろうな孫策！」

「何？」

華雄が遙か後方を指差す。

桃色の髪を茶褐色に汚した砂煙が引いていく。爛々と輝く瞳が大きく見開かれた。

泗水関の城壁に聳える歪な兵器。

投石器。射出された岩石。

「な……」

刹那。眩きは両者に共有された。

雪蓮の視界は黒に染まっていた。影。一人の男の影。

その手からはぼろぼろと砂が溢れ落ちている。

「――無駄」

雪蓮は目を瞠った。

全身に滾る、薄く引き延ばされて全身を包む、龐大な氣。

陽炎の様に立ち上るそれは、自身のそれも、祭のそれをも、遙かに凌駕するようだ。

樊？。

あらゆる城よりも、城塞よりも、その名が意味する『堅さ』は大きい。

主君たる劉邦を項籍羽より護り抜く程の力。

「卿は只前だけを見るがいい」

「本当に、こういう風の吹きまわし？ 私を庇うなんて」

「孫堅に御守を任された、なれば従うのみ。恩を不義で返したりはせん」

絶句する華雄を尻目に、雪蓮は母の忠実な家臣を羨ましく思った。
頼れる男が居ない世界。

その圧倒的な背中に、笑われたくない。恥を掻きたくない。
手を伸ばす。でも引つ込めた。

獅子は辛辣にせせら笑う。刀が妖しく閃く。

「さて……華雄。雌雄を決しようか」

「くそ、何が投石器だ。聞いてないぞこんな化物……！」

畏怖、恐怖。瞳に映す色は、絶望に染まっている。

静かに雪蓮は鼻で笑う。

もうこいつは敵ではない。

相手を見てない者など、只地に這うのみ。

剣閃閃き、戦斧が臂力に圧されて宙を舞った。

ひ、と声を詰まらせる華雄。命乞いをしないでましか。する余裕もないか。

「……捕えなさい」

「くそが……」

「勝つも良いが死んでしまうのではないか？ 卿
何？」

来たぞ、と言外に言う樊？へと向き直る。

見やる先には、『張』と『呂』の旗。

確かにまずいわね、と口の中で呟いた。

「——さつさと捕まりおって、阿呆ちやうか！ 華雄！」

「——逃がさない」

人呼んで張來々。

そして言わずと知れた『人中』呂布。

投石の雨が止む。

押し寄せる二つの怒涛に、前線は圧されている。

ふ、と小さく微笑む。

問題無い。

「残念だったな孫策！ 貴様も道ずれになるぞ！」

「とことん負け犬は五月蠅いわね。早く連れてって」

「はいはい。僕が貰っていくからね孫伯符殿」

「宜しくね」

僕、なんて使うのうちに居たかしら、と振り返るが既に居ない。

「まあいいわ」

それよりも、この行軍に、あの樊？が恐れた、羌楓と名乗る男がどう対応するのかが気になる。

それによって彼の評価が決まる。

「余り無様な負け方はして欲しくないわね」

「卿。早く軍勢を牽き上げたらどうですか？ 我輩ならいざならず、他の兵共があゝの騎馬で生き残れるとは思えませんのでな」

返ってきたのは刺々しい言葉。見下したような物言いが気に入らなかつたのだろうか。

ならば……鬼にも少し可愛い所もあるものだ。

「はいはい。……もう近くな。逃げたのかしら、あの男」

「まさか。我輩が敵わなかつた項籍羽を斃した彼奴が、逃げるとは

「思えぬ」

自身に言い聞かせる様な声色だった事を變？は気づいてないのだからか。

微かな苛立ちは、砂煙に絡まれ茶色に消えた。

「そうかしら」

喧々囂々と断末魔と関が渦巻く戦場。

戦は、未だ始まったばかり。

（手を伸ばす。のに届かない）

「華雄！」

あかん。掴まってもうてるわ。

手を伸ばしても間に合わへんか……？

投石を素手で壊すなんて、あんな巨漢の化けモン聞いたことあらへんわ。

とりあえず旗色が不味い。華雄の尻拭いは予想通りやったけど、流石にまずいんちゃうか……？

「恋！」

「……何」

いつも通りの恋の表情に安心させられるわ。
気を引き締めんと。何が来るかわからへん。

「このまま行くで！ 華雄連れ戻せんやったら、うちらも危ないわ！」

「……了解」

おお。一気に速度上げたなあ。
うちは馬にかけて負ける訳にはいかん。

「間に合え！」

手を伸ばす。

未だ。未だ。

このまま――

――残酷な影が、包んだ。
――脳裏を、楓が、掠めた。

「何を急いでるのです、張來々？」

朱色の髪。銀色の瞳。

不気味な笑み。

殺人の煌めきが、両刃の剣から。

「自分、何してるんや……？」

第二十七葉……………後悔と未来の狭間の中で（前書き）

メリークリスマス。

来ないで欲しかった筈のこの日。

サンタさんも来ないし彼女も来ないしそもそも居ないし。

でも、さりげなく食べたケーキと飲んだ紅茶が心に染みました。
なんとなく平和な気分です。

今最高に教会に行きたいような。

……………みなさん、メリークリスマス。

第二十七葉……………後悔と未来の狭間の中で

「自分、何してるんや…………？」

一瞬、霞は自分の目を疑った。

馬の頭の上に立ち、両刃の刀を己の首へ向ける知己。
冷酷な笑みを浮かべるそれに、思考が拳動を遅らせた。

「何してるのか解ってるんかボケエ！」

頭に血が上った。瞬く間に殺意がせり上がって来る。
止め処無い憤怒が霞の中で渦巻く。

「何故私は責められてるのでしょうかね、霞？」

「アンタにもうその名を呼ばれたくもないわ裏切りモンが！」

偃月刀ではなく平手が飛ぶ。

叩こうとしたその手が軍に握って止められて、何よりも痛かった。

「はて。裏切り、とは妙な事を仰いますね」

「なんやて…………？」

「私は貴女に与するとも、董卓に与するとも、一言も言っただんか
いませんがねえ？」

見下すような、残酷な視線。

狂気に満ちた、嗜虐の眼差し。

「嘘やっただんか！ 洛陽の町も、月のことも！」

「何一つ嘘は申し上げていませんか？」

「~~~~ッ！ ホンマ、裏切りモンやわッ……！」

彼の笑顔に裏切りられて。

憧れが、踏み躪られて。

「良いヤツやと思ったウチが阿呆やったわ」
「そうですか」

淡々とした声色が、心を冷たく引き裂いた。
凍える爪で。牙で。

その双眸が、何よりも冷たい。

「霞……。矢張り、貴女は邪魔です」
「！」

「だから死んで下さいませんか？」

霞の手には未だ温もりが残っていた。
洛陽で、茶屋で、背負って、笑いあって、交わした手と手の温かさ。

それが決壊して、塗り潰されて、罅割れていく。
だから。

つつ、と頬に雫が伝う。

感情の結露となって、滑り落ちていく。

不意に、霞は慌てて拭う。

しかし流れ続けるそれは止められなくて。

「なん、でや……」

言い返すことも出来ない。

じっと見つめる彼の瞳の奥を。

涙で霞む瞳で見つめて、冷たくて、悲しくて、苦しい。

切に、願う。

嘘であつて欲しいと。

笑つて抱きしめて欲しいと。

震える睫毛と唇。涙に溺れる言の葉。

「そん、な……」

せめて。

出会つた事さえも嘘にして。

笑い合つた事さえも無しにて。

「嘘や、つて……」

それが出来るなら。

——首元に奔つた衝撃。鈍い音がして涙が溢れた。

意識さえも、

手放すから——……

罪悪感が無い、と言えは嘘になるかもしれません。

涙が地に沁み、意識さえ私に捧げた彼女の身体を受け止める。
とは言え痛む心も遙か昔に忘れて来た。

「……今、良い？」

「枇杷」

「撤退の命令を出したよ。膠着状態の中で袁家の間者が二回ほど状況報告に行ったから、袁本初はまさか撤退するとは思ってもいない

みたいだし、それに借りた兵隊も違和感は気付いてないみたいだ」
「良くやってくれました。結果は未だですが、過程は賞讃に値します」

「言われた事をその通りに遂行しただけさ」

本当に良く働いてくれる。曹操の焼いた本陣で見つけた時は、おやと思いましたか。

砂場で光る珠を見つけた童子のような気分ですねえ。

ある程度治療はしましたが、包帯に隠れた顔の半分は焼け爛れ、左腕は義手。無残な達磨のようで生きる気力もなさそうでしたが、ここまで再生してくれるとは。

「……呂布に充てた桃香達は？」

「大丈夫みたいだよ。何とか拮抗してるみたいだし、撤退しながら応戦して苦戦はしてない」

「彼女達にも感謝しきれません……ね」

幽華の手紙。

『新しい手を握ってくれ』、何と格調高い言葉でしょうか。

そして手を差し伸べてくれた彼女達。

桃香、愛紗、鈴々、星、白蓮、藤、雪柳。

この世界で、胸を張って生きていられるような目標をくれた。

「——その為にも」

「より早く勢力を拡大しなければ、ですか」

「ですねえ。私たちも早く前線を下げましょう。恐らく直に徐栄が出てくる」

「げっ……騎馬隊かぁ。白馬義従でもぶつける気？」

「恐らく追撃は徐栄だけになる筈ですから。反転の地点に配置していますので白蓮には働いてもらいますよ。張り切ってるみたいですし、ね」

「恋する乙女は怖いなあ。んで、呂奉先と高順はどうするの？」

「撤退するでしょうよ」

「何故？」

「旗はそのままですが、恐らく本隊は虎牢関まで引いている筈です。と云うのも、難攻不落の虎牢関、その道程までは殆ど一本道。仕掛けはし易く、多くを迎撃できると踏むでしょうし、現時点で充分に袁家に打撃を与えられたと考えるはずですから。彼奴は」

「彼奴？ ご存知なので？」

「——いえ。失言でしたね。」

「さあ、戦場の中心では危険ですから、早く戻りましょうか」

「……言いたい事は色々あるけど、了解」

霞を背負って、踵を返す。

いつぞやとは何もかもが反対ですね。

……目を覚ました時、何と言われるか。

「何をしてるのです。早く行きなさい」

手をしっしつ、と払う。

肩を竦めた枇杷。

歩き去るその背中を見つめ、前方で呂奉先と戦う桃香達を見て。残酷な世界を生き抜く儂げな少女達を見て。

そして、血に染まった手の平で、霞を抱く。

私は、間違っていない筈だ。

生き抜いて、大陸に覇を唱える。
『董卓』も、その為の礎となる。

……次の策は練ってあります。

私は、只、私の思うがままに、勝手気儘に振る舞うまで。

……私は『蚩尤』なのだから。

遙か大地と自然の理なのだから。

第二十七葉……後悔と未来の狭間の中で（後書き）

少し色々な主題が絡んでいます。
いつもより複雑かもしれません。

第二十八葉……寝た身と妬み（前書き）

おそばせながらはっぴいにゅういやあ。

おそばせながら投稿いたしまつ。

第二十八葉……………寝た身と妬み

「ん……………」

ぼんやりと霞んだ視界。

瞼が張り付いて開きにくい。身体もきつく縛られて動かない。

「董卓本隊が虎牢関に撤退したらしい」

「袁家が徐栄隊に蹴散らされて痛撃らしいぜ」

「らしいな…。忙しくなりそうだ」

朧げな耳に慌ただしい声が響く。

どうでもいい足音に、声。

お尻が冷たくて硬い。どうやら地面に縛られているのか。

「……………」

冷たさが身体を満たして行く。

胸が冷え込む。

風が、想いが、寒さに晒されて。

千切れるように、苦しい。

瞼の裏で冷たい楓の葉が舞う。

どうして裏切ったのか。

胸の炎が凍りついて溶けないまま。

（最初から、これも計画の内やったんか………？）

出逢った笑顔も嘘で。

向けた優しさも空虚で。

温かい表情の裏には、何時もあの残忍な鬼を忍ばせていたの？
幾度となく心の中で繰り返して、何度も軍を責めた。

しかし、それもお門違い、でもある。

（裏切ったなんて言って…ウチは何を言ってるんやろ）

別に裏切られた訳ではない。

勝手に期待して、舞いあがって、勘違いしたのは自分なのだから。
頭に血が上って罵詈雑言を並べて、彼を貶したのは自分自身。

（嫌われても、しゃあないなあ………）

起きたらどうなるのか。

多分今居るのは彼の陣営だろう。

顔を合わせないようにされるのだろうか。違う勢力に売り払われるのか。処刑されるのか。

（邪魔、って言われたから、なあ………）

やっぱ殺されるのかな。だったら彼の手が良いな。

「軍………」

「寝言まで私の名を………」

ふと刹那、嘆息交じりの声が、閉ざされた意識の外から聞こえた。

次に、柔かい温もりが全身を包んだ。
毛布。良い肌触りの。

「謝る気は無いですよ。桃香を霸道に導く為なればこそ、如何なる犠牲も厭わない心算ですのぞ」

（謝る筋合いなんかあらへんよ。それにしても、あの劉玄德とか言うの、羨ましいやっちゃんあ）

薄眼を開ける。すると、しゃがみ込む彼の姿。

眠っている人に言っても仕方ないですね、と彼はまた嘆息して。
小さく、小さく、

「貴女は、私の手を取る人の一人なのでしょうかね？」

（え？）

近づく顔に、ぎゅつ、と気付かれないように瞼を閉じる。
触れた頬の温かさに、はう、と息が漏れた。

「そうかどうかは解りませんが、」

手が、すつと離れた。

その直前に、冷たくなった気がした。

「障害となる事があれば、私が殺す」

首筋につつ、と冷たい汗が伝う。

蛇が巻きついたような気色の悪さ。

が、それも直ぐに引いた。

新しい足音が聞こえた。

「軍様？ 何をなさっているのですか」
「おや、愛紗」

近付いてくる足音と、遠ざかる足音。

交わった時、足音が止んだ。
音も止んだ。

何をしているんだろうか。

（ちゅう、してる……んやな）

目を開けたくない。

愛しそくにゆっくりと、耳に刺さる、優しい水音。

足音なく、距離が遠ざかって行くように感じて。

そして二つの足音が、再び遠ざかって行くのが解った。

「ずるいやんか……」

唇をなぞって、青い吐息が漏れた。

第二十九葉……………求めあうは龍と龍

空は澄んで、瞬く星々。

やけに冷える空気と肌を苛む風。ひゅう、と囁くそれは、草や木を靡かせ、深い夜の帳を彩っていた。

時折聞こえる小さな酒宴の喧騒と漏れる幽かな明かりは、どうにも義勇軍が浮かれていることを示唆している。うまうまと軍の全く狙い通りに完遂されたあの作戦は、彼らに連合軍の勝利を信じ込ませるには十二分であつたに違いない。此度の関攻めは、ひと段落ついた、と言えるが、まだまだ序の口のであるのに。

(……とは言え、少しの羽目くらいならば、外しても問題はあるまい、か)

空に横たわる天の河、龍に見えなくも無い夜空。

同じく、地上から見上げた小さな龍は、大きく息を吸い込んだ。しゃりん、と鈴の音が啼く。瑞々しい水色の髪がそよぐ。

酒で帯びた朱が、風を浴びて心地良く醒めるようだ。

「白蓮殿も、浮かれているようだったな」

今の部下と共に真つ赤になつて酒を酌み交わす、放っておけない同胞を反芻して、妙に嬉しそうに、子龍——星は呟いた。

撤退の折りに、呂布を撒いた桃香と愛紗と鈴々が帰還して直後、袁家を通り越しても尚追撃に来る徐栄隊と真つ向から激突したのは白馬義従だった。

夏侯惇が最も警戒していた、破竹の勢いの徐栄隊は、漁村を呑む大波の如く押し寄せ、油断しきつていた諸侯を激しく揺さぶっただろう。義勇軍が大きく騒げない理由は、敵への警戒と、こうして徐栄隊から痛烈な被害を受けた諸侯からの恨みを買わない為であり、それを軍が喚起したからであつた。

「ともあれ、功労者たる主を褒め称え——もとい、晩酌しに行きましようかな」

片手には瓢箪、なみなみと溜まった酒が香っている。

深い夜の闇。指先さえ溶けてしまいそうな深淵。

本来なら、提灯の一つでも持って行こうものだが。

ほぼ確実に他の連中も狙ってくる筈だ。この静かな夜に想い人と二人きり、などそう滅多にある機会では無い。灯りなどで露見してしまつては、頓挫も良い所だ。

（私にかかれば、主を闇の中から見つけることも難しくはないのですぞ）

鼻をすんすんと鳴らし、目を細め闇夜に慣らす。

…と言つても、行先は割れているのだが。

あの小高い丘の太木。

楓かどうか等知りはしないが、木登りの好きな彼の事だ、違いないだろう。

「さて、と……」

反対の手に持った徳利は一つ。

忘れたと惚けてしまおう。

どうせなら口移しでも罰はあたるまい。星はだらしなく口元を緩ませた。

そして、歩き出す。

月夜の下で。

狂おしいほどに愛おしい主君の元へ。

蒼く光る星たち。軍が目細めてその光を浴びている。

（私も、かくりたいものだ）

悠久を照らすあの星々の様に。

水面でゆらゆらと輝くそれをぐ、と流し込んだ。

嗚呼、心地よい。

「そつですねえ」

主。

「貴方を酔わせるのは、天極の龍か地極の龍か」

「はい？」

「天に横たわる龍と地に這いずる龍、どちらを望みますかな」

「ふむ。……手の届く方が良いですね」

あ…、と淡きを星は零した。

華奢な腕に、軽々と持ち上げられて、星は膝の中に収まった。

ゆっくりと優しく抱き締められて、熱い吐息が漏れる。

「主い……おなごは優しく扱わなければダメですよ？」

言葉とは裏腹に、背中を深く軍に預ける。

首を傾げて見上げて、首筋に唇を触れさせつつ。

瞳に映った軍は、悪戯っぽく笑って、

「こんな風にですか？」

優しく、優しく、星の唇に自身のそれをなぞる様に押し付けた。

んむう、と星は身を振らせても、肩を手繰り寄せて離さない。もう片手で曝け出された臍のあたりを愛撫する。徐々に紅潮していく頬は、酔いでも酸欠でも羞恥でも悦楽でも、全てを含んでいるようだ。腰から下がっている酒の入った瓢箪が宙で激しく揺れているあたり、軍の激しい優しさが窺えた。

「んぷは……」

「んあう……」

暗闇の中で、口と口から架かった銀色の橋が艶めいて煌めく。

一層星はぐったりして、より深く軍の膝の中に身体を預けた。

腰は蕩け、だらしなく口元を緩ませて、恍惚とした表情を浮かべる星の身体を、軍はしっかりと抱きしめて。

暫し惚けていた星は、回らない呂律で、

「よきゅも……お返しでしゅぞ！」

酒を一杯に口に含んで、軍に自分の艶やかな唇を押しつけた。

ごく、ごく、と軍の喉を酒が通過していく。

未だ残る酒を再び星の口へ注ぎ返して、繋ぎ目からつつ、と銀色の露が滴った。

「美味しいですよ、星」

「わらひだけが……悔しいでしゅな」

淡い暖色の瞳が揺れて、上目遣いに見上げたのは涼しげな草木と軍の飄々とした表情。

たった二回の口づけで、此方は腰を抜かしたのに。

涼しげな顔で、余裕を感じさせる彼を、恨めしそうに見つめる。

「主は、女誑しに違いない」

「よく言われます」

「むうう。可愛くないですぞ」

「可愛いのなら私の眼の前に居ますがね？」

あうう、と星は身体を小さく丸めて身じろぎをする。

軍を直視できない。顔が真っ赤になっているだろうから。

嬉しくて恥ずかしくて、幸せで、どうしようもない。

胸の奥がほわり、と温かくて、同時に、もやもやとするくらい熱い。

「……本当に女たら、」

「しっ」

軍の手が急に口を塞いだ。

何、と云う間もなく、軍の真面目な顔に、星は圧倒された。

遠くと近くに、風を切って音も無く駆ける集団を、軍は捕捉していた故。

見惚れるくらい真摯なその表情に、星は胸が締め付けられるような心地良い痛みを感じる。

その手がゆつくりと離されて、軍の瞳が星を覗き込んだ。

ふう、と安堵の嘆息をして、星が手を引こうとした、

「主——」

その時。

からん、と、空になった、宙に揺れてた瓢箪が、
甲高い音を立てて地面に落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9516v/>

ひらひらと舞う、楓の葉

2012年1月8日22時45分発行